Sun Java™ System

アイデンティティインストールパック 2005Q4M3 SP4 リリースノート

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 820-4370

目次

非推奨の API

アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 SP4 について

Sun Java™ System アイデンティティーインストールパック ソフトウェアのインストールまたはアップグレードの前に、63 ページの「インストールと更新に関する注意事項」の節を参照してください。

インストール

アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 を使用すると、Sun Java™ System Identity Manager、Sun Java™ System Identity Auditor、および Sun Java™ System Identity Manager Service Provider Edition (SPE) を新しい環境にインストールすることや、更新としてインストールすることができます。

Identity Manager、Identity Auditor、および Identity Manager SPE を Identity Manager v5.0 または任意のサービスパックから 5.0 SP6 に更新できます。それよりも古いバージョンの Identity Manager を使用している場合は、最初に Identity Manager v5.0 にアップグレードする必要があります。

製品の詳細なインストール手順については、『Identity Manager Upgrade』および『Identity Install Pack Installation』を参照してください。

注　サポートされている最小の Java バージョンは 1.4.2 です。

サポートされているソフトウェアと環境

ここでは、Identity 製品ソフトウェアと互換性があるソフトウェアや環境を示します。

- オペレーティングシステム
- アプリケーションサーバー
- ブラウザ
- データベースサーバー
- Java Runtime Environment
- Sun Identity Manager Gateway
- サポートされているリソース
- Web サーバー

注　ソフトウェア製品の開発元はソフトウェアの新しいバージョン、更新、および修正を頻繁に出荷するため、ここに公開される情報も頻繁に変更されます。インストールに進む前に、リリースノートで更新情報を確認してください。

オペレーティングシステム

- AIX 4.3.3、5.2、5L v5.3
- HP-UX 11i v1、11i v2
- Microsoft Windows 2000 SP3 以降
- Microsoft Windows 2003
- Solaris 8、9、10 SPARC および x86
- Red Hat Linux Advanced Server 2.1
- Red Hat Linux Enterprise Server 3.0、4.0
- Novell SuSE Linux Enterprise Server 9 SP1

アプリケーションサーバー

Identity Manager で使用するアプリケーションサーバーは、次のリストに特に明記されていない限り、Servlet 2.2 と互換性があり、なおかつ Java プラットフォームが搭載されている必要があります。

- Apache Tomcat
  - Version 4.1.x (JDK 1.4.2 搭載)
  - Version 5.0.x (JDK 1.4.2 搭載)
- BEA WebLogic® Express 8.1 (JDK 1.4.2 搭載)
- BEA WebLogic® Server™ 8.1 (JDK 1.4.2 搭載)
- IBM WebSphere® 6.0
- IBM WebSphere® Application Server - Express Version 5.1.1 (JDK 1.4.2 搭載)
- Sun™ ONE Application Server 7
- Sun Java™ System Application Server Platform Edition 8
- Sun Java™ System Application Server Platform Edition and Enterprise Edition 8.1

注 現在使用しているアプリケーションサーバーが JDK 1.4.2 をサポートしていない場合は、アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 SP4 をインストールする前にベンダーに問い合わせて、JDK 1.4.2 をサポートするアプリケーションサーバーにアップグレードした場合の影響について検証してください。

ブラウザ

- Microsoft Internet Explorer 5.x 以降
- Mac OS X 10.4.2 以降での Safari v2.0 以降
- Mozilla 1.78 (JRE 1.5 搭載)
- Firefox 1.04、1.05、1.06 (JRE 1.5 搭載)

リポジトリデータベースサーバー

- IBM® DB2® Universal Database for Linux、UNIX®、および Windows® (Version 7.x、8.1、8.2)
- Microsoft SQL Server™ 2000
- MySQL™ 4.1
- Oracle 9i® および Oracle Database 10g、10gR1、10gR2®

Sun Identity Manager Gateway

Windows Active Directory、Novell NetWare、Novell GroupWise、Exchange 5.5、Remedy、Lotus Domino、または RSA ACE/Server のリソースを設定する場合は、Sun Identity Manager Gateway をインストールする必要があります。

サポートされているリソース

Identity 製品ソフトウェアは、次のリソースをサポートします。

CRM (Customer Relationship Management)

- Siebel 6.2、7.0.4、7.7、7.8

データベース

- IBM® DB2® Universal Database for Linux、UNIX®、および Windows® (7.x、8.1、8.2)
- Microsoft® Identity Integration Server (MIIS) 2003
- Microsoft SQL Server 2000
- MySQL™ 4.1.x、5.x
- Oracle® 8i、9i、10g Release 1、10g Release 2
- Sybase Adaptive Server® 12.x

ディレクトリ

- LDAP v3
- Microsoft® Active Directory® 2000、2003
- Novell® eDirectory on Novell NetWare 5.1、6.0
- Open LDAP
- Sun™ ONE Directory Server 4.x
- Sun Java™ System Directory Server 5 2004Q2、2005Q1

注意

- Identity Manager のテストは Sun™ ONE Directory Server と Open LDAP で行われましたが、ほかにも、v3 と互換性のある LDAP サーバーの中には、リソースアダプタへの変更なしで機能するものもあります。
- Active Sync を使用している場合、Sun Java™ System Directory Server 5 2005Q1 では Directory Server の旧バージョン形式の更新履歴ログプラグインに対するパッチが必要です。このパッチは、「通常の」レプリケーションに対してのみ必要です。MMR レプリケーションに対しては必要ありません。

ERP (Enterprise Resource Planning)

- Oracle Financials on Oracle Applications 11.5.9、11.5.10、12
- Peoplesoft® PeopleTools 8.1 ～ 8.4.2 with HRMS 8.0 ～ 8.8
- SAP® R/3 v4.5、v4.6
- SAP® R/3 Enterprise 4.7 (SAP BASIS 6.20)
- SAP® NetWeaver Enterprise Portal 2004 (SAP BASIS 6.40)
- SAP® NetWeaver Enterprise Portal 2004s (SAP BASIS 7.00)
- mySAP ERP ECC 5.0 (SAP 5.0)

ヘルプデスク

- Remedy® Help Desk 4.5、5.0

メッセージプラットフォーム

- Blackberry RIM Enterprise Server 4+ (汎用 Windows スクリプトアダプタを使用)
- Sun Java System Messaging Service および Calender Service
- Lotus Notes® 5.0、6.5、6.5.4 (Domino)
- Microsoft® Exchange 5.5、2000、2003

- Novell® GroupWise 5.x、6.0

注 Microsoft Exchange 2000 および 2003 の管理には、Microsoft Windows Active Directory 2000 および 2003 リソースが使用されます。

メッセージキュー

- JMS Message Queue Listener

オペレーティングシステム

- HP OpenVMS 7.2
- HP-UX 11.0、11i v1、11i v2
- IBM AIX® 4.3.3、5.2、5L v5.3
- IBM OS/400® V4r3、V4r5、V5r1、V5r2、V5r3、V5r4
- Microsoft Windows® NT® 4.0
- Microsoft Windows® 2000、2003
- 汎用 Windows スクリプトアダプタ (ゲートウェイを使用)
- Red Hat Linux 8.0、9.0
- Red Hat Linux Advanced Server 2.1
- Red Hat Linux Enterprise Server 3.0、4.0
- Sun Solaris™ 8、9、10
- SuSE Enterprise 9

セキュリティーマネージャー

- ActivCard® 5.0
- eTrust CA-ACF2® Security
- Natural
- IBM RACFR
- スクリプトホスト
- INISafe Nexess 1.1.5
- RSA® SecurID® 5.0、6.0
- RSA® SecurID® 5.1、6.0 for UNIX
- eTrust CA-Top Secret® Security 5.3

Web アクセス制御

- IBM Tivoli® Access Manager 4.x、5.1
- Netegrity® Siteminder® 5.5
- RSA® ClearTrust® 5.0.1
- Sun™ ONE Identity Server 6.0、6.1、6.2
- Sun™ Java System Identity Server 2004Q2
- Sun™ Java System Access Manager 6 2005Q1、7 2005Q4

Web サーバー

注 Identity Manager では、アプリケーションサーバーと Web サーバーの統合は必要ありません。Web サーバーを使用して、ロードバランスの改善と HTTPS プロトコルによるセキュリティーの向上を図ることができます。

- Apache 1.3.19
- iPlanet 4.1
- Microsoft Internet Information Server (IIS) 4.0、5.0
- Sun™ ONE Web Server 6

サポートされなくなるソフトウェア

Identity Manager では、アプリケーションサーバー、データベースリポジトリ、管理するリソースとして使用されてきた、次のソフトウェアのサポートを打ち切る予定です。サポートは、Identity Manager の次回の主要リリースが登場するまで続けられます。これらのソフトウェアパッケージの最新バージョンへの移行については、カスタマサポートまでお問い合わせください。

データベースサーバー

- Oracle 8*i*
- IBM DB2 Universal Database for Linux、UNIX、および Windows 7.0

オペレーティングシステム

- Solaris 7

リソース

- Microsoft Exchange 5.5
- IBM DB2 7.0

NT4 リソースアダプタの公式サポート

改善、向上された新機能を最新のリリースに搭載するにあたり、旧バージョンのサポートを終了 (EOL: End-of-Life) することをご了承ください。EOL の計画は、Microsoft の NT4 オペレーティングシステムのサポート終了に基づいています。Sun は NT オペレーティングシステムのサポートを終了しますが、その他の NT アダプタ機能は引き続きサポートします。Sun は NT4 オペレーティングシステムを使用する顧客に対するサポートを 2006 年末まで継続する予定です。

API のサポート

Identity Manager v6.0 API (アプリケーションプログラミングインタフェース) には、次の表に示す public クラス (および public または protected メソッド、または public クラスのフィールド) が含まれます。

API のタイプ	クラス名
セッション	com.waveset.msgcat.* com.waveset.util.* com.waveset.object.* com.waveset.exception.* com.waveset.expression.* com.waveset.config.* com.waveset.session.SessionUtil com.waveset.session.ScriptSession com.waveset.session.SessionFactory com.waveset.session.Session com.waveset.session.UserViewConstants
アダプタ	com.waveset.adapter.* com.waveset.util.Trace
ポリシー	com.waveset.policy.PolicyImplementation com.waveset.policy.StringQualityPolicy

タスク	com.waveset.task.Executor com.waveset.task.TaskContext
UI	com.waveset.ui.FormUtil com.waveset.ui.util.RequestState com.waveset.ui.util.html.*
ワークフロー	com.waveset.provision.WorkflowServices com.waveset.session.WorkflowServices com.waveset.workflow.WorkflowApplication com.waveset.workflow.WorkflowContext

Identity Manager SPE には、次の表に示す public クラスが追加されています。

API のタイプ	クラス名
SPE	com.sun.idm.idmx.api.IDMXContext com.sun.idm.idmx.api.IDMXContextFactory com.sun.idm.idmx.auditor.* com.sun.idm.idmx.txn.TransactionPersistentStore com.sun.idm.idmx.txn.TransactionQuery com.sun.idm.idmx.txn.TransactionSummary

これらのクラスは、公式にサポートされる唯一のクラスです。これらの表に示されていないクラスを使用する場合は、サポートされるクラスへの移行が必要であるかどうかをカスタマサポートまでお問い合わせください。

非推奨の API

135 ページの「非推奨の API」では、このリリースで非推奨になったすべての Identity Manager API (アプリケーションプログラミングインタフェース) とその代替となる API (存在する場合) の一覧を示します。

サポート終了

Sun では、お客様が求める品質の基準を達成するために当社製品を進化させることに注力しています。改善、向上された新機能を最新のリリースである Identity Manager v6 に搭載するにあたり、旧バージョンのサポートを終了 (End-of-Life) することをご了承ください。保守計画から外れたリリース上での実行を避けるために、できるだけ早く移行計画を開始されることをお勧めします。

ソフトウェアサポートのサービス終了 (EOSL: End of Service Life)

EOSL 期間中のサポートは、「完全サポート期間」と「限定サポート期間」の 2 段階で提供されます。完全サポート期間の長さは製品によって異なります。製品別の完全サポート期間および限定サポート期間の一覧については、以下を参照してください。

完全サポート期間

完全サポート期間中は、`http://www.sun.com/service/servicelist/` で説明しているとおり、お客様と Sun とのサポート契約 (適用可能なサービスリストを含む) に従ってお客様にサポートが提供されます。ただし、ソフトウェア製品の EOL が発表されると、お客様がそのソフトウェア製品のソフトウェア更新およびアップグレードにアクセスすることはできなくなります。

限定サポート期間

限定サポート期間中は、`http://www.sun.com/service/servicelist/` で説明しているとおり、お客様と Sun とのサポート契約 (適用可能なサービスリストを含む) に従ってお客様にサポートが提供されます。ただし、Sun にバグを報告したり、Sun から新しいパッチを入手する権利はなくなります。完全サポート期間中と同様、ソフトウェア製品の EOL が発表されると、お客様がそのソフトウェア製品のソフトウェア更新およびアップグレードにアクセスすることはできなくなります。

Identity Manager 製品の EOSL に関する注意事項

以下に具体的なスケジュールを示します。Identity Manager 6.0 (2005Q4M3) へのアップグレード計画の支援については、カスタマサポートまでお問い合わせください。

- Identity Manger 2005Q4M3 の完全サポートは 2008 年 5 月 25 日まで、限定サポートは 2012 年 5 月 25 日まで継続される予定です。
- Identity Manager 5.5 および Identity Auditor 1.5 とすべてのサービスパックを含む Identity Manager 2005Q3M1 の完全サポートは 2007 年 8 月 11 日まで、限定サポートは 2011 年 8 月 11 日まで継続される予定です。

- Identity Manager 5.0 とすべてのサービスパックの完全サポートは 2007 年 8 月 11 日まで、限定サポートは 2011 年 8 月 11 日まで継続される予定です。
- Identity Manager 2005Q3M3 は 2006 年 10 月までサポートされ、今後のサービスパックの提供はありません。
- Identity Manager 2005Q1M3 は 2006 年 3 月までサポートされ、今後のサービスパックの提供はありません。
- Lighthouse 4.1 (すべてのサービスパックを含む) は 2006 年 3 月までサポートされ、今後のサービスパックの提供はありません。
- Lighthouse 4.0 (SP1 を含む) のサポートは 2004 年 9 月で終了しました。
- Lighthouse 3.1 (すべてのサービスパックを含む) のサポートは 2005 年 9 月で終了しました。
- Lighthouse 2.0 (すべてのパッチレベルを含む) のサポートは 2004 年 5 月で終了しました。
- Lighthouse 1.x (1.6 を含む) のサポートは 2004 年 5 月で終了しました。

アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 SP4 の機能

Sun Java™ System アイデンティティーインストールパックソフトウェアのインストールまたはアップグレードの前に、リリースノートに記載されているインストールとアップグレードに関する注意事項、および最新の Identity Manager 2005Q4M3 サービスパックに付属するドキュメントを参照してください。

このリリースの新機能と解決された不具合

この節では、アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 SP4 の新機能の概要と詳細について説明します。詳細については、この章の各機能別の節を参照してください。

管理者インタフェース

- **サーバータスク**を表示するとき、「**すべてのタスク**」タブ上の「**開始時刻**」列が正確に時系列順でソートされるようになりました。以前は、「**開始時刻**」列が適切にソートされていませんでした。(ID-16783)
- 「**アカウントのリスト**」タブ (「アカウント」> 「アカウントのリスト」) 上でユーザー検索機能を実行したとき、ユーザーが 1 つの組織につき一度だけ表示されるようになりました。以前は、検索の結果、同じユーザーが 1 つの組織で何回も表示される場合がありました。(ID-16795)

  関連情報 : 「アカウントのリスト」タブのアカウントツリーテーブルに関する別の問題については、22 ページの「既知の問題点」の節を参照してください。
- アカウントツリーテーブルでユーザー検索を実行したとき、返されたユーザーのマネージャー属性にマネージャーのフルネームが表示されるようになりました。以前は、マネージャーの ID のみが表示されていました。(ID-14645)
- 「**ユーザーパスワードの変更の結果**」ページの「**ステータス**」列が削除されました。また、「**答えの変更結果**」、「**すべての変更結果**」、および「**パスワードの変更結果**」の各ページからも「**ステータス**」列が削除されました。「**ステータス**」列にはデータが表示されず、目的を果たしていませんでした。(ID-16889)
- フォーム上で **DatePicker** フィールド型の値をクリアできるようになりました。(ID-17022)
- 「**保留中の承認**」テーブルのソートが機能するようになりました。以前は、保留中の承認があるユーザーはこのテーブルをソートできませんでした。代わりに、「結果ページをフォーマットできません。タスク ID または結果がありません」というメッセージが表示されていました。(ID-17304)

- 表示プロパティー `autocomplete` を `off` に設定すると、テキスト入力フィールドに対して、`autocomplete="off"` が設定されるようになりました。(`autocomplete` を `off` に設定すると、ユーザーの資格情報を自分のコンピュータに保存するように勧める通知がブラウザで表示されなくなる。)

  XPRESS では、表示プロパティーを追加することによって、このカスタマイズを行うことができます。`off` 以外の値を指定すると、autocomplete 属性は設定されません (プロパティーを設定しない場合と同じ)。(ID-17045)
- 次のページで、クロスサイトスクリプティングの脆弱性が識別および修正されました (ID-17241):
  - task/taskLaunch.jsp
  - user/processLaunch.jsp
  - user/requestLaunch.jsp

監査

- 監査レポートの **Change** セクションで、ロール作成に関する監査レコードが、ロールに関する追加情報 (割り当てられたリソース、サブロール、スーパーロール、ロール属性など) を提供するようになりました。(ID-16327)

パスワード同期

- Microsoft Windows Server 2003 SP2 で導入された動作上の変更の結果、Identity Manager の PasswordSync DLL (`lhpwic.dll`) の変更が必要になりました。SP2 では、Windows から PasswordSync に送信されるパスワード変更通知に、不適切な形式のコンピュータアカウントデータが含まれる可能性があります。その結果、PasswordSync が例外をスローする可能性があります。最終的に Microsoft の Local Security Authority Subsystem (LSASS) コンポーネントがハングアップし、ドメインコントローラの再起動が必要になる可能性もあります。

  コンピュータアカウントデータは PasswordSync で処理されない (ユーザーアカウントのみが処理される) ため、すべてのコンピュータアカウント変更通知を受信後ただちに破棄するように PasswordSync DLL が更新されました。

  Windows コンピュータアカウントは「$」(ドル記号) で終わります。そのため、PasswordSync は $ で終わるアカウントを処理しません。これには、$ で終わるユーザーアカウントも含まれます。(ID-17245)
- PasswordSync トレースログが更新されました。PasswordSync/JMS が Windows Active Directory から Identity Manager へパスワード変更通知を転送したときに、対応するユーザーが Identity Manager に存在しなければ、適切なメッセージがトレースログに記録されるようになりました。以前は、このような状況では、PasswordSync は説明を記録することなく null ポインタ例外をスローしていました。(ID-16920)

- PasswordSync (lhpwic.dll) がクラッシュした場合に「ディレクトリサービス復元」モードで Active Directory ドメインコントローラを起動しても、連続的な再起動サイクルが発生しなくなりました。(ID-16695)
- PasswordSync (lhpwic.dll) を実行する Active Directory ドメインコントローラ上での「out of handle」エラーを防止するため、PasswordSync が更新されました。ドメインでコンピュータアカウントが更新されたとき、ドメインコントローラは誤って Identity Manager の PasswordSync DLL にパスワード更新通知を送信します。以前の DLL では、その結果、検索ハンドルが適切に閉じられませんでした。(ID-16495)

  関連情報 : ハンドルリークの原因となっていた別の PasswordSync の問題が解決されました。(ID-16827)
- PasswordSync DLL が例外をスローした場合に、新しい Windows レジストリエントリに基づいてダンプファイルが生成されるようになりました。

  キー名 : dumpFilebase

  型 : REG_SZ

  このキーは、PasswordSync を実行する Windows ドメインコントローラに追加されるはずです。このレジストリキーには、c:¥temp などの、メモリーダンプの書き込み先の完全修飾ディレクトリパスが設定されるはずです。

  このレジストリ値が設定されている場合、パスワード処理中に例外がキャッチされるたびにメモリーダンプが書き込まれます。

  注 : Windows 2000 サーバーでは、適用されているサービスパックに関係なく、設定されたディレクトリに DbgHelp.dll をインストールする作業がさらに必要です。このファイルは Microsoft から入手できます。このファイルのリリースバージョンは 5.1 以上である必要があります。このファイルは次のサイトからダウンロードできます。

  http://www.microsoft.com/whdc/DevTools/Debugging/default.mspx

  Windows 2000 上では、DbgHelp.dll がインストールされていない場合、ダンプが生成されません。

  ダンプファイルには、次の形式で名前が付けられます。

  lhpwic-YYYYMMDD-HHmm-xxxxx.dmp

  この名前で、YYYYMMDD はダンプの日付、HHmm はダンプの時刻 (24 時間制)、xxxxx はアプリケーションのスレッド番号です。

  ダンプファイルは手動で削除してください。これらのファイルのサイズは、Windows Local Security Authority Subsystem (LSASS) プロセスのサイズに応じて、20M バイトから 100M バイト超の範囲で変動します。これらのダンプファイルを削除しないと、ディスクの容量に制限のあるシステムでは、時間とともにディスクの空き容量が不足する可能性があります。(ID-17552)

調整

- 調整中に、accountId による検索で null ポインタ例外が発生する可能性がありました。この問題は修正されました。(ID-17186)

レポート

- 「Today's Activity Report」などの監査ログレポートに、次のイベントが記録されるようになりました。
  - ユーザー ID またはパスワードなしでユーザーを作成する試み
  - 存在しないロールでユーザーを作成する試み (および、存在しないロールを既存のユーザーに割り当てる試み)
  - アカウント ID ポリシーに違反するユーザーを作成する試み
  - アクセスできないリソースを割り当ててユーザーを作成する試み (および、アクセスできないリソースを既存のユーザーに割り当てる試み)
  - 存在しないユーザーを削除する試み

  これらのイベントは、システムログにも書き込まれます。

  以前は、ユーザーの作成および削除の試みの失敗は、システムログのみに書き込まれていました。(ID-13284)

- Identity Manager リポジトリとして Oracle データベースを使用するとき、Identity Manager が acctAttrChanges に対して CLOB データ型をサポートするようになりました。

  デフォルトの VARCHAR(4000) データ型を使用する代わりに CLOB を使用することの利点は、はるかに大きな変更セットをログに記録できるようになる点です。ただし、CLOB アクセスルーチンの独自性が原因で、この列に対するクエリーの実行が難しくなるという面もあります。

  より大きな変更セットを記録できるようにするには、log.acctAttrChanges 列の型を VARCHAR(4000) から CLOB に変更し、それに合わせて RepositoryConfiguration 設定オブジェクトの maxLogAcctAttrChangesLength 属性を調整する必要があります。(ID-15326)

リソース

- Solaris リソースアダプタで、次回ログイン時のパスワード変更をユーザーに強制できるようになりました。この機能を有効にするには、スキーママップの「アイデンティティーシステムユーザー属性」列に `expirePassword` を、「リソースユーザー属性」列に `force_change` を追加します。この属性の型は string に設定する必要があります。(ID-17032、ID-17146)
- Oracle リソースアダプタが更新され、アダプタがユーザーの責任を追加、変更、または削除できない場合により詳細なエラーメッセージが提供されるようになりました。アダプタが更新できなかった責任が一覧表示されるようになりました。(ID-16656)

- Sun Access Manager リソースアダプタが SSL モードで Access Manager に接続できるようになりました。以前は、リソースアダプタ設定をテストするとき、管理者は「AuthContext cannot be created」というエラーを受信していました。(ID-16454)
- Microsoft ADSI ゲートウェイが更新されました。Identity Manager にログオンするユーザーの認証に Active Directory リソースが使用されている場合、ユーザーの Windows パスワードの期限が切れたときには、Identity Manager の UI で、ユーザーがパスワードの変更を促されるようになりました。以前は、パスワードの期限が切れたことを通知するエラーメッセージがユーザーに表示されるだけでした。(ID-16681)
- Remedy サーバーへのアクセスのサポートが変更されました。ゲートウェイが Remedy API ライブラリのバージョン 4.5 に依存しなくなりました。今後は、ゲートウェイディレクトリに Remedy ライブラリを配置することが必要になります。これらのライブラリは Remedy サーバー上にあります。(ID-17361、ID-16551)
- この Service Pack を適用した Identity Manager は、Remedy バージョン 6.3 および 7.0 をサポートします。ただし、これらのバージョン間には、サンプルデータ、デフォルト、および初期設定に関して多数の重要な違いがあります。たとえば、バージョン 6.3 では「チケット」スキーマの名前は HPD:HelpDesk ですが、7.0 では HPD:Help Desk に変更されています。(ID-17361、ID-14611)
- Active Directory リソースを設定するとき、リソース認証プロパティーのセクションでドメインを指定できるようになりました。正しい Active Directory ドメインのみに対してログインが認証されるように、管理者はマルチドメイン環境またはフォレスト環境内のドメインを指定するべきです。ドメインが指定されない場合、ログイン試行が 1 回でも失敗した時点でユーザーをロックアウトできます。これは、第一ドメインと信頼関係を共有する各ドメインで、そのユーザーのパスワード入力失敗の情報を収集可能だからです。(ID-16603)
- SecurId Unix リソースアダプタに関する問題が修正されました。この修正が行われる前は、ユーザーの姓または名 (またはその両方) を変更すると、SecurId リソースからユーザーのグループが削除されていました。(ID-16914)

スケジューラ

- スケジューラが更新され、SystemLog (syslog) エントリ「`'EVNT00', LockedByAnother`」の出力が抑制されるようになりました。クラスタ環境では、このエラーメッセージがログに出力される回数が多すぎました。(ID-15714)
- スケジューラが更新され、Identity Manager の 2 つのインスタンスが両方とも同時に同じワークフローを実行する可能性が減少しました。この更新が行われる前は、複数のスケジューラがすべて同じリポジトリを使用するクラスタ環境で、この問題が発生しやすくなっていました。(ID-16500)

解決されたその他の不具合

16382

既知の問題点

- 「**アカウントのリスト**」タブ (「アカウント」> 「アカウントのリスト」) 上のアカウントツリーテーブルに「**マネージャー**」列が表示されません。(「**名前**」、「**姓**」、および「**名**」の各列のみが表示される。)

  この問題を修正するには、ビジネスプロセスエディタを使用して UserUIConfig 設定オブジェクトを編集します。

  `<AppletColumns>` 要素を探して、リストの末尾に次の XML 行を挿入します。

  ```
  <Object name='idmManager'>
    <Attribute name='label' value='UI_ATTR_MANAGER'/>
  </Object>
  ```

  変更を保存して、アプリケーションサーバーを再起動します。(ID-17710)
- 管理者インタフェースで、送信済みの委任 (「**承認**」> 「**自分の承認作業項目の委任**」) を取り消す唯一の方法は、「終了日」を「開始日」と同じに (または過去の日付に) 設定することです。(ID-16790、ID-16799)
- TaskScheduleViewer で、エントリに必要な形式と同じ形式で開始日がフォーマットされません。その結果、タスクスケジュールを編集するときに開始日を修正する必要があります。(ID-5675)
- デフォルトでは、ユーザーが秘密の質問への回答を入力するときに、入力中の文字列はアスタリスク (*) でマスクされます。この動作の影響で、一部の IME (input method editor) の機能が無効になり、日本語の漢字やひらがなどの文字を入力することができません。

  ユーザーが IME を使用して秘密の質問に回答できるようにするには、「デバッグ」ページを使って「Question Login Form」ユーザーフォームの `secret` プロパティーの値を `false` に変更します。

  ```
  <Property name='secret' value='false'/>
  ```

  注 : この値を false に設定すると、秘密の質問の回答が画面上で読めるようになるため、セキュリティーリスクが生じます。回答の暗号化保存には影響ありません。(ID-7424)
- Identity Manager 管理者インタフェースに表示される設定オプションの一部は、Identity Manager SPE では使用されません。(ID-10843) 該当するものには次のようなオプションがあります。

  - リソースウィザード設定オプション : アカウント除外規則、承認者、および組織
  - ロール属性
- FireFox 1.5 で正しく表示されない Identity Manager フォームがあります。たとえば、Tabbed User Form 上でブラウザはラベルを折り返さないので、すべてを右へと表示していきます。(ID-13109)
- ユーザーレポートとユーザー質問レポートで「次の条件と一致するユーザーのみをレポート : ユーザー名」チェックボックスが 2 回表示されます。一方のチェックボックスには I-help がありますが、他方にはありません。いずれのチェックボックスを使用しても、正しいデータが返されます。(ID-13155)
- SPE のエンドユーザーページにログインすると HTTP Status 500 エラーが発生する場合、SPE 設定で複数の暗号化鍵が指定されている可能性があります。アップグレードプロセス中に Identity Manager で生成される新しい暗号化鍵がこれの原因になることがあります。

  回避策は、SPE 設定ディレクトリからそれらの暗号化鍵を削除し、Identity Manager から再エクスポートすることです。(ID-13162)
- ユーザーの電子メール属性に一度設定した値は削除できません。値を変更することはできますが、設定を null に戻すことはできません。(ID-13164)
- 「ロール」フォームを修正して showSuperAndSubRoles 変数を 0 から 1 に変更した後で、既存のサブロールを含むスーパーロールオブジェクト定義ファイルを「設定」タブからインポートした場合、それらのサブロールは <SuperRoles> セクションを含むように変更されません。ただし、Identity Manager のグラフィカルユーザーインタフェースを使用してスーパーロールを作成する場合は、そのスーパーロールによって参照されるサブロールが更新されます。(ID-15053)

  この問題は、Identity Manager の外部で作成され、システムにすでに存在するロール (サブロールまたはスーパーロール) への参照を持つロールに関して発生する可能性があります。

  これらのロールをインポートするとき、システムにすでに存在するロールは、新しい関係を反映するように更新されません。たとえば、参照整合性は維持されません。この方法でロールをインポートする場合に参照整合性をチェックおよび修正するには、RoleUpdater を使用します。

  回避策 : 「ロール」で説明されている ID-15482 を参照してください。

- Microsoft SQL Server 2000 のロック特性が原因で、Identity Manager における特定の高負荷状況下でデッドロックエラーが発生する可能性があります。(ID-16068)

  回避策：ネイティブモードを使用して、Microsoft SQL Server 2000 から Microsoft SQL Server 2005 にアップグレードします。

  スナップショット遮断と呼ばれる新しい機能を持つ Microsoft SQL Server 2005 は、Identity Manager との組み合わせで高負荷下でテストされており、SQL Server 2000 と同じデッドロックの問題は発生しません。

  また、一部の顧客の環境では、次のように `READ_COMMITTED_SNAPSHOT` を使用するようにデータベースを変更することが有効であることが確認されています。

  ```
  ALTER DATABASE dbname SET READ_COMMITTED_SNAPSHOT ON
  </quote>
  ```

- WebSphere データソースおよび Oracle JDBC ドライバ間の相互運用性の問題により、Identity Manager とともに WebSphere データソースを使用する Oracle の顧客は、Oracle 10g R2 および対応する JDBC ドライバを使用する必要があります。Oracle 9 JDBC ドライバは、WebSphere データソースと Identity Manager の組み合わせでは使用できません。10g R2 よりも前のバージョンの Oracle を使用しており、Oracle を 10g R2 にアップグレードできない場合は、WebSphere データソースではなく Oracle の JDBC Driver Manager を使用して Oracle データベースに接続するように Identity Manager リポジトリを設定します。(ID-16167)

  詳細については、次の URL を参照してください。

  `http://www-1.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg21225859`

- 日本語など複数バイトの言語環境では、「ユーザーの編集」画面のタブ上で、一部の単語が折り返されることがあります。(ID-16054)

  回避策：タブ上で単語が折り返されないようにするには、`$WSHOME/styles/customStyle.css` に次の内容を追加します。

```
table.Tab2TblNew td {
background-image:url(../images/tabs/level2_deselect.jpg);
background-repeat:repeat-x;background-position:left top;
background-color:#C4CBD1;
border:solid 1px #8f989f;
white-space:nowrap;
}

table.Tab2TblNew td.Tab2TblSelTd {
border-bottom:none;
background-image:url(../images/tabs/level3_selected.jpg);
background-repeat:repeat-x;background-position:left bottom;
background-color:#F2F4F3;
border-left:solid 1px #8f989f;
border-right:solid 1px #8f989f;
border-top:solid 1px #8f989f;
white-space:nowrap;
}
```

以前に追加された機能および修正されたバグ

以前に追加された機能

この節では、アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 用の以前のサービスパックで追加された機能について説明します。

インストールと更新

- リポジトリとして SQL Server 2000 SP4 を使用し、さらに Microsoft の JDBC ドライバを使用する場合は、SQL Server 2000 Driver for JDBC SP3 ドライバを使用する必要があります。(ID-9917)
- `waveset.serverId` システム属性が追加されました。配備内の複数の Identity Manager インスタンスが、あるサーバー上の同一のリポジトリを指している場合、この属性を使用して一意のサーバー名を設定します。(ID-11578)
- Identity Manager で、リポジトリとして Oracle Database 10g Release2® がサポートされました。(ID-12908)
- インストーラは、デフォルトの Configurator アカウントの名前変更、削除、または無効化を行なったインストール環境のアップグレードをサポートするようになりました。インストーラは、アップグレードの事後処理時に、update.xml をインポートできる適切な資格を持ったユーザー名とパスワードを要求してきます。間違ったユーザー名またはパスワードを入力した場合、正しい値を 3 回まで入力し直すことができます。エラー情報は背後のテキストボックスに表示されます。(ID-13006)

  手動インストールの場合、入力した資格を UpgradePostProcess 手順に引き渡すには、`-U <username> -P <password>` フラグを指定する必要があります。
- Identity Manager が、グラフィックスカードのないマシンにも正しくインストールされるようになりました。(ID-14258)

管理者インタフェースとユーザーインタフェース

- **「設定」> 「サーバー」> 「サーバー設定の編集 / サーバーのデフォルト設定の編集」**パネルに「電子メールテンプレート」タブが追加されました。このタブでは、デフォルトのまたはサーバーごとの SMTP ホストを設定します。すべての電子メールテンプレート内の `$(smtpHost)` 変数は、ここで設定された値に置き換えられます。SMTP ホストのフィールドが空白の場合は、このタブではサーバー名が使用されます。(ID-3574)
- 「ユーザーの検索」画面で「クエリーのリセット」をクリックしたとき、名前のドロップダウンと表示する結果の制限値が初期状態にリセットされるようになりました (ID-8961)。

- Identity Manager 管理者インタフェースの「ユーザーパスワードの変更」ページと「ユーザーパスワードのリセット」ページに、検索タイプのメニューオプションが追加されました。これらのドロップダウンオプションから、パスワードの変更やリセットを必要とするユーザーを検索するオペランドとして **starts with**、**contains**、**is** などを選択できます。(ID-8965)
- 「デバッグ」ページに、**export default** オプションと **export all** オプションが追加されました。これらのオプションはコンソールのオプションと同様に機能します。ただし、「デバッグ」ページのオプションでは、エクスポート先のファイル名を選択できません。その代わり、「デバッグ」ページからの情報を保存できる `export<`***date***`>.xml` という名前のファイルが、Identity Manager によって作成されます。(ID-9270)
- 「cc」アドレスを含む電子メールテンプレートのインポートがサポートされました。(ID-9768)
- 「アイデンティティー属性」ページに、アイデンティティー属性と関連してパスワード生成のステータスを説明する「パスワード」セクションが追加されました。新しいユーザーに対し、デフォルト値や規則に基づいて、またはパスワードを生成するアイデンティティーシステムのアカウントポリシーを割り当てることによってパスワードを割り当てるように、Identity Manager を設定できます。(ID-10274、12560)
- ポリシー編集に関連するエラーメッセージが改訂されました。(ID-12187)
- Identity Manager にデフォルトのマネージャー属性が導入され、組み込みマネージャー - 従業員関係がサポートされました。この情報は、Identity Manager ユーザーオブジェクトに格納されます。詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。(ID-12416)
- アイデンティティー属性をリソースに対する最近の変更に基づいて設定できるようになりました (編集または作成操作のいずれか)。(ID-12678) アイデンティティー属性が最後に Identity Manager 管理者インタフェースで保存されてからリソースが変更された場合、「アイデンティティー属性」ページに次のメッセージが表示されます。「アイデンティティー属性が最後に保存されてから 1 つ以上のリソースが修正されています。これらの変更をアイデンティティー属性に適用すると、「リソースの変更に基づいてアイデンティティー属性を設定」ページに反映されます。」Identity Manager に「リソースの変更に基づいてアイデンティティー属性を設定」ページへのリンクが表示されるので、変更されたリソースのスキーママップからどの属性をアイデンティティー属性のソースまたはターゲットとして使用するかを選択できます。

  リソースウィザードまたは「アカウント属性」ページからリソースを保存すると、最近のリソースの変更に基づいてアイデンティティー属性を設定するかどうかを指示するページが Identity Manager に表示されます。「**はい**」を選択すると、「リソースの変更に基づいてアイデンティティー属性を設定」ページに進みます。「**いいえ**」を選択すると、リソースリストに戻ります。

このページを無効にするには、「**次回から質問しない**」を選択します。この操作によって、ログインユーザーの `idm_showMetaViewFromResourceChangesPage` プロパティーが false に設定され、ページが表示されなくなります。

- MultiSelect オブジェクトで `noApplet=true` および `sorted=true` プロパティーを設定すると、利用可能な値がソートされるようになりました。(ID-12823)
- 静的リストを含む設定オブジェクトの変更が、アカウントのツリーテーブルで検出されませんでした。たとえば、管理者の管理する組織は、設定オブジェクトから静的リストを取得する規則で決定されていました。以前は、設定オブジェクトへの変更を検出するにはサーバーを再起動する必要がありました。このリリースでは、ユーザーが現在のセッションからログアウトし再度ログインするだけで、ツリーテーブルが設定オブジェクトに合わせて変更されます。(ID-14442)
- DatePicker に、特定の日付だけをカレンダから選択できる日付範囲セットを設定できるようになりました (ID-10100)。
- サーバーの設定テンプレートと電子メールの変更テンプレートが変更され、SMTP サーバー上で SSL または認証を実行するかどうかを管理者が決定できるようになりました。(ID-12465)
- continueLogin.jsp ページにメッセージが正しく表示されるようになりました。(ID-13193)
- Identity Manager 2005Q4M3 SP3 のサポートを提供するために、次の変更が Identity Manager 7.1 Identity Manager Integrated Development Environment (IDE) に加えられました。(ID-14089、15211)
  - Identity Manager デバッガがデフォルトで有効になりました。

    本稼働環境に配備する場合、システム設定プロパティーを `serverSettings.default.debugger.enabled=`**`false`** に設定することをお勧めします。
  - Identity Manager デバッガで、規則ライブラリでのブレークポイントの設定がサポートされるようになりました。
  - 直接モードのパスワード同期を行うには、`web.xml` で `SimpleRpcHandler` を設定する必要があります。`SimpleRpcHandler` は特定の `RemoteSession` 呼び出しに干渉します。直接モードのパスワード同期を使用していない場合、`RemoteSession` の呼び出しに関して問題が発生するときは、`rpcrouter2` サーブレットから `SimpleRpcHandler` 設定を削除することで、`RemoteSession` の問題を解決できます。

    `web.xml` の次のエントリを変更します。

    ```
    <init-param>
    <param-name>handlers</param-name>
    <param-
    value>com.waveset.rpc.SimpleRpcHandler,com.waveset.rpc.PasswordSyn
    cHandler</param-value>
    </init-param>
    ```

    変更後のエントリは次のとおりです。

```
<init-param>
<param-name>handlers</param-name>
<param-value>com.waveset.rpc.PasswordSyncHandler</param-value>
</init-param>
```

RemoteSession および直接モードのパスワード同期を使用する場合は、RemoteSession の呼び出しを処理するための独立したサーブレットを設定します。

- 十分な権限を持たないユーザーが組織オブジェクトの削除を試行すると、組織オブジェクトのロックが解除されないという問題が解決されました。(ID-14942)

フォーム

- フォームの <Expansion> 内で使用される <set> が、正常に機能するようになりました。(ID-9617)
- 検証規則のメッセージが、サーバーではなくクライアントのロケールで表示されるようになりました。(ID-12780)

ゲートウェイ

- ゲートウェイが、Windows 2000 SP4 と Windows 2003 SP1 の両方の vmware イメージ上で動作するようになりました。(ID-12826)

HTML 表示コンポーネント

- DatePicker ディスプレイクラスに strict プロパティーが追加されました。このプロパティーを設定すると、手動で入力された日付の妥当性を検査できます。(ID-11037)
- 「エンドユーザーメニュー」フォームに doNotRegenerateEndUserMenu プロパティーが追加され、エンドユーザーメニューの強制的な再生成を無効にできるようになりました。(ID-11327)
- SortingTable コンポーネントで、表を構成する子コンポーネントの align、valign、および width プロパティーが、HTML のレンダリング時に有効になりました。InlineAlert コンポーネントを利用して、エラー、警告、成功、および情報のメッセージをフォームに表示することもできます。(ID-12560)
- ツリーテーブルコンポーネントで、調整可能な列がサポートされました。これにより、ユーザーリストおよびリソースリストの表の列幅を、CSS を使って固定ピクセル数またはパーセント値に設定できます。列ヘッダーの右の境界をマウスでクリック＆ドラッグして、列の幅を変更することもできます。(ID-11474)

注 Firefox/Mozilla、その他の Gecko ベースのブラウザでは、列のサイズを変更するとブラウザテキストが選択されることがあります。これは、onselectstart DHTML 動作を抑制できる Internet Explorer や Safari では生じません。

Identity Auditor

- 設定した範囲のリソースのみをスキャンするように監査ポリシーを設定できるようになりました。(ID-9127)
- データベーステーブルと Microsoft Identity Information Server で、これら 2 つのリソース用に指定されたカスタムフォームを使用するようになりました (ID-10302)。
- ユーザーアクセスレポートのタイトルが正しく表示されるようになりました。(ID-11538)
- アクセススキャンタスクが動的組織で動作するようになりました。(ID-12437)
- ユーザービューオプション CallViewValidators (UserViewConstants.OP_CALL_VIEW_VALIDATORS) を文字列「true」または「false」に設定して、プロビジョニング中の監査ポリシーチェックをそれぞれ有効化または無効化できるようになりました。(ID-12757)
- アップグレードプロセスでアクセスレビュー情報電子メールテンプレートが上書きされることはなくなりました (ID-13216)。

Identity Manager SPE

Identity Manager SPE 2005Q4M3 SP1 で導入された新機能は次のとおりです。これらの機能の詳細については、『Identity Manager Service Provider Edition Administration Addendum』および『Identity Manager SPE Deployment』を参照してください。

拡張されたエンドユーザーページ

拡張されたエンドユーザーページを利用できます。サンプルページには次の機能が含まれています。

- チャレンジ質問による認証機能を備えたログインとログアウト
- 登録とエンロールメント
- パスワードとユーザー名の変更
- チャレンジ質問と通知アドレスの編集
- パスワードとユーザー名を忘れた場合の処理
- 電子メール通知
- 監査

ページは実際の配備に合わせてカスタマイズできます。次のようなカスタマイズが可能です。

- ブランディング
- 設定オプション (たとえば、ログイン試行エラー回数)
- ページの追加と削除

パスワードおよびアカウント ID ポリシー

Identity Manager SPE とリソースアカウントに対する、アカウント ID ポリシーとパスワードポリシーがサポートされました。これらのポリシーは、Identity Manager と同じポリシーインフラストラクチャーで実装されます。(ID-12556)

Active Sync と Identity Manager SPE Sync の共存

Active Sync と SPE 同期を同じ Identity Manager サーバー上で実行できるようになりました。両方を同じリソース上では実行しないでください。(ID-12178)

LDAP ユーザーと設定ディレクトリの分離

ユーザーと設定情報を別個の LDAP インスタンスに格納できるようになりました。これらのインスタンスは初期設定時に選択します。(ID-12548)

Access Manager の統合

Identity Manager SPE のエンドユーザーページで Sun Java System Access Manager 7 2005Q4 を使った認証が可能になりました。Access Manager により、認証済みのユーザーのみがエンドユーザーページにアクセスできることが保証されます。

その他の修正

- アプリケーションサーバーがメモリー不足エラーで終了するなどサービスが異常な方法で停止しても、Identity Manager SPE でトランザクション処理が再開されるようになりました。(ID-14579)
- Identity Manager SPE トランザクションで、設定可能なユーザー更新整合性レベルがサポート可能になりました。既存のトランザクションストアデータベースを変更して、新しい列 `userId VARCHAR(N)` を追加する必要があります。`N` は、Identity Manager SPE ユーザー DN に 8 文字を追加した文字列として予期される最大長を格納できる大きさにしてください。このデータベースの変更が、アップグレードスクリプトの実行時に自動的に発生することはありません。(ID-13830)

ローカリゼーション

- 秘密の質問として使用されるメッセージキーが、結果ページに正しく表示されるようになりました。(ID-13076)

ログ

- Active Sync イベントがシステムログに記録されるようになりました。(ID-12446)
- ユーザーの秘密の質問の変更が監査ログに記録されるようになりました。(ID-13082)
- 直接および間接メソッドサブ呼び出しが追跡可能になりました。(ID-13436) これは、特定のエントリメソッドより下のレベルで発生している問題をデバッグする場合に有効です。この機能を有効にするには、`subcalls` 修飾子を使用して次のようにスコープのトレースレベルを設定します。

  ```
  trace 4,subcalls=2
  com.waveset.recon.ReconTask$WorkerThread#reconcileAccount
  ```

  この例では、`reconcileAccount()` メソッドをレベル 4 で、すべてのサブ呼び出しをレベル 2 で追跡します。
- スケジューラで発生したエラーが TaskSchedule オブジェクト内に保存されるのではなく、システムログに書き込まれるようになりました。(ID-14261)

調整

- 調整後ワークフローとして指定された調整完了通知タスクの定義が正常に完了するようになりました (ID-9259)。
- 調整とプロビジョンの結果として作成された多数の Account オブジェクトが存在する場合、調整とプロビジョニングのパフォーマンスが大幅に低下するおそれがあります。

  この問題に対処するため、リポジトリの「account」テーブルの「name」列にインデックスを作成してください。この点で助けになるスクリプトがサンプルディレクトリで提供されています。`account_index.sqlserver` が Microsoft SQL Server 用、`account_index.sql` がほかのすべてのデータベース用です。(ID-14478)

レポート

- Identity Manager で、機能の作成および変更時に監査イベントが作成されるようになりました。(ID-9734)
- Identity Manager で、「**ユーザーごとに表示する Identity Manager 属性を選択**」フィールドで指定する新しいロールオプションがサポートされるようになりました。新規および既存のレポートに対してこのオプションを選択すると、レポートにコンマ区切りのロールの一覧が表示されます。(ID-9777)
- CSV および PDF レポートのユーザー定義列に表示させる属性のリストを指定できるようになりました。リストを指定しない場合は、すべての属性が「監査可能属性」という名前の単一の列に表示されます。(ID-10468)

- デフォルトで、ログインした管理者に制御される組織の集合を範囲とする次のレポートが自動的に設定されるようになりました。ただし、レポートの実行対象となる 1 つ以上の組織を明示的に選択した場合は、その設定が優先します。(ID-12116)
  - 管理者ロールの概要
  - 管理者概要
  - ロールの概要
  - ユーザーの質問の概要
  - ユーザー概要

  この機能をサポートするため、組織範囲コンポーネントが、単一の `Select` コンポーネントから `MultiSelect` コンポーネントに変更されました。
- 2 つの新しいレポートで、次のマネージャー - 従業員関係の組み込みサポートの導入が可能になりました。My Direct and Indirect Employee Detail、My Direct Employee Summary、My Direct and Indirect Employee Summary、My Direct Employee Detail。(ID-12416、ID-12689)
- リソースユーザーレポートで CSV ファイルと PDF ファイルが正しく生成されるようになりました。(ID12509、13701)
- 管理者ロールの作成、変更、および削除に関して、監査ログがサポートされるようになりました。(ID-12514)
- ユーザーレポートに、ユーザーのマネージャーに基づいたレポートを簡単に実行できる検索属性が追加されました。(ID-12689)
- ユーザーレポートに、リソース上のすべてのアカウントのリソース accountId が、セミコロン区切りリストで表示されるようになりました (ID-12820)。ロールまたはリソースグループ経由で間接的に割り当てられたアカウントとリソースも表示されます。リソースアカウントが 1 つだけの場合、accountId は、Identity Manager accountId と異なるときのみ表示されます。
- PDF レポートで列名が正しく表示されるようになりました。(ID-12794)
- MAX_NAME_LENGTH より長い `TaskTemplate` 名が生成されてしまうという問題が修正されました。(ID-13790)

リポジトリ

- Identity Manager で、リポジトリとして Oracle Database 10g Release2® がサポートされました。(ID-12908)
- リポジトリとして SQL Server 2005 がサポートされるようになりました。(ID-14755) このバージョンの SQL Server を使用するには、次の手順を実行します。

  1.Microsoft の Web サイトから、SQL Server 2005 用 JDBC ドライバ (バージョン 1.2) をダウンロードします。

2.$WSHOME/WEB-INF/lib ディレクトリにある以前のバージョンのドライバをアーカイブします。次に、同じディレクトリにある sqljdbc.jar ドライバで古いバージョンを置き換えます。

3.データベース作成スクリプトを確認します。データベースを作成するときは、次の行のコメントを解除することができます。

```
ALTER DATABASE waveset SET READ_COMMITTED_SNAPSHOT ON
GO
```

この設定の詳細については、SQL Server 2005 のマニュアルを参照してください。

4.lh setup または lh setRepo コマンドでリポジトリを設定するときは、次の設定を使用します。

```
type = SQLServer
jdbc driver = com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver
url = jdbc:sqlserver://MachineName:Port;DatabaseName=waveset
```

URL 内のマシン名とポートの部分は、有効な設定に置き換える必要があります。

- IDM リポジトリの初期化が高速化されました。(ID-14937)

リソース

新しくサポートされるリソース

Identity Manager 2005Q4M3 以降、次のリソースのサポートが追加されています。詳細については、『Identity Manager Resources Reference Addendum』を参照してください。

- HP OpenVMS (ID-8556)
- BridgeStream SmartRoles (ID-12262)
- OS/400 v4r5、v5r2、v5r3、v5r4 (5.2、5.3、5.4)
- シェルスクリプト (ID-11906, ID-9866)
- スクリプト JDBC (ID-7540)
- Siebel 7.8
- Sun Java System Access Manager のレルムサポート (ID-12414)

全般

- Identity Manager で、バイナリアカウント属性の格納がサポートされています。この機能は次のアダプタによってサポートされます (ID-8851, 12665)。
  - Active Directory
  - LDAP
  - フラットファイル Active Sync
  - データベーステーブル

- スクリプト JDBC
- Sun Java System Communications Services

Active Directory で `thumbnailPhoto` (Windows 2000 Server 以上) および `jpegPhoto` (Windows 2003) バイナリ属性がサポートされました。そのほかのアダプタでは、`jpegPhoto`、`audio`、`userCertificate` などの属性がサポートされました。

バイナリ属性をサポートしないリソースにバイナリ属性または複雑な属性を送信しようとすると、Identity Manager から例外がスローされます。

バイナリ属性のサイズはできる限り抑えてください。大きすぎるバイナリ属性 (たとえば、200K バイト) をロードすると、許可された最大パケットサイズを超過したというエラーメッセージが表示される場合があります。サイズの大きい属性を管理する必要がある場合は、カスタマサポートまでお問い合わせください。

- エージェントリソースアダプタで、ブロック操作中の接続の保持をサポートするオプションのリソース属性 RA_HANGTIMEOUT がサポートされました。この属性は、ゲートウェイへのリクエストがタイムアウトしてハングアップしていると判定されるまでのタイムアウト値を秒数で指定します。デフォルト値は 0 で、ハングアップ接続を検出しないことを示します。(ID- 12455)
- AttrParse オブジェクトの変更が、Identity Manager の再起動なしで有効になるようになりました。(ID-12516)
- `AttrParse` のパフォーマンスが向上しました。通常の解析で、解析対象バッファーにある 1 文字ごとに例外がスローやキャッチされることはありません。(ID-13384)
- Identity Manager で、Attachmate Reflection for the Web Emulator Class Library を使用してのメインフレームリソースへの接続がサポートされるようになりました。この機能の設定の詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。(ID-14815)

Active Sync

- Active Sync ウィザードのほとんどのエリアが国際化されました。(ID-10504)
- リソースに対する Active Sync の再試行がシステムでサポートされるようになりました。この機能を有効にするには、リソース XML を更新して、次の形式で 2 つのリソース属性を追加します。

```
<ResourceAttribute name='syncRetryCountLimit' type='string'
multi='false' facets='activesync' value='180'/>
<ResourceAttribute name='syncRetryInterval' type='string'
multi='false' facets='activesync' value='10000'/>
```

`syncRetryCountLimit` は更新を再試行する回数であり、`syncRetryInterval` は再試行間の待機時間 (ミリ秒) です。これらの値はその後、Active Sync の設定時にカスタムのリソース設定値として表示されます。ローカリゼーションが必要な場合は、カスタムカタログキーを使用して displayName を指定してください。(ID-11255)

- Active Sync リソースに設定された Active Sync ログの最大値の設定どおりにログファイルが作成されるようになりました。(ID-11848)

Domino

- Domino ユーザーを Domino ディレクトリ内のエントリだけを使って作成できるようになりました。ID ファイルや電子メールアドレスは必要ありません。(ID-11201)
- Domino 6.x リソースで、拒否グループリストを指定しなくてもアカウントを無効にできるようになりました。拒否グループが指定されない場合、Identity Manager は CheckPassword 属性を使用して Domino リソース上の有効化と無効化を行います。値 2 でアカウントが無効になります。(ID-12088)
- Domino アダプタで、`NSFNoteComputeWithForm()` API 呼び出しを使った複数ユーザーの HTTPPassword 同時更新が、「-551」ゲートウェイエラーにならなくなりました。(ID-12466)

ディレクトリ

- Identity Manager でサイズの大きいリスト値を持つリソースオブジェクト属性を編集するメカニズムのスケーラビリティーが向上しました。この手法で LDAP グループを管理するサンプルフォームが、`sample/forms/LDAPgroupScalable.xml` にあります。(ID-9882)
- LDAP リソースアダプタで JSSE プロバイダを直接使用するようになりました。(ID-9958) Identity Manager でサポートされる最小の Java バージョンが 1.3 になり、Domino、LDAP、および NDS SecretStore のリソースアダプタによる SSL 通信にサードパーティーセキュリティープロバイダを使用できます。サードパーティーセキュリティープロバイダライブラリは、標準 java.security ファイルを使って登録できます。

  詳細については、
  http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/guide/security/CryptoSpec.html#ProviderInstalling
  を参照してください。

- 名前にスラッシュを含む LDAP グループが編集可能になりました。(ID-9872)

  `ldapJndiConnectionFactory.alwaysUseNames` 設定属性が `Waveset.properties` ファイルに追加されました。

  このプロパティーはデフォルトで有効です。有効にすると、すべての String 名がコンテキストの NameParser によって解析され、Name に変換されます。これにより、JNDI のエスケープ問題を回避しやすくなります。このオプションは、`ldapJndiConnectionFactory.wrapUnpooledConnections` オプションが true に設定されている場合にのみ、意味があります。

  デフォルト値 (true) をそのまま利用するか、この値を明示的に true に設定する場合は、1.4 以降の JVM が必要です。それより前の JVM では、JNDI の問題が原因で、このオプションを有効にしている場合に名前変更処理が失敗する恐れがあります。
- LDAP アダプタで新規アカウントに不正な識別名 (DN) が作成されることはなくなりました。(ID-10951)

  `com.sun.idm.util.ldap.DnUtil` のエスケープメソッドをフォーム内で使用して、エスケープ処理した値をリソースアダプタのアイデンティティーテンプレートに LDAP DN 形式で挿入できるようになりました。その代わりに、ユーザー入力、ActiveSync、調整などを経由して Identity Manager に入力される LDAP 識別名を、「LDAP DN 形式に従う」オプションを指定した accountId ポリシーを使用して検証することもできます。
- LDAP リソースの Active Sync 属性の「**同期するオブジェクトクラス**」のデフォルト値が inetorgperson になりました。(ID-11644)
- 更新履歴ログの変更を検索する `LDAPActiveSync` 検索フィルタが、パフォーマンス向上のために最適化されました。フィルタパート (`objectClass=changelogEntry`) がデフォルトの検索フィルタから削除されました。(ID-11722)

  次のように、値が false のリソース属性「**Remove objectClass from Search Params Filter**」をリソース定義に直接追加することによって、従来の動作を復元できます。

  ```
  <ResourceAttribute name='Remove objectClass from Search Params
  Filter' displayName='Remove objectClass from Search Params Filter'
  facets='activesync' value='false'>
  </ResourceAttribute>
  ```

  注 : GUI からこの設定値を変更することはできません。
- LDAP グループメンバーシップの変更で、全体の uniqueMember 属性の置換によるグループ全体の書き換えの代わりに、単独の追加と削除が使用されるようになりました。(ID-13035)
- `uid` 以外の値に対して VLV ソートが実行されるように LDAP アダプタを設定できます。(ID-13321) この値を変更するには、リソース定義に次の内容を追加します。

  ```
  <ResourceAttribute name='vlvSortAttribute' displayName='VLV Sort
  Attribute' description='VLV Sort Attribute'
  value='myValue'></ResourceAttribute>
  ```

- Active Directory `PasswordNeverExpires` 属性が、更新時に設定可能になりました。(ID-13710)
- NDS Active Sync アダプタで、ユーザーオブジェクトの lastModifiedTimeStamp に基づく変更のポーリングは行われなくなりました。この属性は、ユーザーのログイン / ログアウトのたびに更新されていました。この問題を解決するため、スキーママップで定義されたユーザーの属性の lastModifiedTimestamp に基づいて最終変更値が計算されるようになりました。属性の lastModifiedTimestamp がアダプタが示す最高値よりも大きい場合、ゲートウェイはこのユーザーを変更済みとしてサーバーに送り返します (ID-13896)。
- 新規作成した NDS ユーザーが自分のホームディレクトリにアクセスできなくなる問題が修正されました。(ID-14208)
- Active Directory のデータ検索タイムアウトが原因で調整が早期終了することはなくなりました (ID-14564)。
- 閉じられていないゲートウェイへの接続が原因で Active Directory Active Sync アダプタがハングアップする問題が修正されました。(ID-14597)
- LDAP ユーザーが無効になっているかどうかを調べる際に、LDAP アダプタで、`nsaccountlock` アクティブ化ショートカットが値 presence/absence に基づくロジックを使用できるように設定できます。(ID-14925) 詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。

Oracle ERP

- Oracle ERP アダプタに、監査機能をサポートする複数の属性が追加されました。(ID-11725) 詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。
- Oracle ERP アダプタで Oracle データベースのカーソルを正常に閉じることができるようになりました。以前は、次のようなエラーが発生していました (ID-12222)。
- Oracle ERP アダプタ用のフォームで、`com.waveset.ui.FormUtil` クラスの `listResourceObjects` メソッドからユーザーの特定の責任を返すことができるようになりました。すべての責任、またはアクティブな責任のみを返すようにフィルタを設定することもできます。(ID-12629)

  渡されるオプションは次のとおりです。

  - `key id` - (String) 責任を返すリソース ID を識別します。
  - `activeRespsOnly` - (String) true または false。設定されない場合のデフォルト値は false です。
- Oracle ERP アダプタで `sysdate` または `SYSDATE` キーワードがサポートされました。このキーワードに `to_date` を付加することで、責任の有効期限を Oracle E-Business Suite (EBS) サーバーのローカル時刻で指定できます。(ID-12709)

- Identity Manager の Oracle ERP アダプタで新しい `employee_number` アカウント属性がサポートされました。この属性は、`per_people_f` テーブルの `employee_number` を表します。詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。(ID-12710)
- Oracle ERP アダプタを使用して Oracle ERP アカウントの責任を更新しても、そのアカウントに関連付けられたほかの責任の更新が発生することがなくなりました。(ID-13889) その結果、変更する責任の Oracle ERP 監査タイムスタンプのみが更新されます。ほかのアカウントの責任の Oracle ERP 監査タイムスタンプは変更されません。
- Oracle ERP アダプタのスキーママップに person_fullname アカウント属性が追加されました。この属性は、Oracle ERP ユーザーフォームで「Person Name」フィールドの表示に使用されます。このフィールドは読み取り専用で、Oracle ERP アカウントが従業員番号を使って Oracle HR システムにリンクされている場合に、ユーザーのフルネームが表示されます。(ID-14675)
- Oracle ERP アダプタで完全調整中に Oracle ERP リソースにアクセスできなくても、リソースアカウントのリンクが解除されないようになりました。(ID-14960) (リソースは、間違ったリソース接続設定など多くの原因でアクセス不能になり得る。)
- Oracle ERP アダプタで Oracle E-Business Suite 12 がサポートされるようになりました。詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」を参照してください。(ID-15062、16705)
- 臨時雇用者アカウントをサポートするために、Oracle ERP アダプタに `npw_number` アカウント属性が追加されました。(ID-16507)

SAP および SAP HR

- 任意のメッセージタイプの IDOC を処理するように SAP HR アダプタを設定できるようになりました。以前は、タイプ HRMD_A の IDOC だけが処理可能でした。(ID-12120)

  ```
  ORA-01000: maximum open cursors exceeded
  ```

- SAP アダプタと SAP HR アダプタで、ネットワーク障害発生時の SAP 処理の再試行パラメータを提供する、次の 3 つの新しいリソース属性がサポートされました (ID-12579)。
  - SAP BAPI 再試行回数 - 処理を再試行する回数
  - SAP 接続再試行回数 - SAP サーバーへの再接続を試行する回数
  - SAP 接続再試行待ち時間 - SAP サーバーへの再接続を試行する前に待機する時間 (ミリ秒)。
- SAP リソースで CUA モードを使用すると、パスワードを期限なしで設定できるようになりました。(ID-13355)

- SAP システムに PASSWORD_FORMAL_CHECK 関数モジュールが含まれていないときに、SAP アダプタが JCO_ERROR_FUNCTION_NOT_FOUND 例外をスローしなくなりました。(ID-14663)
- SAP アダプタで、無効化されたアカウントのステータスが正しくレポートされるようになりました。(ID-14834)
- CUA 環境内のアクティビティーグループ (ロール) およびプロファイルを、開始日および終了日で更新できるようになりました。(ID-15613)

  ロールについては、アダプタの `activityGroups` 属性を次のものにマップします。

  `CUA->directLocalActivityGroupObjects`

  プロファイルについては、`profiles` を次のものにマップします。

  `CUA->directLocalProfileObjects`
- SAP アダプタで、SAP の ALIAS フィールドの更新がサポートされるようになりました。スキーマ設定での属性マッピングは ALIAS->USERALIAS です。(ID-16320)

UNIX

- UNIX ベースのアダプタにホームベースディレクトリリソース属性が追加されました。この属性を設定すると、作成するアカウントのネイティブリソース上のホームディレクトリの設定が無視され、この属性で設定した値に、`accountID` を付加した値が、ユーザーのホームディレクトリの値となります。アカウント属性でユーザーのホームディレクトリを設定すると、その設定値がホームベースディレクトリよりも優先します。(ID-8587)
- タイムアウトのデフォルト値をリソースタイプポリシー経由で設定できるようになりました。加えて、`maxWaitMilliseconds` プロパティーを使用して、Identity Manager のスクリプトアダプタがリソースによるタスクの完了を待機する場合のポーリング頻度を制御することもできます。(ID-11906)
- Solaris アダプタと Linux アダプタが最後のログイン情報で年を表示するようになりました。(ID-12182)
- NIS で設定した Solaris リソースからのアカウント情報を表示する際、グループメンバーシップ情報が数字のグループ ID ではなくグループ名で表示されるようになりました (ID-12667)。
- Solaris、AIX、HP-UX、Red Hat Linux、および SuSE Linux リソースアダプタに、「デフォルトの一次グループ」および「ログインシェル」の 2 つのリソース属性が追加されました。(ID-15034)

その他のアダプタ

- データセット規則を、Identity Manager で管理するのではなく、RACF リソースアダプタで直接制御できるようになりました。これにより、Identity Manager のネイティブ規則と異なるデータセット規則を作成できます。(ID-10446)

  次の例の「after create」規則は、Identity Manager のデフォルトである「<user id>.**」ではなく「<user id>.test1.**」データセット規則を作成します。

```
<?xml version='1.0' encoding='UTF-8'?>
<!DOCTYPE ResourceAction PUBLIC 'waveset.dtd' 'waveset.dtd'>
<ResourceAction name='create after action'>
  <ResTypeAction restype='RACF'>
    <act>
      var TSO_PROMPT = " READY";
      var TSO_MORE = " ***";
      var cmd1 = "addsd '"+identity+".test1.**'
owner('"+identity+"')[enter]";
      var result1 = hostAccess.doCmd(cmd1, TSO_PROMPT, TSO_MORE);
    </act>
  </ResTypeAction>
</ResourceAction>
```

- RACF アダプタで listAllObjects の検索フィルタがサポートされました。(ID-10895)
- 親 / 子ビジネスコンポーネントナビゲーションを必要とする Siebel オブジェクトの作成と更新が可能になりました。詳細は、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」を参照してください。(ID-11427)
- Siebel アダプタ内の isPickListAttribute メソッドが、トレーシングシステムの isMVGAttribute と誤って識別されることがなくなりました。(ID-11471)
- SecurId リソースで、クライアント属性がオプション属性として扱われるようになりました。(ID-11509)
- フラットファイル Active Sync アダプタで、同期に対する diff アクションを妨げるエラーが発生した場合、Active Sync ログが有効であれば必ず警告メッセージが出力されるようになりました。(ID-12484)
- Identity Manager で RSA Clear Trust 5.5.2 リソースにプロビジョニングするように設定する場合、Clear Trust の以前のバージョンのように SSL 通信に追加のライブラリが要求されることはありません。(ID-12499)
- データベーステーブルウィザードで、アクセス権のないテーブルの設定が許可されることはなくなりました。(ID-12643)
- ログイン試行エラーのために Siteminder ユーザーがロックされている場合でも、Siteminder LDAP アダプタで次の操作を正しく実行できるようになりました。(ID-12824)
  - 有効化
  - 無効化
  - パスワードの期限設定 (有効化 / 無効化別)

  - パスワードの期限設定解除 (有効化 / 無効化別)
- `listAllObjects` でユーザーを取得するたびに、RACF アダプタが長い文字列を検索することはなくなりました。通常はこれで、多数のユーザーに対するこの機能のパフォーマンスが向上します。(ID-12829)
- 一時表スペースに制限値の設定が適用されず、Oracle 10gR2 から試行した場合は SQL 例外が発生します。(ID-12843)

  これまでは、oracleTempTSQuota アカウント属性がマップされなかった場合でも、リソースアダプタによって一時表スペースに制限値が設定されていました。この動作は変更されました。oracleTempTSQuota 属性をマップする場合、従来の動作が維持されます (変更なし)。ただし、マッピングを削除すると、一時表スペースに対して制限値が設定されなくなります。

  Oracle 10gR2 リソースに対しては、リソースアダプタから oracleTempTSQuota 属性を削除してください。
- Identity Manager で、SecureID ユーザーの削除を試行する前に、存在する管理者特権がクリアされるようになりました。(ID-13053)
- VMS 上の調整実行時に発生する問題が修正されました。(ID-13425)
- UNIX アダプタの SecurID で、RSA との相互運用時に UTF-8 文字のエンコーディングとデコーディングが実行されるようになりました。(ID-13451)
- シェルスクリプトアダプタで、ユーザー作成および更新関数の ResourceAction から生成されるエラーの検出が可能になりました (ID-13465)。
- Windows NT リソースアダプタ経由で Windows NT リソースのアカウントを作成する際、「ユーザー作成の結果」ページに次のエラーメッセージが表示されることはなくなりました。「Error requiring password: put_PasswordRequired(): 0X80004005:E_FAIL」。(ID-13618)
- 新しいリソース設定パラメータ enableEmptyString がデータベーステーブルアダプタに追加され、テーブルスキーマで not-null として定義されている文字ベースの列に NULL 値の代わりに空文字列を書き込めるようになりました。このオプションは、Oracle ベースのテーブルに文字列を書き込む方法には影響しません。(ID-13737)
- シェルスクリプトアダプタで、名前変更、無効化、および有効化の関数がサポートされました。(ID-14472)
- スクリプト JDBC アダプタで、元の値が null の属性を null 以外の値に設定する更新が正しく行われるようになりました。(ID-14655)

ロール

- ロールおよびリソースグループでは、ユーザーにリソース上の複数のアカウントを割り当てる機能を単独、組み合わせの両方で利用できるようになりました。詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。(ID-6684)
- 既存のスーパーロールに戻るリンクを含むロールをインポートしたときに、Identity Manager で既存のロールが更新されて、新しくインポートしたロールへの逆方向のリンクが設定されるようになりました。(ID-15482)

  Identity Manager は、既存のスーパーロールをリンク元とし、それらを参照するサブロールをリンク先とする、逆方向のリンクの検出と作成を行います。Identity Manager は、アップグレード時に、ロールの修復に使用される RoleUpdater クラスを呼び出します。

  sample/forms/RoleUpdater.xml にある新しい RoleUpdater.xml ファイルをインポートすることによって、アップグレード処理とは別にロールを更新できます。デフォルトでは、Identity Manager は、アップグレード時、またはユーザーが RoleUpdater.xml をインポートしたときにサブロールリンクを追加します。

  この新しい機能を無効にするには、RoleUpdater の属性 `nofixsubrolelinks` を true に設定します。次に例を示します。

  ```
  <MapEntry key='nofixsubrolelinks' value='true' />
  ```

  インポート中のロールの自動更新に関連する情報については、「既知の問題点」の ID-15053 の説明を参照してください。

セキュリティー

- 承認者の機能を待つユーザーが、指定した期間、将来の承認リクエストを自分自身は Identity Manager の承認者ではない 1 人以上のユーザーに委任できるようになりました。ユーザーは次の 3 つのインタフェースから委任できます (ID-8485)。
  - エンドユーザーメインメニュー - 「承認の委任」リンク
  - 管理者インターフェース :「承認」タブ -「自分の作業項目の委任」サブタブ
  - 管理者インターフェース :「ユーザーの作成 / 編集 / 表示」ページ -「セキュリティー」セクション
- パスワード生成が正しく動作するようになりました。パスワードが正しく生成されない場合のエラーも正常に動作します。(ID-12275)
- Identity Manager でエンドユーザーの EndUserLibrary 認証タイプ (authType) がサポートされました。EndUser 機能 (AdminGroup) に、authType が EndUserLibrary のライブラリのリストおよび表示アクセスが追加されています。(ID-12469)

  エンドユーザーにライブラリの内容へのアクセスを付与するには、`authType='EndUserLibrary'` を設定して、ライブラリの MemberObjectGroup が All になるようにします。

- Identity Manager ユーザーは同時ログインセッションを許可されています。ただし、システム設定オブジェクトの security.authn.singleLoginSessionPerApp 設定属性の値を変更することにより、ログインアプリケーションごとの同時セッション数を 1 に制限できます。この属性は、ログインアプリケーション名ごとに 1 つの属性を含むオブジェクトです (例 : 管理者インタフェース、ユーザーインタフェース、BPE など)。この属性の値を true に変更すると、各ユーザーに単一のログインセッションが適用されます。(ID-12778)

  適用されても、ユーザーは複数のセッションにログインできますが、アクティブかつ有効な状態を保持するのは、最後にログインしたセッションのみです。ユーザーが無効なセッション上で操作を実行すると、ユーザーはそのセッションから自動的に排除され、そのセッションは終了します。
- 管理者が SPML またはその他の方法でエンドユーザーのパスワードを変更した場合に、パスワード履歴に追加されないように設定できるようになりました。ユーザー履歴にパスワードを保存するようにアプリケーションを設定する方法が 2 つになりました。必要な方法は 1 つだけです。(ID-13029)
  - 「表示」オプション (存在するか true の場合、こちらが優先される)。対象のフォームの「savePasswordHistory」属性を設定します。次に例を示します。

```
<Field name='savePasswordHistory'>
  <Default>
    <Boolean>true</Boolean>
  </Default>
</Field>
```

  - 次のシステム設定を使用して、必要なインタフェースに合わせて動作を切り替えます。この設定がまだ存在しない場合、システム設定オブジェクトに追加する必要があります。

```
<Attribute name='security'>
  <Object>
    <Attribute name='admin'>
      <Object>
        <Attribute name='changePassword'>
          <Object>
            <Attribute name='Administrator Interface'>
              <Object>
                <Attribute name='savePasswordHistory'>
                  <Boolean>true</Boolean>
                </Attribute>
              </Object>
            </Attribute>
            <Attribute name='Command Line Interface'>
              <Object>
                <Attribute name='savePasswordHistory'>
                  <Boolean>true</Boolean>
                </Attribute>
              </Object>
            </Attribute>
            <Attribute name='IVR Interface'>
```

```
                <Object>
                  <Attribute name='savePasswordHistory'>
                    <Boolean>false</Boolean>
                  </Attribute>
                </Object>
              </Attribute>
              <Attribute name='SOAP Interface'>
                <Object>
                  <Attribute name='savePasswordHistory'>
                    <Boolean>true</Boolean>
                  </Attribute>
                </Object>
              </Attribute>
              <Attribute name='User Interface'>
                <Object>
                  <Attribute name='savePasswordHistory'>
                    <Boolean>false</Boolean>
                  </Attribute>
                </Object>
              </Attribute>
            </Object>
          </Attribute>
        </Object>
      </Attribute>
....
```

サーバー

- TaskInstance サブオブジェクトが、承認と同様に、タスクの終了時に正しく削除されるようになりました。(ID-3258)
- Identity Manager で `tmp` ディレクトリへのアクセスが必要になりました。(ID-7804) アプリケーションサーバーでセキュリティーポリシーを使用する場合、この変更に伴って次の権限を追加する必要があります。

```
permission java.io.FilePermission "$(java.io.tmpdir)$(/)*",
"read,write,delete";
```

- 「ユーザーの検索」ページで、多数の組織が何重にも入れ子になった階層構造に対応しました。(ID-10352)
- クラスタ環境のエンドユーザーページでログインが失敗しても、直列化関連の例外が生成されなくなりました。(ID-10556)
- サーバーでタスク情報の処理に時間がかかりすぎる場合でも、そのサーバー自体がフェイルオーバーメカニズムをトリガーし、自分のタスクを終了することはなくなりました。(ID-10920)
- ユーザー拡張属性がユーザーオブジェクトから正しく削除されるようになりました。(ID-11721)

- ResourceConnectionManager に、保留中のシャットダウンが通知されるようになりました。この結果、サーバーの終了前に SSH 接続のタイムアウトを待つ必要はなくなりました。(ID-12214)
- 親組織への管理者アクセスを持たないサブ組織内のユーザーの「すべてのタスク」ページで、「no cache error」の原因となっていた条件が修正されました。(ID-12288)
- 角括弧の間の区切り文字処理を行わないようになりました。その結果、角括弧間のすべての文字がインデックスまたはフィルタとして処理されます。注 : 終了角括弧「]」をエスケープするメカニズムは、現時点ではありません。(ID-12384)
- タスクインスタンス終了アクションが、変更アクションではなく終了アクションとして監査されるようになりました。(ID-12791)
- ユーザーに直接割り当てられたリソースの削除後でも、ユーザーに対してユーザーアクションを実行できます。(ID-14806)

SOAP

- SPML サポートが拡張され、個人に加えてロールおよびリソースグループにも対応しました。(ID-8850)
- 新しい SPMLAccess 機能により、アカウント管理者が SPML インタフェースにアクセスできます。(ID-10854)
- SPML サーバーで、未実装の演算子を使用するフィルタを含むリクエストに対してエラーを返すようになりました。(ID-11343)
- Identity Manager SPML インタフェースには、呼び出し元が管理者としてログインできる `login` ExtendedRequest があります。このリリースから、SPML インタフェースに、呼び出し元がユーザーの自己プロビジョニング用のセッションを取得できる `loginUser` ExtendedRequest が追加されました。この `loginUser` ExtendedRequest では、パスワードまたはセキュリティーの質問への回答によってログインすることができます。(ID-12103)

ビュー

- ユーザービューに次の制御属性が追加されました (ID-4383)。

  `accounts[`***resname***`].waveset.forceUpdate`

  resname は、リソースの名前を表します。この属性の値は、ユーザーの変更時に更新のためにリソースに必ず送信されるリソースアカウント属性のリストです。
- リソースアカウントのビュー (プロビジョン解除ビュー、無効化ビュー、有効化ビュー、パスワードビュー、ユーザーの名前変更ビュー、再プロビジョンビュー、およびロック解除ビュー) で、ユーザーのリソースアカウント属性を取得する 2 つの新しいオプションがサポートされました (ID-10176)。
  - `fetchAccounts` - ユーザーに割り当てられるリソースのアカウント属性をビューに含めるように指定する Boolean です。

› `fetchAccountResources` - 取得先のリソース名のリスト。指定されない場合、Identity Manager はすべての割り当て済みリソースを使用します。

ワークフロー

- ワークフローの実行時に、無効な checkReference 警告が返されなくなりました。(ID-10802)
- `notification.redirect` を使用してメッセージをファイルにリダイレクトすると、そのメッセージを電子メールで処理した場合と同じように `emailNotifier.contentCharset` を使用してファイルに出力されるようになりました。これにより、ファイルに ISO-8859-1 以外の文字を含めることができます。(ID-10331、14984)
- 承認者が、すでに承認または却下された作業項目を承認または却下しようとすると、ワークフローメッセージに詳細な情報が追加されます。(ID-11045)
- Identity Manager で `auditPolicyScan` ワークフローサービスがサポートされました。このワークフローサービス呼び出しにより、ユーザーに割り当てられたポリシーに基づいてユーザーの監査ポリシー違反をスキャンできます。ユーザーにポリシーが割り当てられていない場合、組織に割り当てられたポリシーがあれば、それが使用されます。詳細については、このリリースノートの「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節を参照してください。(ID-12589)
- ロールの管理 TaskDefinition に RoleAdminTask authType が割り当てられ、リソースの管理 TaskDefinition に ResourceAdminTask authType が割り当てられるようになりました。(ID-12768)

以前のリリースで解決された不具合

この節では、アイデンティティーインストールパック 2005Q4M3 以降で解決された不具合について詳しく説明します。

インストールと更新

- アップグレードプロセスでアクセスレビュー電子メールテンプレートが上書きされることはなくなりました。(ID-13216)

管理者インタフェース

- ユーザーアプレットメニューで新しいユーザーアクションを設定する際に、テキストキーが正しく表示されるようになりました。(ID-8400)
- 特殊文字が含まれている場合にエラーがトリガーされていた箇所でも、Identity Manager がヘルプ表示を正しく処理するようになりました。(ID-8747)
- ログインアプリケーションの singleLoginSessionPerApp 属性を true に設定しても、Identity Manager では、ユーザーが同じアプリケーションに複数回ログインできます。ただし、アクティブかつ有効なセッションになるのは、そのユーザーが最後にログインしたセッションのみです。ユーザーが、同じ Identity Manager ユーザーとして別のログインセッションでタスクを実行しようとすると、ユーザーは自動的に排除され、そのセッションは終了します。(ID-9543)
- ユーザーが組織に直接割り当てられている場合、このユーザーを UserMemberRule で同じ組織に割り当ててもリスト内で重複しなくなりました。(ID-10410)
- セッションタイムアウト時にリダイレクトされるログインページがローカライズ対応になり、ユーザーロケールで指定した言語で表示されるようになりました。(ID-10571)
- サンプル LDAP Password Sync フォーム (sample/forms/LDAPPasswordActiveSyncForm.xml) で、`password.password` と `password.confirmpassword` の代わりに `waveset.password` フィールドが設定されるようになりました。(ID-11660)
- 検索結果内に単一引用符を含むユーザー名が存在し、その名前が後続のコマンドのリンクに使用されても、Identity Manager 管理者インタフェースでエラーになることがなくなりました。(ID-11123)
- MultiSelect コンポーネントで単一の文字列が正しく表示されるようになりました。(ID-11979)
- Identity Manager で、更新をサポートしないリソースオブジェクトタイプを編集しようとしたときに正しいエラーメッセージが表示されるようになりました。(ID-12242)

- ツリーテーブルを使用してリソースを一覧表示する場合に、アンダースコア文字を含む名前のノードが正しく展開されるようになりました。(ID-12478)
- ActiveSync 設定サブメニューでウィザード以外のオプションを選択したときに、オンラインヘルプに正しいヘルプページが表示されるようになりました。(ID-12597)
- フランス語ロケールを使用する場合のユーザーの削除が正常に行えるようになりました。(ID-12642)
- ツリーテーブル、「アカウント」ページ、および検索結果ページで、未処理の Manager 属性が、括弧で囲んだ Identity Manager マネージャーの名前として表示されるようになりました。Identity Manager は、そのユーザーが更新されるたびに、未処理の Manager 属性の処理を試行します。属性が処理されると、Identity Manager は括弧を外し、新しい値の制約チェックを実行します。(ID-12726)
- 匿名ユーザーログインのインボックスリンクが、新しいエンドユーザー作業項目リストテーブルを指すようになりました。(ID-12816)
- TabPanel コンポーネントのボタンの配置が可能になりました。(ID-12797)
- Identity Manager に新しく追加されたサーバー名設定機能により、電子メールテンプレート内のデフォルトの値 mail.example.com が、設定されたサーバー名で置き換えられるようになりました。(ID-12720)
- パスワードのフィールドの表示が常にではなく、Identity Manager ユーザーインタフェースに LH ログインモジュールが含まれず、ユーザーに AdminRole が割り当てられている場合にだけ行われるようになりました。(ID-12692)
- Identity Manager で、「リソース」タブからアクセスされるリソースグループリストが、リストが保存された順序で表示されるようになりました。以前は、リソースがソートされていました。(ID-14117)
- 「ロールの検索」ページで、多くの組織があるロールを検索しても ObjectGroup エラーが表示されなくなりました。(ID-15303)
- ユーザーの編集機能を使用してリソースアカウントをユーザーから割り当て解除するとき、アカウントインデックス内のアカウントの状況がどの場合にも正しく更新されるようになりました。(ID-15310)
- 「ロール」タブ > 「ロールの検索」> 「承認者」メニューで、「ロール承認者」機能を持つユーザーを表示できるようになりました。(ID-15373)
- URL の文字数が 2000 文字を超える場合に Internet Explorer が表示処理に失敗する問題が修正されました。(ID-15801)
- セキュリティ更新プログラム 912812 が適用された Internet Explorer 6 または 7 のユーザーは、複数選択ボックスを強調表示するためにそのボックスをダブルクリックしたり、項目を移動するためにその項目をダブルクリックしたりする必要がなくなりました。(ID-15824)
- ActiveSync 入力フォーム上で `IAPI.cancel` に `true` を指定 (処理中のユーザーについて検出された保留中の更新をすべて取り消す) したとき、そのユーザーのビューが処理後もロックされたままになる問題が修正されました。(ID-15912)

- ほかの検索オプションに加えて「ユーザーの組織」オプションを選択するユーザー検索を実行したときに、有効な結果が返されるようになりました。(ID-16076)
- 「ロールの検索」ページで承認者のリストがソートされるようになりました。(ID-16392)
- DatePicker コンポーネントがすべてのタイムゾーンで正しく機能します。(ID-16618)

ビジネスプロセスエディタ

- 手動操作のタイムアウトで負の値 (秒数) を表示および編集できます。(ID-9715)
- MetaView 属性の編集時に「**Identity Manager リポジトリに属性を保存**」を選択した場合の動作が、正常になりました。(ID-12396)

フォーム

- Identity Manager の新しいサンプルフォーム、「LDAP Create Group」と「LDAP Update Group」では、一意でないメンバー名が許可されるようになりました。(ID-8831)
- MultiSelect コンポーネントで同一のラベル (表示名) の項目が正しく処理されるようになりました。(ID-10964)
- Text コンポーネントのデフォルトの最大長が、256 文字から無制限に変更されました (ID-11995)。
- NTForm フィールドと NDSUserForm Groups フィールドが ListObjects 規則を正しく実装するようになりました。(ID-12301)
- ホストアダプタリソースのウィザードによる affinityAdmin フィールドの管理が改善され、重複エントリと null エントリの発生が防止されています。(ID-12024)
- 「LDAP Update Group」フォーム上で、メンバーの追加や削除を行なった結果、最終的にメンバーの数が変わらない場合に変更内容が保存されないという問題が修正されました。(ID-12162)
- `com.waveset.ui.FormUtil` の `listResourceObjects` メソッドが、定義済みのフィルタを正しく実行するようになりました。このメソッドの詳細については、Javadoc を参照してください。(ID-14422)

Identity Auditor

- ユーザー作成時のポリシーのチェックで余分なタスクインスタンスが作成されることはなくなりました。(ID-10489)

Identity Manager SPE

- リソースアカウントの作成時にそのリソースがダウンしていると、Identity Manager SPE にリソース属性の値が記録されます。そのユーザーが次に Identity Manager SPE で編集されるときに、リソースが利用可能な状態であれば、そのリソース上にアカウントが作成されるようになりました。(ID-11168)
- 「**サービスプロバイダ**」>「**メイン設定の編集**」ページの「イベント収集の有効化」の選択を解除することにより、SPE の追跡するイベントを無効にできるようになりました。同じページで、追跡するイベントデータの収集のタイムスケールを選択して無効化することも可能です。変更した設定オブジェクトは、このページのすべての設定値と同様、有効にするには SPE マスターディレクトリにエクスポートする必要があります。(ID-12033)
- SPE IDMXContext deleteObjects メソッドで、ディレクトリストアからオブジェクトが正常に削除されるようになりました。(ID-11251)
- コンテナシャットダウン時に Service Provider Edition の監査サブシステムから null ポインタ例外がスローされなくなりました。(ID-12845)
- フォームが include または targets 以外のビュー固有プロパティーに関連付けられていて、ビューハンドラのメソッド (create/checkin/checkout/refresh) に渡されたオプションマップが null であった場合に、IDMXUserViewer が null ポインタ例外をスローしていた問題が修正されました。(ID-12861)
- ダウンしたリソースが再び使用可能になったあとで、LDAP の削除済み属性が伝播されるようになりました。(ID-15471)

ログイン

- ログイン時にカスタムタスクを起動するとログインに異常に時間がかかることがなくなりました。(ID-12377)
- Identity Manager で、機能、組織、機能 / 組織のいずれも所有していないユーザーの管理者ログイン試行エラーが、正しく記録されるようになりました。(ID-12497)

パスワード同期

- パスワード同期設定アプリケーション (Configure.exe) で、リポジトリからの読み取り時に、JMS プロパティーの等号 (=) 以降が切り捨てられることがなくなりました。(ID-12658)
- `passwordsync.dll` が、接続失敗に関する正しいエラーメッセージを返すようになりました。この変更により、接続失敗の間に発生する可能性のあるハンドルリークも修正されます。(ID-15451)
- 7 ビット ASCII 範囲外の文字を含むパスワードが、暗号化の前に UTF-8 として正しくエンコードされるようになりました。(ID-15829)

調整

- 重複したユーザーがリソースにいる場合に、調整が停止しなくなりました。(ID-14949)
- 不必要な調整エラーを回避するために、調整処理の間、アカウントのあいまい一致の一部が優先一致と見なされるようになりました。(ID-14965)
- ユーザーの正規化によってすべてのリソース情報がユーザーから削除されるときに、調整が停止しなくなりました。(ID-15028)

レポート

- Windows 2000 Active Directory 非アクティブアカウントスキャン (「リスク分析」トップメニューバーの下にあるタスク) が正常に完了するようになりました。(ID-11148)
- 複数のユーザーのリソースユーザーレポートを使用できるようになりました。(ID-11420)
- 委任先の管理者が実行するユーザーレポートに、UserMembersRule によって組織のメンバーとなっているユーザーが含まれるようになりました。(ID-11871)
- 使用状況レポートの y 軸にリソース名を選択したとき、その値がクエリーで使用されるようになりました。(ID-12035)
- デフォルトでは、ログインした管理者に制御される組織の集合を範囲とする次のレポートが自動的に設定されます。ただし、レポートの実行対象となる 1 つ以上の組織を明示的に選択した場合は、その設定が優先します。この機能をサポートするため、組織範囲コンポーネントが、単一選択コンポーネントから複数選択可能なコンポーネントに変更されました。(ID-12116)
- Identity Manager で、LDAP グループメンバーシップの変更が正しく監査されるようになりました。現在は、古い値と新しい値の両方が含まれます。(ID-12163)

- Microsoft Excel などの UTF-8 エンコーディングをサポートしないアプリケーションでレポートを表示できるように、UTF-8 文字セットおよび複数バイトテキストでエンコードされた CSV レポートをカスタマイズできるようになりました。(ID-13574、15407)
- 電子メールで送信される PDF レポートで、フォント設定およびフォント埋め込み設定が、どのレベルで指定されていても正しく反映されるようになりました。(ID-15328)
- HTML の タグが次の PDF レポートから削除されました。(ID-15408)
  - All Admin Roles
  - All Administrators
  - All Roles
- 使用状況レポートのフォームで、X 軸属性値の指定が必須になりました。(ID-15777)

リポジトリ

- Identity Manager リポジトリは、BLOB 列に対して Oracle 独自の処理を実行するようになりました。Oracle 用のサンプルスクリプトは、(LONG VARCHAR ではなく) BLOB データ型で xml 列を定義するようになりました。新規インストールでは、すべてのテーブルの作成で BLOB xml 列が使用されます。アップグレードの場合は新規テーブルのみに BLOB xml 列が設定されますが、アップグレードスクリプトで示されている変更を行うことにより、残りのテーブルを BLOB に変換できます (大規模配備ではこのアップグレード処理に数時間かかることがある)。BLOB で最善のパフォーマンスを得るため、最新の Oracle JDBC ドライバにアップグレードしてください。(ID-11999)
- Microsoft SQL Server 2000 に固有のデッドロックを回避するため、Identity Manager リポジトリが変更されました。リポジトリでは現在、Type に対する最終変更値を選択する際に、LAST_MOD_ITEM の名前ではなく ID を使用しています。(ID-12297)
- 低速な Oracle データベースシステムが原因で、複数のスケジューラで同時に実行されるタスクが中断することがなくなりました。(ID-15372)
- 類似したユーザーのグループで 1 人のユーザーからロールを削除しても、ほかのユーザーのリポジトリエントリに影響しなくなりました。また、この削除が原因で、ロールによる検索時にそれらのユーザーが見つからなくなることもなくなりました。(ID-15584)

リソース

ゲートウェイ

- Identity Manager API を Identity Manager インタフェースを経由せずに直接使用しても、ゲートウェイがクラッシュしなくなりました。(ID-12481)

全般

- パスワードに単一引用符を使用できます。(ID-10043)
- ホストアダプタリソースのウィザードによる affinityAdmin フィールドの管理が改善され、重複エントリと null エントリの発生が防止されています。(ID-12024)
- 「フェイルオーバー付き自動」起動を使用して Websphere クラスタ上で実行されている Active Sync プロセスが、ハングアップしなくなりました。(ID-12540)
- 一部のリソースアダプタに関して、調整中にユーザーが取得される前に、除外規則が適用されるようになりました。これにより、特定のユーザーを除外することが可能になり、リソースによって生成されるエラーが防止され、ユーザー数が多い場合のパフォーマンスを改善できます。(ID-14436)
- Identity Manager で、リソースにしてサポートされる機能の設定画面で、ある機能を無効にして、かつ「試行時のアクション」を「ignore」に設定した場合に、正しく動作するようになりました。`ignore` を選択した場合、アクションは実行されませんが、一部の状況ではそのことが GUI にメッセージとして表示される場合があります。(ID-14948)
- ログインに使用する共通リソースがシステム設定で設定されており、共通リソースによるログインが失敗した場合、共通リソースでないログインモジュールスタックに別のリソースがあり、それが以前のログインモジュールリソースのどれとも異なる認証プロパティーを必要とするときは、ログインが失敗しなくなりました。(ID-15047)
- 「一致しないアカウントの作成」が true に設定されていて「許容エラー数」を超過したときに、Active Sync が実行を継続しなくなりました。(ID-15662)

ディレクトリ

- 無効な暗号化タイプを指定すると、Active Directory リソースアダプタから例外がスローされるようになりました。有効な値は、値なし (空値)、「none」、「kerberos」、および「ssl」です。(ID-9011)
- Identity Manager で LDAP 接続プールがサポートされました。(ID-10219)

- メールを有効にした Active Directory (Exchange) ユーザーの不在通知属性の管理で msExchHideFromAddressLists を true に設定しても、障害が発生しなくなりました。加えて、サンプル Active Directory ユーザーフォームが更新され、msExchHideFromAddressLists を有効にすると Identity Manager で不在通知属性が表示されなくなりました。(ID-12231)
- LDAP Changelog Active Sync 処理で値のない MODIFY changetype に対応しました。(ID-12298)
- リソースオブジェクトのクエリーを実行するとき、ADSIResourceAdapter が接続を閉じるようになりました。(ID-15098)
- Identity Manager が、LDAP ディレクトリまたは Active Directory から書き込み専用のアカウント属性を読み取らなくなりました。(ID-15838)

メインフレーム

- RACF アダプタで DFLTGRP を変更した場合、その DFLTGRP を新しいデフォルトグループとして確実に設定できるように、必要に応じて DFLTGRP が GROUPS に追加されるようになりました。(ID-9987)
- メインフレームリソースアダプタ接続が正しくプールされるようになったため、メインフレーム処理のハングアップを引き起こすことはありません。(ID-12388)
- NaturalResourceAdapter アカウントの作成に使用される端末エミュレーションにより、Copy Links 属性の選択にタブを使用しない 8 文字のユーザー名が許可されるようになりました。(ID-12503)
- デフォルトの RACF List User AttrParse 機構が拡張され、多数の「CLASS AUTHORIZATIONS」およびテンプレートユーザーを、「GROUP SYS1　USER CONNECTION NOT INDICATED」などのグループエントリで処理するようになりました。(ID-15021)
- RACF 上の Resource Affinity アカウントにユーザーを一覧表示するための十分な特権がない場合、Identity Manager は適切なエラーメッセージを表示します。(ID-15331)
- RACF アカウントを削除するとき、システムは検索マスク (ユーザーが持つデータセットプロファイル) を介してクエリーを実行し、これらのプロファイルを列挙し、(DELDSD .** を介してそれらをすべて削除しようとするのではなく) 個別のデータセットを削除するようになりました。(ID-15413)
- フォームで RACF 属性をクリアしても、Identity Manager は、フォームの送信時に、この属性のクリアをユーザーに対して行っていませんでした (無操作)。Identity Manager はこの属性をクリアするようになりました。(ID-15971)
- ユーザーを有効化および無効化するときに、Top Secret リソースアダプタが ASUSPEND、PSUSPEND、VSUSPEND、および XSUSPEND を正しく処理するようになりました。(ID-16295)

- 不完全なユーザー属性がロードされる原因となっていた、Top Secret アダプタ内部の問題が修正されました。(ID-16334)

Oracle および Oracle ERP

- OracleResource アダプタを使用したセッション中は、例外が発生した場合でも、すべての Oracle カーソルが閉じられるようになりました。(ID-10357)
- Oracle および Oracle ERP リソースアダプタから thin ドライバを使用して Oracle RAC 環境に接続する場合は、次の形式を使用するようになりました (ID-10875)。

  jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(LOAD_BALANCE=on)(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host01)(PORT=1521))(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host02)(PORT=1521))(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP)(HOST=host03)(PORT=1521))(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=PROD)))
- リソース属性 `activeAccountsOnly` を TRUE に設定して、Oracle ERP で、アカウント反復子と listObjects のインタフェースから返されるアカウントを制限できるようになりました。デフォルトは FALSE です。FALSE に設定すると、リソース上のすべてのアカウントが返されます。TRUE にすると、START_DATE と END_DATE の間に SYSDATE (現在) が含まれるアカウントのみが返されます。(ID-12303)
- Oracle ERP アダプタが更新され PreparedStatements を閉じる際の一貫性が向上した結果、開いたカーソルの数が減少しました。(ID-12564)

SAP

- SAP アダプタが、listAllObjects() から重複したアクティビティーグループが返される場合に対応しました。(ID-7776)
- SAP アダプタには、パスワードを期限未到来に設定できなかった場合に、WavesetResult オブジェクトで一時的に生成したパスワードを返す機能があります。これは、次の条件下でのみ発生します。
  - 管理者パスワードの変更がリクエストされ、expirePassword = false
  - 希望のパスワードが SAP パスワードポリシーでエラーになる

  エラーの多くは、希望のパスワードがすでに SAP パスワード履歴にあることにより起こります。

  この機能を実現するために用意された「失敗したときに `SAP 一時パスワードを返す`」リソース属性が以前は機能していませんでしたが、その問題が修正されました。(ID-12185)
- `expirePassword` フラグが false の状態で、管理者パスワードの変更をリクエストした場合にユーザーのパスワードと現在のパスワードの照合が安定化しました。これにより、希望のパスワードとユーザーの現在のパスワードが同じ場合のエラー条件の発生が防止されます。(ID-12447)

- Central User Administration (CUA) 環境で SAP アクティビティーグループおよびプロファイルを書き込む際、情報がコロンで区切られていても、テーブルの新しい行が 2 行に分割されることがなくなりました。(ID-14371)

UNIX

- UNIX アダプタの基本機能として、sudo の初期化およびリセット機能が提供されました。ただし、リソースアクションが定義され、そのスクリプトに sudo 認証を必要とするコマンドが含まれている場合は、UNIX コマンドとともに sudo コマンドを指定する必要があります (たとえば、単に useradd ではなく、sudo useradd と指定する必要がある)。sudo を必要とするコマンドは、ネイティブリソース上に登録する必要があります。コマンドの登録には visudo を使用します。(ID-10206)
- Red Hat Linux アダプタと SuSE Linux アダプタで、リソースから読み込み、ファイルにエクスポートなどの一括リスト処理中に一次グループ、二次グループ、最終ログインの各フィールドが生成されるようになりました。(ID-11627)

  スキーママップで最終ログインフィールドの追跡が指定されている場合、アダプタから各ユーザーの最終ログイン情報を個別にリクエストする必要があるため、一括リストプロセスの速度が大幅に低下することがあります。
- Solaris、HP-UX、および Linux アダプタ上の time_last_login リソース属性をデフォルト (Last login time) 以外の属性名にマップできるようになりました。(ID-11692)
- Solaris NIS サーバーリソースに対して「リソースオブジェクトの作成」を実行し、「ユーザー」で複数のアカウントを選択してから「保存」をクリックした場合、すべてのアカウントが、管理対象 NIS サーバー内の NIS パスワードソースディレクトリ内のグループファイルに追加されるようになりました。以前は、この操作は 1 つのアカウントを選択しているときにのみ有効でした。(ID-15085)
- Solaris NIS に関して、Identity Manager が netid ターゲットを追加しなくなりました。この追加は不要であり、トレースでエラーメッセージの原因となっていました。(ID-15503)
- Solaris NIS に関して、Solaris NIS の passwd、shadow、および group の各テンプレートファイルが含まれるディレクトリが管理者ユーザーから読み取り保護されている場合でも、Identity Manager が sudo コマンドの使用を妨げなくなりました。(ID-15505)
- Solaris NIS に関して、デフォルトの一次グループが完全に存在しないか、またはグループファイルに見つからない名前である場合に、不完全なアカウントが作成されることがなくなりました。(ID-15509)
- ユーザーまたはグループが存在しない環境で始まり、テンプレートの passwd および group ファイルが /etc 以外のディレクトリにあるときに、Solaris NIS のユーザーまたはグループ ID 生成が失敗する原因となっていた問題が修正されました。(ID-15510)

- Solaris NIS に関して、1 行に 2 つのアカウントが作成され、最初のアカウントにはシェルが指定されるが 2 番目のアカウントには指定されない (defadduser ファイルで定義されていないか、または defadduser ファイルが存在しない) 場合、2 番目のアカウントが最初のアカウントのシェルで作成されることがなくなりました。(ID-15511)
- Solaris NIS では、/usr/sadm/defadduser ファイルが、新しく作成されるアカウントに対するデフォルト値のオプションソースとして使用されます。Identity Manager の以前のバージョンでは、新規の Identity Manager ユーザーに対するデフォルトの一次グループを設定するために、システムはこのファイルの正しくない要素を使用していました。現在は、デフォルトの一次グループを設定するのは defgname 要素であり、これは適切な動作です。このデフォルト一次グループの値よりも **Default Primary Group** リソース属性が優先され、さらにこの属性よりも、同様の名前のアカウント属性が優先されます。(ID-15512)
- アカウントが更新されるとき、Identity Manager は、Solaris NIS および HP-UX NIS の暗号化パスワードを NIS テンプレートファイル passwd および shadow の両方に格納しなくなりました。passwd ファイルにはプレースホルダ値「x」が格納されるようになりました。(ID-15593)
- 既存グループの名前または ID で Solaris NIS リソース上にグループを作成できることの原因となっていた問題が修正されました。(ID-15755)
- Solaris リソースからユーザーを削除する際、ユーザーがその時点でリソースにログオンしていて削除が失敗した場合に、Identity Manager が「削除に成功しました」という間違った結果を示さな くなりました。(ID-15761)

その他

- デフォルト名が変更されるとき、SecurID UNIX アダプタは Identity System User Account 属性を正しく処理します。(ID-10521)
- LH_AUDIT_RANGE_COMP_INTF コンポーネントインタフェースを使用する PeopleSoft コンポーネント Active Sync リソースがある場合、LH_AUDIT_RANGE_COMP_INTF コンポーネントインタフェースを使用し続けるにはリソースに変更を加える必要があります。(ID-11226)

  リソースで auditLegacyGetUpdateRows リソース属性が true に設定されていることを確認してください。

```
<ResourceAttribute name='auditLegacyGetUpdateRows'
    value='true'
    displayName='Use Legacy Get Update Rows'
    type='boolean'
    multi='false'
   facets='activesync' >
</ResourceAttribute>
```

- Sun Access Manager Organization オブジェクトを Identity Manager リソースアプレットから削除できるようになりました (Identity Manager がその後、確認なしですべての子オブジェクトを削除する)。(ID-11516)
- SecurId ユーザーを管理する際、Identity Manager でユーザーごとに 3 つのトークンがサポートされるようになりました。(ID-11723)
- データベーステーブルアダプタで、繰り返し処理およびポーリング時にデータベース接続ができるだけ早く閉じられ、不使用の接続が不必要に保持されることがなくなりました。(ID-11986)
- JMS リスナーアダプタが Websphere 6.0 でエラーになることはありません。メッセージ処理が非同期から同期に変更されたため、Web アプリケーション内での非同期 JMS メッセージ処理を禁止する J2EE サーバー上で JMS リスナーが動作できるようになりました。ポーリング頻度は、JMS リスナーリソースに対して定義することになります。(ID-12654)
- SecurID アダプタは、デフォルトのログイン属性がシングルバイトの英語文字のみで構成されるという RSA 要件を適用します。(ID-13805)
- Identity Manager が Tivoli Access Manager および Active Directory とともに展開されるとき、7 ビット ASCII 範囲外の文字を含むパスワードがゲートウェイによって正しく設定 (作成および更新) されるようになりました。(ID-15006)
- シェルスクリプトアダプタが、エラーを発行して明示的に復帰する削除スクリプトからの出力を「トラップ」して報告するようになりました。(ID-15340)
- データベーステーブルアダプタで、**Rethrow all SQLExceptions** リソースパラメータを指定できます。これをチェックしない場合、ErrorCode が 0 の SQLException をスローする SQL 文については、例外をキャッチして抑止します。(ID-15390)
- Active Sync および PeopleSoft リソースを使用するときにデッドロック発生の原因となっていた問題が修正されました。(ID-16109)

調整

- ユーザー管理者ロールで ControlledOrganizationRule を設定しても、調整サーバーデーモンの起動が妨げられなくなりました。(ID-12695)

リポジトリ

- ユーザー、その他のオブジェクトの保存時に「`com.waveset.util.InternalError: 概要で使われている文字列の長さ (2185) が最大長 (2048) を超えています。`」という形式のエラーメッセージが表示されなくなりました。(ID-12492)

ロール

- ロールの編集時にアポストロフィーを含むロール名が途中で切れてしまう問題がなくなりました。(ID-8806)
- Identity Manager で、ロール属性経由で割り当てられるグループの追加と削除が正しく処理されるようになりました。(ID-10832)
- Identity Manager 5.0 で作成したロール、およびほかのロールのサブロールであるロールに、スーパーロールへのリンクが追加されました。(ID-11477)
- リソース名を変更しても、ロール属性から適切なリソースが引き続き参照されるようになりました。(ID-11689)
- waveset.roles にロールが 1 つしか含まれていない場合でも、一括アクションで waveset.roles からロールを削除できます。(ID-14568)
- SaveAs 処理中にシステムがサブロール / スーパーロールを正しく更新するようになりました。(ID-16010)

セキュリティー

- `Waveset.properties` ファイルの `ui.web.disableStackTraceComments` プロパティーを true に設定すると、HTML のコメントで非表示になっている詳細なデバッグ情報を抑制することができます。以前のバージョンの Identity Manager からアップグレードする場合、このプロパティーを config/Waveset.properties に追加する必要があります。properties ファイルに存在しないプロパティーは無視されます (false に設定されたプロパティーと同等)。(ID-10499)
- システム設定オブジェクトで非推奨の `endUserAccess` 属性を設定しなくても、匿名ユーザーが規則などさまざまなオブジェクトタイプにアクセスできるようになりました。(ID-11248)
- このリリースで Clear Trust 5.5.2 リソースにプロビジョニングするように設定するには、Clear Trust 5.5.2 インストール CD から `ct_admin_api.jar` をインストールする必要があります。SSL 通信用の追加ライブラリは不要です。(ID-12449)
- 管理者ロールの作成時に、Identity Manager ですべてのオブジェクトタイプを正しく含めたり、排除したりできるようになりました。(ID-12491)
- 次の機能を持つ管理者が「リソースのリスト」ページにアクセス可能になりました (ID-12647)。
  - Resource Password Administrator
  - Change Resource Password Administrator
  - Reset Resource Password Administrator
  - Change Active Sync Resource Administrator
  - Control Active Sync Resource Administrator

  - Reconcile Administrator
  - Reconcile Request Administrators
- ユーザーの作成時に設定したパスワードも、ユーザーのパスワード履歴に追加されるようになりました。(ID-15179)
- Top 組織を制御しない承認者が、以前に承認 / 却下された承認を表示できるようになりました。(ID-15271)
- 保留中の作業項目の所有者であるユーザーが削除された場合、Identity Manager は次のようにして、作業項目が失われないことを保証するようになりました。(ID-15868)
  - 保留中の作業項目が委任されていて、委任元が削除されていない場合、保留中の作業項目は委任元に返されます。その後、委任元が作業項目の新しい所有者になります。
  - 保留中の作業項目が委任されていて委任元も削除されている、または保留中の作業項目が委任されていなかった場合、ユーザーの保留中の作業項目が解釈処理されるか、または別のユーザーに転送されるまで、削除の試行は失敗します。

サーバー

- SSL で Oracle OCI ドライバを使用しても、アプリケーションサーバーがクラッシュしなくなりました (ID-7109)。
- 自分が存在しないリソース上のロールを持っている Identity Manager ユーザーが、エンドユーザーメニューへのログインを試行した場合に、null ポインタ例外を受信することはなくなりました。(ID-12379)
- 展開と取得の間にセッションが正しく設定されるようになりました。その一方で、リソースアカウント作成は一括アクションの間に処理されます。(ID-16181)
- 特定の状況下で、スケジュールされたタスクが、指定された予定開始日時に複数のサーバーによって処理される可能性がありました。この問題は修正されました。(ID-16318)

SOAP

`debug/callTimer.jsp` 機能経由で、SPML 1.0 呼び出しの監視が可能になりました。最も外側の呼び出しである com.waveset.rpc.SpmlHandler の `doRequest()` メソッドが、SOAP/SPML のパフォーマンス判定に最も有用です。`addRequest` など個々の SPML メソッドでも、監視に役立つように時間が計測されます。(ID-8463)

ワークフロー

- 特定の状況下で、期限切れの作業項目を編集してもエラーが発生しませんでした。現在は、作業項目が無効になったことを示すエラーが返されるようになりました。(ID-15439)
- Remedy リソースアダプタでエラーが発生したとき、ワークフロー変数 WF_ACTION_ERROR が正しく設定されるようになりました。(ID-16360)
- カスタマイズされた emailTemplate を、転送される承認のために使用できるようになりました。使用する emailTemplate は、承認サブプロセスで ID によって指定する必要があります。(ID-16468)

解決されたその他の不具合

6496, 8586, 8739, 8958, 8960, 9936, 10235, 10475, 10483, 10832, 11232, 11642, 11767, 11979,12135, 12203, 12234, 12274, 12368, 12377, 12464,12483, 12510, 12585, 12611, 12614, 12673, 12967, 13054, 13338, 13434, 13965, 14044, 14178, 14334, 14792, 14874, 14893, 14899, 15036, 15073, 15219, 15474, 16107, 16282, 16389, 16395, 16610, 17346

以前のリリースで解決された不具合

インストールと更新に関する注意事項

インストールの注意事項

- HP-UX には、Identity Installation Pack を手動でインストールする必要があります。
- Identity Manager を Tomcat 4.1.x 下で実行するには、Sun の Web サイト `http://java.sun.com/products/jsse/index-103.html` から JSSE jar ファイルをダウンロードし、それらを `idm\WEB-INF\lib` ディレクトリに置きます。
- Sun Identity Manager Gateway を Windows NT システム上で実行するには、Microsoft Active Directory クライアント拡張が必要です。DSClient は、`http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;en-us;Q288358` にあります。
- ライセンスの問題により、次の JAR が削除されました。(ID-9338) これらの JAR は次に示すリソースアダプタに対して必要です。各 JAR とベンダーからの入手方法に関する情報を次に示します。

  Adapter: OS400ResourceAdapter
  URL: `http://jt400.sourceforge.net`
  Project: JTOpen
  JAR: jt400.jar
  Version: 2.03
  Adapter: ONTDirectorySmartAdapter
  URL: `http://my.opennetwork.com`
  Project: Directory Smart
  JARs: dsclass.jar, DSUtils.jar
  Version: N/A

更新の注意事項

Identity Manager を更新する場合は、該当するアプリケーションサーバーのインストールの節で、アプリケーションサーバー固有の手順を確認してください。この節では、Identity Manager version 6.0 から 6.0 SP4 へのアップグレードに必要なアップグレードタスクの概要を説明します。詳細については、『Identity Manager 6.0 Upgrade 』マニュアルを参照してください。

Identity Installation Pack 2005Q4M3 SP4 への更新は、次のバージョンから可能です。

- Identity Manager 6.0 (すべてのサービスパックレベル)
- Identity Auditor 1.7 (すべてのサービスパックレベル)

注 現在の Identity Manager のインストールを大幅にカスタマイズしている場合は、アップグレードの計画と実行に関して Sun Professional Services までお問い合わせください。

Identity Manager の更新に使用する情報と手順は次のとおりです。

注 HP-UX など一部の環境では、これとは別の手動更新手順に従う必要がある、またはそのほうが望ましい場合があります。その場合は、「Identity Manager の手動更新」の節に進んでください。

注 Identity Manager 6.0 ではスキーマが変更され、タスク、グループ、組織、および syslog テーブル用の新しいテーブルが導入されました。これらの新しいテーブル構造を作成し、既存のデータを移動する必要があります。本書の「ドキュメントの追加事項と修正事項」の節にある、「手順 2: Update リポジトリデータベーススキーマの更新」を参照してください。

注 Identity Manager version 6.0 でアクセスレビュー情報電子メールテンプレートを編集すると、Identity Manager のアップグレード前にテンプレートを保存するか、アップグレード後にテンプレートを編集する必要があります (アップグレードプロセスがテンプレートをデフォルト値で上書きするため)。(ID-13216)

手順 1: Identity Manager ソフトウェアの更新

Identity Manager の更新に使用する情報と手順は次のとおりです。

注意 :

- HP-UX 上など一部の環境では、これとは別の手動更新手順に従う必要がある、またはそのほうが望ましい場合があります。その場合は、「Identity Manager の手動更新」の節に進んでください。
- UNIX 環境では、`/var/opt/sun/install` ディレクトリが存在し、かつ書き込み可能であることを確認してください。
- 更新時には、アプリケーションサーバーのインストール場所を知っている必要があります。
- 以前にインストールされたホットフィックスはすべて `$WSHOME/patches/`*`HotfixName`* ディレクトリに保存されます。
- 続く手順で示すコマンドは、Windows インストールと Tomcat アプリケーションサーバーに固有のものです。実際の環境では、使用するコマンドが異なる可能性があります。

Identity Manager を更新するには、次の手順に従います。

1. アプリケーションサーバーをシャットダウンします。
2. Identity Manager サーバー上で Sun Identity Manager Gateway を実行している場合は、次のコマンドでゲートウェイサービスを停止します。

   ```
   gateway -k
   ```

3. `install` コマンドを実行して、インストールプロセスを開始します。

   Identity Manager に「Welcome」パネルが表示されます。
4. 「**Next**」をクリックします。Identity Manager の「Select Installation Directory」パネルが表示されます。「Upgrade」を選択して「Next」をクリックします。
5. Identity Manager インストールディレクトリの場所を入力するか、「**Browse**」をクリックして選択し、「**Next**」をクリックします。
6. 「**Next**」をクリックすると更新が始まります。

   Identity Manager の「Installation Summary」パネルが表示されます。

   注 インストールの詳細な情報を見るには、「**Details**」をクリックしてください。インストールプロセス中に収集される情報の量によっては、ここに表示されないメッセージもあります。完全な情報については、詳細に示されたログファイルを参照してください。作業が完了したら、「**Close**」をクリックしてインストーラを終了します。
7. すべてのコンパイル済み Identity Manager ファイルをアプリケーションサーバーの作業ディレクトリから削除します。
8. 更新プロセスでまだ行っていない場合は、すべてのホットフィックスクラスファイルを `WEB-INF/classes` ディレクトリから `patches/`*`HotfixName`* ディレクトリに移動します。

手順 2: Sun Identity Manager Gateway の更新

Sun Identity Manager Gateway がリモートシステム上で稼働している場合は、次の手順を使用して更新します。

1. Sun Identity Manager Gateway がインストールされている Windows 2000 システムにログインします。
2. ゲートウェイのインストールディレクトリに移動します。
3. 次のコマンドを実行してゲートウェイサービスを停止します。
   ```
   gateway -k
   ```
4. Windows 2000 以降を使用している場合は、Services MMC プラグインのすべてのインスタンスを終了します。
5. 既存のゲートウェイファイルを削除します。
6. 新しく更新したゲートウェイを Identity Manager サーバーでないシステム上にインストールする場合、インストールイメージを展開した場所から `gateway.zip` ファイルをコピーします。
7. `gateway.zip` ファイルを、ゲートウェイをインストールしたディレクトリに展開します。
8. 次のコマンドを実行して、ゲートウェイサービスを開始します。
   ```
   gateway -s
   ```

ゲートウェイの開始と停止は、次の手順によっても行えます。

1. Windows の「コントロール パネル」を開きます。
2. 「サービス」を開きます。Windows 2000 では、「サービス」は「管理ツール」の中にあります。
3. 「Sun Identity Manager Gateway」を選択します。
4. 「**開始**」または「**停止**」をクリックします。

Identity Manager の手動更新

環境によっては、Identity Manager のインストールと更新プログラムを使用する代わりに、更新手順を手動で実行する必要がある場合があります。

注意 :

- `JAVA_HOME` 環境変数が設定済みであることを確認してください。
- `JAVA_HOME` ディレクトリ内の `bin` ディレクトリがパスに指定されていることを確認してください。
- 以前にインストールされたホットフィックスはすべて `$WSHOME/patches/`*`HotfixName`* ディレクトリに保存されます。

- Configurator アカウントの名前を変更していた場合は、アップグレードする前に名前を Configurator に戻し、このアカウントがインポート機能を備えるように設定を復元します。さらに、このアカウントのパスワードを configurator にする必要があります。アップグレードの後に、Configurator アカウントをアップグレード前の状態に戻します。本稼働環境に配備する前に、必要に応じてこのアカウントの名前とパスワードを変更してください。

Identity Manager を手動で更新するには、次の手順に従います。

1. アプリケーションサーバーおよび Sun Identity Manager Gateway を停止します。
2. 次の一連のコマンドを入力します。

   サポートされている Windows プラットフォームの場合

   a. 環境を設定します。

   ```
   set SPPATH= サービスパックファイルのパス
   set WSHOME=Identity Manager のインストール
   または ステージングディレクトリのパス
   set TEMP= 一時ディレクトリのパス
   ```

   b. プリプロセスを実行します。

   ```
   mkdir %TEMP%
   cd /d %TEMP%
   jar -xvf %SPPATH%\IDPAK2005Q4M3_SP4.jar \
   WEB-INF\lib\idm.jar \ WEB-INF\lib\idmcommon.jar \
   WEB-INF\lib\idmformui.jar
   set TMPLIBPTH=%TEMP%\WEB-INF\lib
   set CLASSPATH=%TMPLIBPTH%\idm.jar;\
   %TMPLIBPTH%\idmcommon.jar;%TMPLIBPTH%\idmformui.jar
   java -classpath %CLASSPATH% -Dwaveset.home=%WSHOME%
      com.waveset.install.UpgradePreProcess
   ```

   c. ソフトウェアをインストールします。

   ```
   cd %WSHOME%
   jar -xvf %SPPATH%\IDM.jar
   ```

   d. ポストプロセスを実行します。

   ```
   java -classpath %CLASSPATH% -Dwaveset.home=%WSHOME%
     com.waveset.install.UpgradePostProcess
   ```

サポートされている UNIX プラットフォームの場合

a. 環境を設定します。

```
export SPPATH= 抽出済みサービスパックファイルのパス
export WSHOME=Identity Manager のインストール
またはステージングディレクトリのパス
export TEMP= 一時ディレクトリのパス
```

b. プリプロセスを実行します。

```
mkdir $TEMP
cd $TEMP
jar -xvf $SPPATH/IDPAK2005Q4M3_SP4.jar \
WEB-INF/lib/idm.jar WEB-INF/lib/idmcommon.jar \
WEB-INF/lib/idmformui.jar
CLASSPATH=$TEMP/WEB-INF/lib/idm.jar:\
$TEMP/WEB-INF/lib/idmcommon.jar:\
$TEMP/WEB-INF/lib/idmformui.jar
java -classpath $CLASSPATH -Dwaveset.home=$WSHOME \
com.waveset.install.UpgradePreProcess
```

c. ソフトウェアをインストールします。

```
cd $WSHOME
jar -xvf $SPPATH/IDM.jar
```

d. ポストプロセスを実行します。

```
java -classpath $CLASSPATH -Dwaveset.home=$WSHOME
  com.waveset.install.UpgradePostProcess
```

3. `$WSHOME/bin/solaris` または `$WSHOME/bin/linux` にディレクトリを変更してから、ディレクトリ内のファイルが実行可能になるようにファイルのアクセス権を設定します。
4. ステージングディレクトリ内にインストールを行った場合は、アプリケーションサーバーへの配備用に `.war` ファイルを作成します。

注 アプリケーションサーバー固有の手順については、『Sun Java™ System Identity Manager Installation』の該当する章を参照してください。

5. Identity Manager のファイルをアプリケーションサーバーの作業ディレクトリから削除します。
6. 更新プロセスでまだ行っていない場合は、すべてのホットフィックスクラスファイルを `WEB-INF/classes` ディレクトリから `patches/`*`HotfixName`* ディレクトリに移動します。
7. アプリケーションサーバーを起動します。
8. Identity Manager データベースを更新します。詳細な手順については、前の「手順 2: Sun Identity Manager Gateway の更新」の節を参照してください。
9. Sun Identity Manager Gateway を更新したあと、再起動します。詳細な手順については、前の「手順 2: Sun Identity Manager Gateway の更新」の節を参照してください。

ドキュメントの追加事項と修正事項

Identity システムソフトウェアガイドについて

Identity システムソフトウェアのドキュメントは、複数のガイドから構成され、Identity Install Pack CD に Acrobat (.pdf) 形式で収録されています。本リリースには次のガイドが含まれています。

Identity システムソフトウェア

『Install Pack Installation』(Identity_Install_Pack_Installation_2005Q4M3.pdf) ー Identity システムソフトウェアのインストールと更新の方法を説明します。

Identity Manager

- 『Identity Manager 管理ガイド』(IDM_Administration_2005Q4M3.pdf) ー Identity Manager の管理者とユーザーのインタフェースについて説明します。
- 『Identity Manager Upgrade』(IDM_Upgrade_2005Q4M3.pdf) ー アップグレードのための計画とアップグレードの実行に役立つ情報が記載されています。

注 このリリースでは、『Identity Manager Technical Deployment』および『Identity Manager Technical Reference』が次のマニュアルに再編成されています。

- 『Identity Manager Technical Deployment Overview』(IDM_Deployment_Overview_2005Q4M3.pdf) ー オブジェクトのアーキテクチャーなど、Identity Manager 製品の概念面の概要を示し、製品の基本コンポーネントを紹介します。
- 『Identity Manager Workflows, Forms, and Views』(IDM_Workflows_Forms_Views_2005Q4M3.pdf) ー リファレンスと手順説明を通じて、Identity Manager のワークフロー、フォーム、およびビューの使用法を説明します。これらのオブジェクトをカスタマイズするために必要なツールに関する情報も記載されています。
- 『Identity Manager Deployment Tools』(IDM_Deployment_Tools_2005Q4M3.pdf) ー リファレンスと手順説明を通じて、各種の Identity Manager 配備ツールの使用法を説明します。規則と規則ライブラリ、共通のタスクとプロセス、辞書のサポート、Identity Manager サーバーによって提供される SOAP ベースの Web サービスインタフェースなどの事項についても説明します。

- 『Identity Manager Resources Reference』(IDM_Resources_Reference_2005Q4M3.pdf) ー リファレンスと手順説明を通じて、アカウント情報をリソースから Sun JavaTM System Identity Manager にロードして同期する方法を説明します。追加のアダプタについては、ResourcesRef_Addendum_2005Q4M3SP1.pdf で説明しています。
- 『Identity Manager Audit Logging』(IDM_Audit_Logging_2005Q4M3.pdf) ー リファレンスと手順説明を通じて、アカウント情報をリソースから Sun JavaTM System Identity Manager にロードして同期する方法を説明します。
- 『Identity Manager Tuning, Troubleshooting, and Error Messages』(IDM_Troubleshooting_2005Q4M3.pdf) ー リファレンスと手順説明を通じて、Identity Manager のエラーメッセージと例外について説明し、作業中に発生する可能性のある問題を追跡して解決する手順を示します。

Identity Auditor

『Identity Auditor 管理ガイド』(IDA_Administration_2005Q4M3.pdf) ー Identity Auditor の管理者インタフェースについて説明します。

Identity Manager Service Provider Edition

- 『Identity Manager Service Provider Edition Administration Addendum』(SPE_Administration_Addendum_2005Q4M3SP1.pdf) ー Identity Manager SPE の機能について説明します。
- 『Identity Manager Service Provider Edition Deployment』(SPE_Deployment_2005Q4M3_SP1.pdf) ー Identity Manager SPE の配備に関する情報を提供します。

オンラインガイドの操作

ガイドを操作するには、Acrobat のブックマーク機能を使用します。ブックマークパネルの節タイトルをクリックすると、ドキュメント内のその節の位置にジャンプできます。

Web ブラウザから idm/doc ディレクトリにアクセスすることで、すべての Identity Manager インストールで Identity Manager のドキュメントを表示できます。

Install Pack Installation

修正すべき事項

Preface

「How to Find Information in this Guide」から「Appendix H」への間違った相互参照を削除する必要があります。(ID-12369)

第 1 章「Before You Install」

- これまでサポートされていたリソース Microsoft Exchange 5.5 は非推奨となったため、「Supported Resources」の表から削除する必要があります。(ID-12682)
- 「Supported Resources」の表にサポートリソースとして Lotus Notes® 6.5.4 (Domino) を追加する必要があります。(ID-12226)
- 複数インスタンスでサポートされる Java のバージョンとして JDK 1.5 を追加する必要があります。(ID-12984)
- 「Supported Resources」の表の ERP システム SAP の情報を次のように変更する必要があります。(ID-12635)
  - SAP® R/3 v4.5、v4.6
  - SAP® R/3 Enterprise 4.7 (SAP BASIS 6.20)
  - SAP® NetWeaver Enterprise Portal 2004 (SAP BASIS 6.40)
  - SAP® NetWeaver Enterprise Portal 2004s (SAP BASIS 7.00)
- 「Supported Resources」の表の Red Hat の情報を次のように変更する必要があります。
  - Red Hat Linux Advanced Server 2.1
  - Red Hat Linux Enterprise Server 3.0、4.0
- 「Supported Software and Environments」に「Repository Database Servers」の節、および次の情報を追加する必要があります。(ID-12425)
  - IBM® DB2® Universal Database for Linux、UNIX®、および Windows® (Version 7.x、8.1、8.2)
  - Microsoft SQL Server™ 2000
  - MySQL™ 4.1
  - Oracle 9i® および Oracle Database 10g、10gR1、10gR2®

第 2 章「Installing Identity Installation Pack for Tomcat」

この章で、Apache Tomcat アプリケーションサーバー Versions 4.1.x および 5.0.x について記述します。

第 4 章「Installing Identity Installation Pack for WebSphere」

- この章で Websphere 5.1 express および 6.0 のインストールについて説明します。(ID-12655、12656) 次の注意事項と情報を、それぞれ示された箇所に追加する必要があります。

注 次の手順は、Identity Installation Pack 6.0 以降をインストールする場合は必要ありません。

4. ステージングディレクトリに移動し、次のファイルが存在していれば削除します。

```
WEB-INF\lib\cryptix-jce-provider.jar
WEB-INF\lib\cryptix-jce-api.jar
```

25. 次の WebSphere のサイトから最新の `jlog package` をダウンロードします。

```
http://www.alphaworks.ibm.com/tech/loggingtoolkit4j
```

注 WebSphere 6.0 には、`jlog package` が組み込まれています。ダウンロードが必要なのは、それより前のバージョンの場合だけです。

- このリリースでは JDK 1.4.2 のインストールが必要なため、「*For JDK 1.3.x:*」の節は不要になりました。同じ章の「*For JDK 1.4*」は「*For JDK 1.4.2*」が正しい節タイトルです。

第 7/8 章「Installing Identity Installation Pack for Sun ONE/Sun Java System Application Server 7/8」

- 「Installation Steps」> 「Step 5: Edit the server.policy File」> 「example permissions」に、次の修正された情報を追加する必要があります。(ID-12292)

```
permission java.io.FilePermission
"/opt/SUNWappserver/domains/domain1/applications/j2ee-modules/
idm/config/trace1.log", "read,write,delete";

permission java.io.FilePermission "$(java.io.tmpdir)$(/)*",
"read,write,delete";
```

- 「Installation Steps」> 「Step 5: Edit the server.policy File」> 「example permissions」に、次の情報を追加する必要があります。

  Identity Manager Service Provider Edition で実行する場合は、前に述べた server.policy ファイルのエントリに次のアクセス権を追加します。

```
permission java.lang.RuntimePermission "shutdownHooks";
```

第 14 章「UnInstalling Applications」

「Remove the Software」> 「On UNIX」> 「Step 3」の構文例から *_Version_* を削除する必要があります。(ID-7762)

第 15 章「Installing The Applications (Manual Installation)」

「Installation Steps」> 「Step 3: Configure the Identity Install Pack Index Database Connection」> 「Non-Xwindows Environments」> 「Step 3」の構文例を次のように修正する必要があります。(ID-5821)

3. 次のコマンドを使ってライセンスキーを設定します。

```
cd idm/bin
./lh license set -f LicenseKeyFile
```

Appendix A:「Index Database Reference」

SQL Server について説明する行を次のように変更する必要があります。

選択内容	入力内容
SQL Server **Microsoft SQL Server 2005 JDBC Driver で使用するデフォルト値。** • **URL:** "jdbc:sqlserver://host.your.com:1433;DatabaseName=dbname" • **JDBC Driver:** com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver • **Connect as User:** waveset Microsoft SQL Server 2000 JDBC Driver には、次の値を使用します。 • **URL:** "jdbc:microsoft:sqlserver://host.your.com:1433;DatabaseName=dbname;SelectMethod=Cursor" • **JDBC Driver:** com.microsoft.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver • **Connect as User:** waveset	データベースを設定するときに選択した、インデックスデータベースの場所およびパスワードを入力します。 **注 :** SQL Server への接続は、すべて、同じバージョンの JDBC ドライバを使用して行う必要があります。これには、リポジトリに加えて、SQL Server のアカウントまたはテーブルを管理または要求するすべてのリソースアダプタも含まれます。そのようなアダプタには、Microsoft SQL アダプタ、Microsoft Identity Integration Server アダプタ、Database Table アダプタ、Scripted JDBC アダプタ、および、これらのアダプタをベースとする任意のカスタムアダプタがあります。異なるバージョンのドライバを使おうとした場合、競合エラーが発生します。

Appendix C:「Configuring Data Sources for Identity

Manager」

- 複数の IIOP URL はサポートされていません。(ID-12499) 「Configuring a WebSphere Data Source for Identity Manager」> 「Configuring a Websphere 5 Data Source」> 「Configure the DataSource in a Websphere Cluster」にある、次のような間違った情報を削除する必要があります。

  アプリケーションサーバーに、**BOOTSTRAP_ADDRESS** プロパティーで指定されたポートと同じポートがない場合、java.naming.provider.url で複数の URL を指定できます。次に例を示します。

```
iiop://localhost:9812,iiop://localhost:9813
```

- WebSphere version 5 で使用される j2c プロパティーは、WebSphere version 6 ではすべて resources.xml ファイルに組み込まれました。Websphere 5.1/6.x データソースの設定および 6.x 認証データの設定についての説明を追加する必要があります。Websphere 4.x データソースの設定についての情報を削除する必要があります。(ID-12767) この変更には次の節が関係します。

JDBC プロバイダの設定

WebSphere の管理コンソールを使用して新規の JDBC プロバイダを設定します。

1. 左パネルの「**リソース**」タブをクリックして、リソースタイプの一覧を表示します。
2. 「**JDBC プロバイダー**」をクリックして、設定済み JDBC プロバイダの表を表示します。
3. 設定済み JDBC プロバイダの表の上にある「**新規作成**」ボタンをクリックします。
4. JDBC データベースタイプの一覧から jdbc タイプと実装タイプを選択します。「次へ」をクリックします。

   この例では、Oracle、Oracle JDBC Drive、および接続プールデータソースが使用されます。
5. 全般プロパティーの設定を続けます。
   - 名前を指定します。
   - 「**クラスパス**」フィールドに、JDBC ドライバを含む JAR のパスを指定します。たとえば、Oracle thin ドライバを指定するには、次のようなパスを指定します。

```
/usr/WebSphere/AppServer/installedApps/idm/idm.ear/idm.war/WEB-INF/lib/oraclejdbc.jar
```

注 管理コンソールから、JDBC ドライバを含む JAR のパスを指定することができます。「**環境**」メニューから「**WebSphere 変数の管理**」を選択します。そのパネルで、まず、この環境変数の定義に関係する**セル**、**ノード**、および**サーバー**を選択します。それから、この変数の値として JAR のパスを指定します。

   - 「**インプリメンテーションクラス名**」フィールドに、JDBC ドライバクラスの完全修飾名を指定します。
     - Oracle thin ドライバの場合、この値は `oracle.jdbc.pool.OracleConnectionPoolDataSource` です。

- db2 jcc ドライバの場合、この値は com.ibm.db2.jcc.DB2ConnectionPoolDataSource です。
- プロバイダの名前や説明を自由に変更することもできます。

  作業が完了したら、表の下にある「**OK**」ボタンをクリックします。追加したプロバイダが、右側のパネルに表示されます。

この JDBC プロバイダを使用するデータソースを設定するには、「Point the Identity Manager Repository to the Data Source」を参照してください。

Websphere JDBC データソースの設定

1. WebSphere の管理コンソールを使用して既存の JDBC プロバイダのデータソースを定義します。Identity Installation Pack で使用する新規の JDBC プロバイダを定義する必要がある場合は、「Configuring a JDBC Provider」を参照してください。

データソースの設定を完了する前に、認証データを設定する必要があります。これらの別名には、DBMS への接続に使用される資格が含まれます。

5.1 認証データの設定

1. 左パネルの「**セキュリティー**」タブをクリックして、セキュリティー設定タイプの一覧を表示します。
2. 左パネルの「**JAAS 構成**」タブをクリックして、JAAS 設定タイプの一覧を表示します。
3. 左パネルの「**J2C 認証データ**」タブをクリックします。右パネルに認証データエントリの表が表示されます。
4. 認証データエントリの表の上にある「**新規作成**」ボタンをクリックします。右パネルに設定可能な全般プロパティーの表が表示されます。
5. 新しい認証データエントリの全般プロパティーを設定します。次の点に注意してください。
   - 「**別名**」は、データソースの DBMS 資格を設定する際に選択リストに表示される名前です。
   - 「**ユーザー ID**」は、DBMS への接続に使用される名前です。
   - 「**パスワード**」は、DBMS への接続に使用されるパスワードです。

次に、データソースを設定します。

6.x 認証データの設定

1. **「セキュリティー」> 「グローバルセキュリティー」**をクリックします。
2. 「認証」で、**「JAAS 構成」> 「J2C 認証データ」**をクリックします。**「J2C 認証データエントリー」**パネルが表示されます。
3. 「**新規作成**」をクリックします。
4. 一意の別名、有効なユーザー ID、有効なパスワード、および短い説明 (省略可) を入力します。

5. 「**OK**」または「**適用**」をクリックします。ユーザー ID とパスワードの検証は不要です。
6. 「**保存**」をクリックします。

注 新しく作成したエントリは、データソース定義で使用するアプリケーションサーバープロセスを再起動しなくても表示されます。ただし、そのエントリを有効にするにはサーバーの再起動が必要です。

データソースの設定

注 Websphere 5.x クラスタ内のデータソースを設定する場合の詳細については、「Configure the DataSource in a Websphere Cluster」を参照してください。

1. 左パネルの「**リソース**」タブをクリックして、リソースタイプの一覧を表示します。
2. 「**JDBC プロバイダー**」をクリックして、設定済み JDBC プロバイダの表を表示します。
3. 表にある JDBC プロバイダの名前をクリックします。右パネルに、選択した JDBC プロバイダに設定されている全般プロパティーの表が表示されます。
4. 追加プロパティーの表までスクロールします。「**データソース**」をクリックします。右パネルにこの JDBC プロバイダで使用するために設定されたデータソースの表が表示されます。

注 WebSphere 管理コンソールのフレームの上に「**有効範囲**」フィールドがあります。設定のためのセル情報が「**新規作成**」ボタンと「**削除**」ボタンの下に表示されるように、「**ノード**」および「**サーバー**」が空白であることを確認してください。

5. データソースの表の上にある「**新規作成**」ボタンをクリックします。設定する全般プロパティーの表が右側のパネルに表示されます。
6. 新しいデータソースの全般プロパティーを設定します。次の点に注意してください。
   - 「**JNDI 名**」は、ディレクトリサービス内の DataSource オブジェクトのパスです。この同じ値を次のように `-f` 引数として指定する必要があります。
     `setRepo -t`*`dbms`* `-i`*`initCtxFac`* `-f`*`filepath`*.
   - 「**コンテナ管理パーシスタンス**」のチェックは外したままにしてください。Identity Installation Pack では EJB (Enterprise Java Beans) は使用しません。
   - 「**コンポーネント管理認証別名**」は、この DataSource で指定されている DBMS のアクセスに使用される資格を示します。
   - ドロップダウンリストから適切な DBMS 資格のセットを含む別名を選択します。詳細は、「5.1 認証データの設定」を参照してください。
   - 「**コンテナ管理認証別名**」は使用されません。この値は「(なし)」に設定してください。Identity Installation Pack は、この DataSource で指定されている DBMS への独自の接続を作成します。
   - このパネルの設定が完了したら、「**OK**」をクリックします。「データソース」ページが表示されます。

7. 作成した DataSource をクリックします。その後、下のほうにある「追加プロパティー」の表までスクロールします。「**カスタム・プロパティー**」リンクをクリックします。

   右パネルに DBMS 固有のプロパティーの表が表示されます。
8. この DataSource のカスタムプロパティーを設定します。各プロパティーのリンクをクリックしてその値を設定します。次の点に注意してください。
   - 必須プロパティーは「**URL**」だけです。このデータベース URL でデータベースインスタンスが識別されます。また、この URL には driverType、serverName、portNumber、および databaseName が含まれます。これらの値の一部を個々のプロパティーとして指定することもできます。
   - この例の「**driverType**」は thin です。
   - 「**serverName**」はホスト名または IP アドレスです。
   - 「**databaseName**」は通常、短いデータベース名です。
   - Oracle の場合、デフォルトの「**portNumber**」は 1521 です。
   - 「**preTestSQLString**」を、SELECT 1 FROM USEROBJ のような値に設定すると有効な場合があります。これは、USERJOB テーブルが存在しアクセス可能であることを確認する SQL クエリーです。
9. これらのプロパティーをパフォーマンスチューニング用に設定する場合は、「追加プロパティー」の表から「**接続プール**」リンクをクリックすることもできます。

Appendix E:「Configuring JCE」

「Note」は、次のように読み替えてください。

注　このリリースでは JDK 1.4.2 をインストールする必要があるため、サポートされるすべての環境に JCE 1.2 が含まれることになり、この付録の情報は該当しなくなりました。

追加事項

第 1 章「Before You Install」

- 「Setup Task Flow」> 「Bullet Install and configure the Identity Install Pack software」に次の注意事項を追加する必要があります (ID-8431)。

注　Unix または Linux システムの場合 :

- Identity Installation Pack version 5.0 - 5.0 SP1 をインストールする場合、`/var/tmp` が存在し、かつインストーラを実行するユーザーから書き込み可能である必要があります。
- Identity Installation Pack version 5.0 SP2 以降をインストールする場合、`/var/opt/sun/install` が存在し、かつインストーラを実行するユーザーから書き込み可能である必要があります。

- 「Prerequisite Tasks」> 「Set Up an Index Database」> 「Setting Up SQL Server」> 「step 3b」に次の注意事項を追加する必要があります (ID-11835)。

注 次のファイルが `$WSHOME/WEB-INF/lib` ディレクトリに存在する必要があります。

```
db2jcc
db2jcc_license_cisuz.jar または db2jcc_license_cu.jar
```

- 「Supported Software and Environments」> 「Application Servers」に次の注意事項を追加する必要があります。(ID-12385)

注 現在のアプリケーションサーバーコンテナで UTF-8 をサポートしている必要があります。

第 2 章「Installing Identity Installation Pack for Tomcat」

- 「Installation Steps」> 「Step 1: Install the Tomcat Software」> 「Installing on UNIX」に次の手順を追加する必要があります。(ID-12487)

  2. Java の `mail.jar` ファイルと `activation.jar` ファイルを `./tomcat/common/lib` ディレクトリに追加します。mail と activation の jar ファイルは、次の場所にあります。

```
http://java.sun.com/products/javamail
http://java.sun.com/products/beans/glasgow/jaf.html
```

- 「Installation Steps」> 「Step 1: Install the Tomcat Software」> 「Installing on UNIX」に次の手順を追加する必要があります。(ID-12462)

  3. UTF-8 をサポートするように Tomcat を設定する場合、`URIEncoding="UTF-8"` 属性を *`TOMCAT DIR`*`conf/server.xml` ファイル内の *connector* 要素に追加します。次に例を示します。

```
<!-- Define a non-SSL Coyote HTTP/1.1 Connector on the port specified
during installation -->
<Connector port="8080"
               maxThreads="150"
               minSpareThreads="25"
               maxSpareThreads="75"
               enableLookups="false" redirectPort="8443"
               acceptCount="100" debug="0" connectionTimeout="20000"
               disableUploadTimeout="true"
               URIEncoding="UTF-8" />
```

  4. UTF-8 をサポートするように Tomcat を設定する場合、Java VM のオプションで `-Dfile.encoding=UTF-8` の追加も行います。

第 13 章「Updating Identity Manager」

詳細なアップグレード情報を見つけやすくするため、『Identity Manager Upgrade』への相互参照を追加する必要があります。(ID-12366)

第 15 章「Installing The Applications (Manual Installation)」

「Installation Steps」> 「Step 2: Install the Application Software」に次の注意事項を追加する必要があります。(ID-8344)

注　5.0 SP3 リリース以降、アダプタクラスは `idmadapter.jar` ファイルに含まれるようになりました。カスタムアダプタがある場合は、クラスパスの更新が必要になる可能性があります。

Appendix B:「Configuring MySQL」

「Configuring MySQL」> 「step 3 Start the MySql process」に次の情報を追加する必要があります。(ID-12461)

このプロセスがまだ起動していない場合は、次の手順に従って MySQL の登録および起動を行います。
Windows で `c:¥mysql` 以外のディレクトリにインストールする場合は、次のような内容の `c:¥my.cnf` ファイルを作成します。

```
[mysqld]
basedir=d:/mysql/
default-character-set=utf8
default-collation=utf8_bin
```

Windows で、次のようにサービスをインストールおよび起動します。

```
cd <MySQL_Install_Dir>/bin
mysqld-nt --install
net start mysql
```

Appendix C:「Configuring Data Sources for Identity Manager」

「Configuring a WebSphere Data Source for Identity Manager」> 「Point the Identity Manager Repository to the Data Source」に次の情報を追加する必要があります。(ID-12071)

8. リポジトリに新しい場所を指定します。次に例を示します。

```
lh -Djava.ext.dirs=$JAVA_HOME/jre/lib/ext:$WAS_HOME/lib setRepo
-tdbms -iinitCtxFac
-ffilepath -uiiop://localhost:bootstrap_port
-Uusername
```

```
-Ppassword
-toracle icom.ibm.websphere.naming.WsnInitialContextFactory -
fDataSourcePath
```

前の例で *DataSourcePath* は、たとえば `jdbc/jndiname` のようになります。`bootstrap_port` は、WebSphere サーバーのブートストラップアドレスポートです。

`-Djava.ext.dirs` オプションにより、WebSphere の `lib/` ディレクトリと `java/jre/lib/ext/` ディレクトリにあるすべての JAR ファイルが CLASSPATH に追加されます。これは、setrepo コマンドが正常に実行されるために必要です。

データソースの設定時に「**JNDI 名**」フィールドに指定した値と合致させるために、`-f` オプションを変更します。このコマンドの詳細については、setrepo リファレンスを参照してください。

Identity Manager Upgrade

追加事項

第 1 章「Upgrade Overview」

「Example Upgrade」の節に次の項目を追加する必要があります。(ID-12467)

Role Form のスーパーロールのフィールドを編集する場合は注意が必要です。スーパーロール自体が入れ子のロールになっている可能性があります。スーパーロールとサブロールのフィールドが、ロールの入れ子状態、およびそれらに関連付けられたリソースまたはリソースグループを示しています。ユーザーに適用される際、スーパーロールには、指定したすべてのサブロールに関連付けられたリソースが含まれます。スーパーロールのフィールドは、表示されたロールを含むロールを示すために表示されます。

第 3 章「Develop the Upgrade Plan」

「Upgrade From Identity Manager 5.x to 6.x」の節に次の項目を追加する必要があります。(ID-12361)

手順 2: Update リポジトリデータベーススキーマの更新

Identity Manager 6.0 ではスキーマが変更され、タスク、グループ、組織、および syslog テーブル用の新しいテーブルが導入されました。これらの新しいテーブル構造を作成し、既存のデータを移動する必要があります。

注 リポジトリスキーマを更新する前に、リポジトリテーブルのフルバックアップを取ってください。

1. Identity Manager は、2 つのテーブルを使用してユーザーオブジェクトを格納します。`sample` ディレクトリにあるサンプルスクリプトを利用して、スキーマを変更することができます。

   リポジトリテーブルを更新するには、`sample/upgradeto2005Q4M3.`*`DatabaseName`* スクリプトを参照してください。

注　MySQL データベースの更新作業が多く発生します。詳細については、`sample/upgradeto2005Q4M3.mysql` を参照してください。

Identity Manager 管理ガイド

追加事項

- サンライズが設定された場合、ユーザーを作成すると作業項目が作成され、「**承認**」タブに表示されます。この項目を承認するとサンライズの日付が上書きされ、アカウントが作成されます。この項目を却下すると、アカウントの作成はキャンセルされます。
- 調整をスケジュールするときに、スケジュールのカスタマイズに使用する規則の名前を指定できるようになりました。たとえば、規則によって、土曜日にスケジュールされた調整を次の月曜日に延期することができます。(ID-11391)

第 4 章「管理」

- 承認の委任機能について次の情報を追加する必要があります。(ID-12754)

承認の委任

承認者の機能を持っている場合、指定した期間、将来の承認リクエストを 1 人以上のユーザー (委任先) に委任することができます。委任先のユーザーに承認者の機能は必要ありません。

委任機能は、将来の承認リクエストにのみ適用されます。「承認待ち」タブに表示される既存のリクエストは、転送機能によって転送されます。

委任を設定するには、「**承認**」エリアの「**自分の承認作業項目の委任**」タブを選択します。

注意

- WorkItem あるいは Approval、OrganizationApproval、ResourceApproval、RoleApproval など WorkItem の任意の authType 拡張、あるいは WorkItem またはその authType の 1 つを拡張する任意のカスタムサブタイプ、のいずれかへの委任権を認可する機能を割り当てられている場合に委任機能が利用可能です。

- 承認の委任は、「ユーザーの作成 / 編集 / 表示」ページの「セキュリティー」フォームタブ、および「ユーザーインタフェース」メインメニューから行うこともできます。

委任先は有効な委任期間の間、委任元に代わってすべてのリクエストを承認することができます。委任された承認リクエストには、委任先の名前が含まれます。

リクエストの監査ログエントリ

承認された承認リクエストと却下された承認リクエストの監査ログエントリには、リクエストが委任された場合には、委任元の名前が含まれます。ユーザーの承認委任先情報の変更は、ユーザーの作成または変更時に監査ログエントリの詳細な変更セクションに記録されます。

第 5 章「設定」

- リソースを作成または更新する際のアイデンティティー属性の設定に関する情報を追加する必要があります。(ID-12606)

リソースの変更に基づいたアイデンティティー属性の設定

アイデンティティー属性は、リソース上の属性の相互関係を定義します。リソースを作成または変更すると、こうした属性間の関係が影響を受けることがあります。

リソースを保存するときに、Identity Manager から「アイデンティティー属性を設定しますか ?」ページが表示されます。このページで次のいずれかを選択できます。

- 「リソースの変更に基づいてアイデンティティー属性を設定」ページに移動して属性を設定します。続けるには、「**はい**」をクリックします。
- リソースリストに戻ります。戻るには、「**いいえ**」をクリックします。
- 今後のリソース更新ではこのページを無効にします。ページを無効にするには、「**次回から質問しない**」をクリックします。

注 「**次回から質問しない**」ボタンは、MetaView の変更機能を持つユーザーにのみ表示されます。

「アイデンティティー属性を設定しますか ?」ページの再有効化

このページを無効にしている場合、次のいずれかの方法で再度有効にできます。

- Identity Manager のデバッグ機能を使用して、ログインしているユーザーの WSUser オブジェクトを編集します。`idm_showMetaViewFromResourceChangesPage` プロパティーの値を `true` に変更します。
- 次の例のようなフィールドを、Tabbed User Form などのユーザーフォームに追加してから、「ユーザーの編集」ページを使ってこの設定の値を変更します。

```
<Field
name='accounts[Lighthouse].properties.displayMetaViewPage'>
  <Display class='Checkbox'>
    <Property name='label' value='Display Meta View?'/>
  </Display>
</Field>
```

属性の設定

「リソースの変更に基づいてアイデンティティー属性を設定」ページを使用して、アイデンティティー属性のソースとターゲットとして使用される変更済みリソースのスキーママップから属性を選択します。状況によって、「ソース」列と「ターゲット」列で属性を選択できないことがあります。次の場合は、ソースとして属性を選択できません。

- スキーママップで暗号化のマークが付いている
- スキーママップで書き込み専用のマークが付いている

次の場合は、ターゲットとして属性を選択できません。

- 同じ名前でグローバルに保存されたアイデンティティー属性がある。たとえば、「firstname」という名前のグローバルアイデンティティー属性があるとすると、firstname ターゲットオプションが選択状態になり、この選択を解除することはできません。
- スキーママップで読み取り専用のマークが付いている。
- リソースのアカウント作成および更新機能が、リソースで無効にされているかサポートされていない。

第 7 章「セキュリティー」

- 「共通リソースの認証の設定」の節に、次のような注記を追加する必要があります。(ID-16805)

  共通リソースグループに一覧表示されるすべてのリソースも、ログインモジュール定義に含まれる必要があります。共通リソースの完全なリストもログインモジュール定義に出現しない場合、共通リソース機能は正しく動作しません。

- 同時ログインセッションの制限に関する情報を追加する必要があります。(ID-12778)

同時ログインセッションの制限

Identity Manager ユーザーは、デフォルトで同時ログインセッションを許可されています。ただし、システム設定オブジェクトの `security.authn.singleLoginSessionPerApp` 設定属性の値を変更することにより、ログインアプリケーションごとの同時セッション数を 1 に制限できます。この属性は、ログインアプリケーション名ごとに 1 つの属性を含むオブジェクトです (例 : 管理者インタフェース、ユーザーインタフェース、BPE など)。この属性の値を `true` に変更すると、各ユーザーに単一のログインセッションが適用されます。

適用されても、ユーザーは複数のセッションにログインできますが、アクティブかつ有効な状態を保持するのは、最後にログインしたセッションのみです。ユーザーが無効なセッション上で操作を実行すると、ユーザーはそのセッションから自動的に排除され、そのセッションは終了します。

第 8 章「レポート」

「概要レポート」の節にあるユーザーレポートの説明に、マネージャーでユーザーを検索する機能を追加する必要があります。(ID-12690)

- 「**ユーザー**」– ユーザー、ユーザーに割り当てられたロール、およびユーザーがアクセスできるリソースが表示されます。ユーザーレポートの定義時に、どのユーザーを含めるかを名前、割り当てられたマネージャー、ロール、組織、リソースの割り当てに基づいて選択できます。

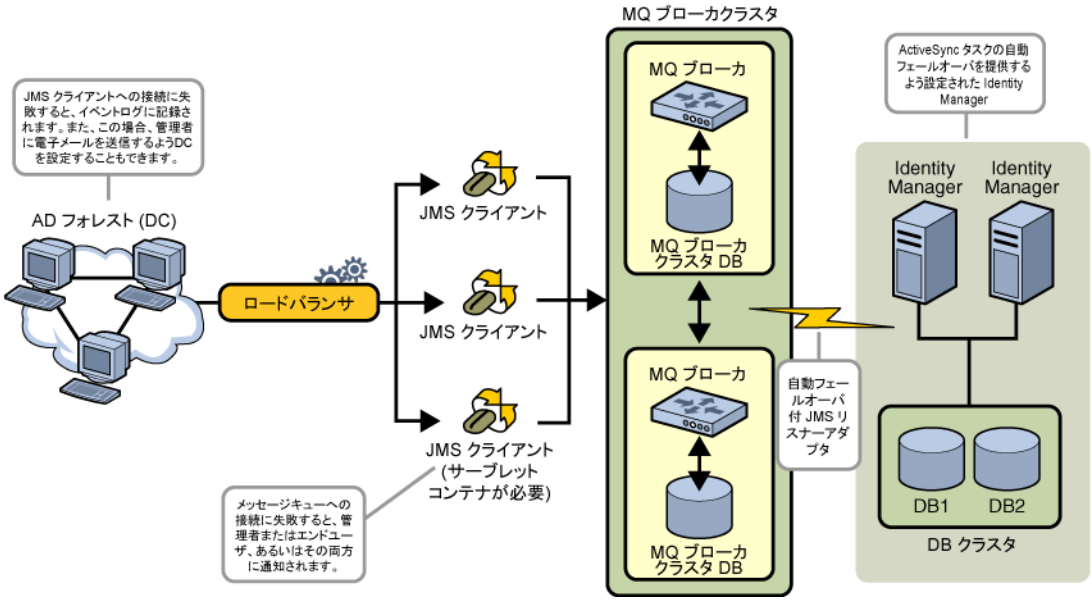
第 10 章「PasswordSync」

- Sun JMS サーバーで Windows PasswordSync を設定する手順を追加する必要があります。このリリースノートに付属している『Configuring PasswordSync with a Sun JMS Server』マニュアルを参照してください。(ID-11788)
- PasswordSync のフェイルオーバー付き高可用性 (HA) アーキテクチャーについて説明する、次の新しい節を追加する必要があります。(ID-12634)
- Java Messaging Server を使用しないで PasswordSync を実装する方法について説明する節を追加する必要があります。(ID-14974)

Windows PasswordSync のフェイルオーバー配備

PasswordSync のアーキテクチャーによって、Identity Manager の Windows パスワード同期の配備内からシングルポイント障害が完全に除去されます。

各 ADC (Active Directory Domain Controller) がロードバランサ経由で一連の JMS クライアントの 1 つに接続するように設定すると (次図参照)、JMS クライアントからメッセージキューブローカクラスタにメッセージを送信できるので、いずれかのメッセージキューに障害が発生してもメッセージが失われないことが保証されます。



注 多くの場合、メッセージキュークラスタにメッセージの持続性を保持するためのデータベースが必要になります。(メッセージキューブローカクラスタの設定手順については、各ベンダーの製品マニュアルを参照。)

自動フェイルオーバーが設定された JMS リスナーアダプタを実行している Identity Manager サーバーが、メッセージキューブローカクラスタに接続します。このアダプタは同時に 1 つの Identity Manager 上でしか実行されませんが、一次 ActiveSync サーバーに障害が発生すると、このアダプタによって二次 Identity Manager サーバー上でパスワード関連メッセージのポーリングが開始され、パスワードの変更が下流のリソースへと伝播されていきます。

Java Messaging Service を使用しない PasswordSync の実装

JMS を使用しないで PasswordSync を実装するには、次のフラグを付けて設定アプリケーションを起動します。

```
Configure.exe -direct
```

`-direct` フラグを指定すると、設定アプリケーションに「User」タブが表示されます。「PasswordSync の設定」に説明されている手順に従って PasswordSync を設定します。次の点に注意してください。

- 「JMS Settings」タブと「JMS Properties」タブは設定しないでください。
- 「User」タブで、Identity Manager への接続に使用するアカウント ID とパスワードを指定します。

JMS を使用しないで PasswordSync を実装する場合、JMS リスナーアダプタを作成する必要はありません。したがって、「PasswordSync の配備」で説明されている手順は省いてください。通知を設定する場合は、「Change User Password」ワークフローを修正する必要が生じる場合があります。

注 そのあとで、設定アプリケーションを `-direct` フラグを指定しないで実行すると、PasswordSync に JMS の設定が必要になります。もう一度 JMS を省略するには、`-direct` フラグを付けてアプリケーションを再度起動してください。

修正すべき事項

第 5 章「設定」

カスタムリソースクラスの表で、ClearTrust リソースアダプタのカスタムリソースクラスを次のように修正する必要があります (ID-12681)。

```
com.waveset.adapter.ClearTrustResourceAdapter
```

第 10 章「PasswordSync」

「PasswordSync の設定」の節の「JMS 設定ダイアログ」で、Queue Name についての説明を次のように修正する必要があります。

- 「**Queue Name**」には、パスワード同期イベントのデスティネーションルックアップ名を指定します。(ID-12621)

lh リファレンス

指定したオプションのあとの空白が正しく示されるように、コマンド構文を更新する必要があります。(ID-12798)

-p オプションを使用する場合は、セキュリティー上の理由で、パスワードを直接コマンド行に指定するのではなく、パスワードが書かれているテキストファイルのパスを指定してください。

例

- `lh com.waveset.session.WavesetConsole`
- `lh console`
- `lh console –u $user –p PathtoPassword.txt`
- `lh setup -U Administrator -P F.txt`
- `lh setRepo –c -A Administrator -C PathtoPassword.txt`
- `lh setRepo –t LocalFiles –f $WSHOME`

license コマンド

使用方法

```
license [options] { status | set {parameters} }
```

オプション

- `-U` *`username`* (Configurator のアカウント名を変更する場合)
- `-P` *`PathtoPassword`*`.txt` (Configurator のパスワードを変更する場合)

`set` オプションのパラメータは、`-f` *File* の形式にする必要があります。

Identity Manager Workflows, Forms, and Views

第 1 章「Workflows」

この章の手動操作に関する説明に、次の情報を追加してください。

作業項目の `itemType` がウィザードに設定されている場合、デフォルトでは、作業項目ビューをチェックする際に、転送中の承認者の取得が省略されます。itemType がウィザード以外の場合は、当該手動操作で利用されているフォームのプロパティーとして `CustomUserList` が true に設定されていない限り、Identity Manager は転送中の承認者を引き続き取得します。(ID-10777)

この設定を行うには、次のコードをフォームに含めます。

```
<Form>
   <Properties>
     Property name='CustomUserLists' value='true'/>
   </Properties>
```

第 2 章「Workflow Services」

- `createView` セッションワークフローサービスの引数表が正しくありません。次の表は、このサービスで使用可能な引数についての説明です。

名前	必須	有効値	説明
op	yes	*createView*	
viewid	yes		作成するビューの種類を指定します。
options	no		ビュー固有のオプションを指定します。渡すことができる値は、使用されているビューに固有です。最も一般的なものはユーザービューです。 オプションは `session.UserViewConstants` で見つけることができます。比較的単純なビューでは、ビューのオプション定数を `Viewer.java` ファイルで宣言するようにしてください。 多くの場合、ワークフローから使用されるビューのうち、2 番目に一般的なものは ProcessViewer であり、PasswordViewer、DisableViewer、EnableViewer、および RenameViewer がそれに続きます。これらには比較的少数のオプションしかありません。

- Identity Manager には、指定された文字列の値を文字列ポリシーと照合する、`checkStringQualityPolicy` ワークフローサービスメソッドがあります。(ID-12428、12440)

名前	必須	有効値	説明
policy	yes		ポリシーを識別します (String)
map	no		文字列に含まれてはならないデータのマップを提供します。(Map) `returnNull` -- (オプション) true に設定すると、メソッドは成功時に null オブジェクトを返します。
value	yes		チェックする文字列の値を指定します。(Object)
pwdhistory	no		ユーザーの以前のパスワードの一覧を大文字の暗号化形式で示します。
owner	yes		文字列の値をチェックするユーザーを識別します。

このメソッドは、`checkPolicyResult` オブジェクトを返します。文字列がポリシーテストにパスすると、`true` を返します。文字列がポリシーテストにパスしないと、メソッドはエラーメッセージを返します。`map` パラメータで `returnNull` オプションを true に設定しておくと、メソッドは成功時に null オブジェクトを返します。

- Identity Manager で auditPolicyScan ワークフローサービスがサポートされました。(ID-12615) このワークフローサービスを使用して、ユーザーに割り当てられたポリシーに基づいてユーザーの監査ポリシー違反をスキャンします。ユーザーにポリシーが割り当てられていない場合、組織に割り当てられたポリシーがあれば、Identity Manager はそれを使用します。

  このメソッドは、指定されたユーザーのユーザービューを指定する 1 つの引数 *view* を取ります。このメソッドは checkPolicyResult ワークフロー変数を返します。この変数の内容は、次のいずれかです。

  - 違反のリスト
  - null 値 (違反が発生しない場合)

第 3 章「Forms」

Identity Manager では、リソースのスキーママップ内の属性が必須かどうかを画面上で識別できます。必須の属性には、「ユーザーの編集」フォーム上で * (アスタリスク) が付きます。デフォルトでは、Identity Manager の属性名に続くテキストフィールドの後ろにこのアスタリスクが表示されます。(ID-10662)

アスタリスクの場所を変更するには、次の手順に従います。

1. Identity Manager BPE または任意の XML エディタを使用して、コンポーネントのプロパティーの設定オブジェクトを開きます。
2. `<SimpleProperties>` タグに `EditForm.defaultRequiredAnnotationLocation=left` を追加します。

   `defaultRequiredAnnotationLocation` の有効値は、left、right、および none です。
3. 変更を保存して、アプリケーションサーバーを再起動します。

第 4 章「FormUtil Methods」

- Identity Manager には、指定された文字列の値を文字列ポリシーと照合する、新しい `checkStringQualityPolicy` FormUtil メソッドがあります。(ID-12428、12440)

  checkStringQualityPolicy(LighthouseContext s, String policy, Object value, Map map, List pwdhistory, String owner)

パラメータ	説明
s	現在のユーザーの Lighthouse コンテキストを指定します。
policy	(必須) 文字列のテストの照合先となるポリシーの名前を指定します。
value	(必須) チェックする文字列の値を指定します。
map	(省略可) 文字列に含まれてはならないデータのマップを提供します。 `returnNull` -- (オプション) `true` に設定すると、メソッドは成功時に null オブジェクトを返します
pwdhistory	(省略可) ユーザーの以前のパスワードの一覧を大文字の暗号化形式で示します。
owner	(必須) 文字列の値をチェックするユーザーを識別します。

文字列がポリシーテストにパスすると、このメソッドは true を返します。文字列がポリシーテストにパスしないと、メソッドはエラーメッセージを返します。`map` パラメータで `returnNull` オプションを true に設定しておくと、メソッドは成功時に null オブジェクトを返します。

- Identity Manager で `controlsAtLeastOneOrganization` FormUtil メソッドを利用できるようになりました。(ID-9260)

  controlsAtLeastOneOrganization(LighthouseContext s, List organizations)

  throws WavesetException {

  現在認証されているユーザーが、1 つ以上の組織 (ObjectGroup) 名のリスト上で指定された任意の組織を制御するかどうかを決定します。サポートされている組織のリストには、ObjectGroup タイプのすべてのオブジェクトの一覧表示で返された組織が含まれます。

パラメータ	説明
s	現在のユーザーの Lighthouse コンテキスト (セッション) を指定します。
organizations	1 つ以上の組織名のリストを指定します。サポートされている組織のリストには、ObjectGroup タイプのすべてのオブジェクトの一覧表示で返された組織が含まれます。

このメソッドの戻り値は次のとおりです。

`true` – 現在の認証済み Identity Manager ユーザーは、リスト内の任意の 1 つの組織を制御します。

`false` – 現在の認証済み Identity Manager ユーザーは、リスト内のどの組織も制御しません。

第 5 章「Views」

アカウントタイプ

このリリースの Identity Manager では、アカウントタイプを使ってリソース上の複数のアカウントをユーザーに割り当てることができます。(ID-12697) リソースをユーザーに割り当てる際に、リソース上のアカウントタイプを割り当てることもできるようになりました。ただし、次の制限があります。

- リソース上のどのアカウントも、複数のタイプに属することはできない。
- 通常、ユーザーは所定のタイプのアカウントを 1 つだけ与えられる。

アカウントタイプをリソースに関連付ける前に、まず管理者がリソース上のアカウントタイプを定義する必要があります。IdentityRule を定義する必要もあります (アイデンティティー規則の例については、samples/identityRules.xml を参照)。

Identity Manager は IdentityRule サブタイプを使用して、規則をアカウントタイプに関連付けます。この規則から、必要に応じて `accountIds` が生成されます (これらの規則はアイデンティティーテンプレートと同様に機能するが、XPRESS に実装されるため LighthouseContext API にアクセス可能)。

Identity Manager 管理者インタフェースを使用してアカウントタイプをリソースに割り当てる方法の詳細については、『Identity Manager 管理ガイド』を参照してください。

アカウントタイプの省略

リソース上のアカウントタイプを省略すると、Identity Manager によって下位互換性のあるデフォルトのアカウントタイプが割り当てられます。ただし、どのリソースにもアカウントタイプが定義されていない場合、この機能は無効になります。

デフォルトのアカウントタイプはアイデンティティーテンプレートを使用します。ただし、デフォルトのタイプでアイデンティティーテンプレートの代わりに、指定した規則を使用するように指定することもできます。

デフォルトのアカウントタイプは、ユーザーがそのタイプのアカウントを複数割り当てることができるという点で特異です。とはいえ、同じタイプのアカウントを複数割り当てないようにするのが最善です。

ビューに関連する変更

Identity Manager のビューに加えられた次の変更により、アカウントタイプがサポートされました。

- リソースビューに `accountType` 属性 (List) が追加されました。各エントリは `identityRule` 属性を持つオブジェクトで、このタイプの `accountId` の生成に使用される規則を指定します。
- ロールビューとアプリケーションビュー両方の `resources` 属性で、修飾されたリソース割り当てを使用できるようになりました。この修飾された割り当ての構文は、`<resource name>|<account type>` です。
- ユーザービューに `waveset.resourceAssignments` 属性が追加され、修飾されたリソース割り当てが利用可能になりました (`waveset.resources` には修飾されていない参照しか含まれない)。どちらの属性も変更できますが、更新には `waveset.resourceAssignment` のみを、読み取り専用の目的には `waveset.resources` のみを使用するのが最善です。

  ユーザービューの `accounts` 属性内のオブジェクトのアクセス方法は、この新しいリリースで追加された内容によっても変更を受けません。`accounts` リストにインデックスを作成するには、修飾されたリソース名を使用します (たとえば、`accounts[resource|type]` では、指定したリソースとタイプの組み合わせに対するリソースアカウントが選択される。タイプを指定しない場合でも、`accounts[resource]` によってこれらのオブジェクトにアクセスできる。
- プロビジョン解除やパスワードの変更などの関連ビューでも、このタイプのアドレス指定を使用します。このリスト内のオブジェクトには、リソースアカウントのアカウントタイプを指定する新しい属性、`accountType` も追加されています。

承認委任先ビュー

このビューを使用して、1 人以上の Identity Manager ユーザーを承認委任先として既存の承認者に割り当てます。これにより承認者は、指定した期間、自分では承認者になれないユーザーに承認機能を委任することができます。次のハイレベル属性が含まれます。(ID-12754)

注 ユーザービューには、name 属性を除いてこれと同じ属性が含まれます。これらの新しい属性は accounts[Lighthouse] 名前空間内に格納されます。

name

承認の委任元となるユーザーを識別します。

delegateApproversTo

承認の委任先となるユーザーを指定します。有効な値は、manager、selectedUsers、delegateApproversRule などです。

delegateApproversSelected

- `delegateApproversRule` の値が `selectedUsers` の場合、選択したユーザー名の一覧が表示されます。
- `delegateApproversTo` の値が `delegatedApproversRule` の場合、選択した規則が識別されます。
- `delegateApproversTo` の値が `manager` の場合、この属性の値はありません。

delegateApproversStartDate

承認の委任を開始する日付を指定します。デフォルトでは、選択した開始日の時刻はその日の午前 12:01 です。

delegateApproversEndDate

承認の委任を終了する日付を指定します。デフォルトでは、選択した終了日の時刻はその日の午後 11:59 です。

ロールビューについての説明が次のように更新されました。(ID-12390)

ロールビュー

Identity Manager のロールオブジェクトの定義に使用します。

このビューにチェックインすると、ロールの管理ワークフローが起動されます。このワークフローは、デフォルトではビューの変更をリポジトリに適用するだけですが、承認その他のカスタマイズのためのフックの提供も行います。

次の表は、このビューのハイレベル属性の一覧です。

属性	編集可能？	データ型	必須
name	読み取り / 書き込み	String	Yes
resources	読み取り / 書き込み	List	No
applications	読み取り / 書き込み	List	No
roles	読み取り / 書き込み	List	No
assignedResources	読み取り / 書き込み	List	No
notifications	読み取り / 書き込み	List	No
approvers	読み取り / 書き込み	List	No
properties	読み取り / 書き込み	List	
organizations	読み取り / 書き込み	List	Yes

表 1 ロールビューの属性

name

ロールの名前を識別します。これは、Identity Manager リポジトリ内の Role オブジェクトの名前に対応します。

resources

ローカルに割り当てられるリソースの名前を指定します。

applications

ローカルに割り当てられるアプリケーション (リソースグループ) の名前を指定します。

roles

ローカルに割り当てられるロールの名前を指定します。

assignedResources

resources、applications、および roles によって割り当てられるすべてのリソースのリストです。

属性	編集可能？	データ型
resourceName		String
name		String
attributes		Object

resourceName

割り当てられるリソースの名前を識別します。

name

リソース名または ID を識別します (ID が望ましい)。

attributes

リソースの特性を識別します。すべてのサブ属性は文字列で、編集可能です。

属性	説明
name	リソース属性の名前
valueType	この属性に設定される値のタイプ。許可される値は Rule、text、または none です。
requirement	この属性によって設定される値のタイプ。許可される値は Rule、Text、None、Value、Merge with Value、Remove with Value、Merge with Value clear existing、Authoritative set to value、Authoritative merge with value、Authoritative merge with value clear existing です。
rule	値のタイプが Rule の場合の規則名を指定します。
value	規則のタイプが Text の場合の値を指定します。

表 2 属性のオプション (ロールビュー)

- notifications -- このロールのユーザーへの割り当てを承認する必要がある管理者の名前の一覧を示します。
- approvers -- このロールのユーザーへの割り当てを承認する必要がある承認者の名前を指定します。
- properties -- このロールに格納されるユーザー定義のプロパティーを識別します。

- organizations -- このロールがメンバーとなる組織の一覧を示します。
- リソースアカウントのビュー (プロビジョン解除ビュー、無効化ビュー、有効化ビュー、パスワードビュー、ユーザーの名前変更ビュー、再プロビジョンビュー、およびロック解除ビュー) で、ユーザーのリソースアカウント属性の取得に使用できる 2 つの新しい表示オプションがサポートされました。(ID-12482)
  - fetchAccounts – (Boolean) ユーザーに割り当てられるリソースのアカウント属性をビューに含めるようにします。
  - fetchAccountResources – 取得先のリソース名の一覧を示します。指定しない場合、割り当てられたすべてのリソースが使用されます。

  これらのオプションは、フォームプロパティーとして設定するのが最も簡単です (詳細については、このガイドの「Views」の章にある作業項目リストビューについての説明を参照)。

第 6 章「XPRESS Language」

- instanceOf 関数は現在、「XPRESS Language」の章に記載されていません。この関数は、オブジェクトが、name パラメータで指定されたタイプのインスタンスかどうかを識別します。(ID-12700)

  name – チェックの照合先となるオブジェクトタイプを識別します。

  この関数は、サブ式オブジェクトが、name パラメータで指定したタイプのインスタンスかどうかによって 1 または 0 (true または false) を返します。

  次の式では、ArrayList が List なので 1 が返されます。

```
<instanceof name='List'>
   <new class='java.util.ArrayList'/>
</instanceof>
```

第 8 章「HTML Display Components」

- SortingTable コンポーネントについての説明がを次のように改訂する必要があります。

  列ヘッダーでソート可能な内容を持つテーブルの作成に使用します。このテーブルの内容は、子コンポーネントによって決まります。列ごとに子コンポーネントを 1 つ作成します (columns プロパティーで定義される)。列は通常、FieldLoop 内に格納されます。

  このコンポーネントは、テーブルセルの描画時に子コンポーネントの align、valign、および width プロパティーを参照します。(ID-12606)

- Identity Manager で InlineAlert 表示コンポーネントがサポートされました。(ID-12606)

  エラー、警告、成功、または情報のアラートボックスを表示します。このコンポーネントは通常、ページの最上部に配置されます。`InlineAlert$AlertItem` タイプの子コンポーネントを定義すれば、1 つのアラートボックスに複数のアラートを表示できます。

  この表示コンポーネントのプロパティーは次のとおりです。

  - `alertType` – 表示するアラートのタイプを指定します。このプロパティーで、使用されるスタイルとイメージが決まります。有効値は、error、warning、success、および info です。デフォルト値は info です。このプロパティーは `InlineAlert` でのみ有効です。
  - `header` – アラートボックスに表示するタイトルを指定します。これは文字列またはメッセージオブジェクトにすることができます。このプロパティーは `InlineAlert` または `InlineAlert$AlertItem` で有効です。
  - `value` – 表示するアラートメッセージを指定します。この値は文字列またはメッセージオブジェクトにすることができます。このプロパティーは `InlineAlert` または `InlineAlert$AlertItem` で有効です。
  - `linkURL` – アラートの下に表示するオプション URL を指定します。このプロパティーは `InlineAlert` または `InlineAlert$AlertItem` で有効です。
  - `linkText` – `linkURL` のテキストを指定します。これは文字列またはメッセージオブジェクトにすることができます。このプロパティーは `InlineAlert` または `InlineAlert$AlertItem` で有効です。
  - `linkTitle` – `linkURL` のタイトルを指定します。これは文字列またはメッセージオブジェクトにすることができます。このプロパティーは `InlineAlert` または `InlineAlert$AlertItem` で有効です。

例

単一のアラートメッセージ

```
<Field>
   <Display class='InlineAlert'>
      <Property name='alertType' value='warning'/>
      <Property name='header' value='Data not Saved'/>
      <Property name='value' value='The data entered is not yet saved.
        Please click Save to save the information.'/>
   </Display>
</Field>
```

複数のアラートメッセージ

`InlineAlert` プロパティー内で定義するのは `alertType` だけです。ほかのプロパティーは `InlineAlert$AlertItems` で定義できます。

```
<Field>
   <Display class='InlineAlert'>
      <Property name='alertType' value='error'/>
```

```
    </Display>
    <Field>
      <Display class='InlineAlert$AlertItem'>
         <Property name='header' value='Server Unreachable'/>
         <Property name='value' value='The specified server could not
        be contacted.Please view the logs for more information.'/>
         <Property name='linkURL' value='viewLogs.jsp'/>
         <Property name='linkText' value='View logs'/>
         <Property name='linkTitle' value='Open a new window with
          the server logs'/>
      </Display>
    </Field>
    <Field>
      <Display class='InlineAlert$AlertItem'>
         <Property name='header' value='Invalid IP Address'/>
         <Property name='value' value='The IP address entered is
        in an invalid subnet.Please use the 192.168.0.x subnet.'/>
      </Display>
    </Field>
  </Field>
```

- Identity Manager で Selector 表示コンポーネントがサポートされました。(ID-12729)

  下に検索フィールドを伴った単一値または複数値フィールド (それぞれ Text コンポーネント、ListEditor コンポーネントに類似) を表示します。検索実行後、Identity Manager は検索フィールドの下に結果を表示し、その結果が値のフィールドに取り込まれます。

  ほかのコンテナコンポーネントとは異なり、`Selector` には値 (`search` の結果で生成されるフィールド) があります。格納されるフィールドは通常、検索条件フィールドです。`Selector` により、検索結果の内容を表示するプロパティーが実装されます。

  プロパティーは次のとおりです。

  - `fixedWidth` – コンポーネントを固定幅にするかどうかを指定します (Multiselect と同じ動作)。(Boolean)
  - `multivalued` – 値が List か String かを示します (このプロパティーの値によって、値に対して ListEditor、Text フィールドのいずれを描画するかが決まる)。(Boolean)
  - `allowTextEntry` – 表示されるリストから値を選択する必要があるか、または手動でも値を入力できるかを示します。(Boolean)
  - `valueTitle` – `value` コンポーネント上で使用するラベルを指定します。(String)
  - `pickListTitle` – `picklist` コンポーネント上で使用するラベルを指定します。(String)
  - `pickValues` – picklist コンポーネントで利用可能な値 (null の場合、picklist は表示されない)。(List)

- pickValueMap – picklist 内の値に対する表示ラベルのマップ。(Map または List)
- sorted – picklist 内の値をソートすることを指定します (複数値で順序付けされていない場合、値のリストもソートされる)。(Boolean)
- clearFields – 「クリア」ボタンの選択によってリセットされるフィールドの一覧を示します。(List)

次のプロパティーは、複数値コンポーネントでのみ有効です。

- ordered – 値の順序が重要であることを示します。(Boolean)
- allowDuplicates – 値のリストで重複値を許可するかどうかを示します。(Boolean)
- valueMap– リスト内の値に対する表示ラベルのマップを提供します。(Map)

次のプロパティーは、単一値コンポーネントでのみ有効です。

- nullLabel – null 値を示すために使用するラベルを指定します。(String)

- Select コンポーネントと MultiSelect コンポーネントの説明を次のように改訂し、caseInsensitive プロパティーについての説明を追加する必要があります。(ID-13364)

MultiSelect コンポーネント

Identity Manager で複数選択オブジェクトを表示します。2 つのテキスト選択キーが左右に並べて表示され、1 つのボックス内に定義された複数の値をもう 1 つのボックスに移動できるようになっています。左側のボックス内の値は allowedValues プロパティーで定義します。値は通常、FormUtil.getResources などの Java メソッドの呼び出しによって動的に取得されます。右側の複数選択ボックスに表示される値は、フィールド名で識別される、関連付けられたビュー属性の現在の値から取り込まれます。

availabletitle プロパティーと selectedtitle プロパティーを使って、この複数選択オブジェクトの各ボックスにフォームタイトルを設定できます。

アプレットを使用しない MultiSelect コンポーネントが必要な場合は、noApplet プロパティーを true に設定します。

注 Safari ブラウザが動作するシステムで Identity Manager を実行する場合は、MultiSelect コンポーネントを含むすべてのフォームをカスタマイズして noApplet オプションを設定する必要があります。このオプションは次のように設定します。

```
<Display class='MultiSelect'>
      <Property name='noApplet' value='true'/>
...
```

この表示コンポーネントのプロパティーは次のとおりです。

- availableTitle – 利用可能な値ボックスのタイトルを指定します。
- selectedTitle – 選択された値ボックスのタイトルを指定します。

- ordered – 選択した項目が、テキストボックスの項目のリスト内で上下に移動可能かどうかを定義します。true に設定すると、選択した項目を上下に移動するための追加のボタンが描画されます。
- allowedValues – 複数選択オブジェクトの左ボックスと関連付けられる値を指定します。この値は、文字列のリストにする必要があります。**注：**このボックスの生成に <Constraints> 要素を使用できますが、使用は推奨されません。
- sorted – 両方のボックス内の値をアルファベット順にソートすることを指定します。
- noApplet – MultiSelect コンポーネントを、アプレットを使用して実装するか、標準 HTML 選択ボックスのペアを使用して実装するかを指定します。デフォルトではアプレットを使用します。このほうが、長い値リストの処理に優れています。Safari ブラウザが動作するシステムでこのオプションを使用する場合は、前述の注意事項を参照してください。
- typeSelectThreshold – noApplet プロパティーが true に設定されている場合のみ利用できます。先打ち選択ボックスを allowedValue リストの下に表示するかどうかを制御します。左の選択ボックス内のエントリ数がこのプロパティーで定義したしきい値に達すると、追加のテキスト入力フィールドが選択ボックスの下に表示されます。このテキストフィールドに入力した文字列と合致するエントリがある場合、そのエントリが表示される位置まで選択ボックスがスクロールします。たとえば、**w** と入力すると、**w** で始まる最初のエントリまで選択ボックスがスクロールします。
- width – 選択したボックスの幅をピクセル数で指定します。デフォルト値は 150 です。
- height – 選択したボックスの高さをピクセル数で指定します。デフォルト値は 400 です。
- caseInsensitive -- 大文字と小文字を区別しないで比較する場合に使用します。

Select コンポーネント

単一選択オブジェクトを表示します。リストボックスの値は、allowedValues プロパティーで設定する必要があります。

この表示コンポーネントのプロパティーは次のとおりです。

- allowedValues – リストボックスに表示される選択可能な値のリストを指定します。
- allowedOthers – allowedValues リストに存在しない初期値でも許容され、そのままリストに追加されるように指定します。
- autoSelect – このプロパティーを true に設定すると、フィールドの初期値が null の場合に、allowedValues リストの最初の値が自動的に選択されます。
- caseInsensitive -- 大文字と小文字を区別しないで比較する場合に使用します。
- multiple – true に設定すると、複数の値を選択できるようになります。

- nullLabel – 値が選択されなかったときにリストボックスの上に表示するテキストを指定します。
- optionGroupMap – セレクタで <optgroup> タグを使用して、オプションをグループに分けて描画できるようにします。マップのキーがグループラベルに、また要素が選択可能項目のリストになるようにマップをフォーマットします (描画するには、値が allowedValues のメンバーである必要がある)。
- size – (省略可) 表示する最大行数を指定します。行数がこのサイズを超えると、スクロールバーが表示されます。
- sorted – true に設定すると、リスト内の値がソートされます。
- valueMap – raw 値を表示値にマップします。

このコンポーネントでは、command プロパティーと onChange プロパティーがサポートされます。

- DatePicker コンポーネントについての説明に、次の新しいプロパティーの説明が追加されました。(ID-14802)

  DatePicker HTML コンポーネントで、連続していない日付を選択できるようになりました。特定の日付をカレンダから選択できる、日付範囲セットを指定できます。

  DatePicker に、次の 2 つの新しいプロパティーが実装されます。

  SelectAfter -- カレンダに表示される選択可能な日付を、入力した日付以降の日付に限定します。このプロパティーの値として、日付文字列または Java Date オブジェクトを使用できます。

```
<Property name='SelectAfter' value='**/**/****'/>
```

  SelectBefore -- カレンダに表示される選択可能な日付を、入力した日付以前の日付に限定します。このプロパティーの値として、日付文字列または Java Date オブジェクトを使用できます。

```
<Property name='SelectBefore' value='**/**/****'/>
```

  <Display class='DatePicker'> タグを実装するフォームを使用する場合は、必ず、これらの変数をフォームに追加して日付の範囲を設定してください。これらのプロパティーを設定しないと、カレンダの内容が、選択可能な日付に限定されなくなります。

Identity Manager Technical Deployment Overview

関連付けられたワークフロー、フォーム、および JSP に関する次の説明は、『Identity Manager Technical Deployment Overview』のアーキテクチャーの概要に属します。(ID-7332)

プロセス実行

ユーザーがページ上のフィールドにデータを入力して「保存」をクリックすると、ビュー、ワークフロー、およびフォームの各コンポーネントが連携して、データを処理するために必要なプロセスを実行します。

Identity Manager 内の各ページには、そのページに関連付けられ、必要なデータ処理を実行するビュー、ワークフロー、およびフォームがあります。次の 2 つの表で、これらのワークフロー、ビュー、およびフォーム間の関連を示します。

Identity Manager ユーザーインタフェースのプロセス

次の表は、Identity Manager のユーザーインタフェースの各ページから開始されるプロセスに関係するフォーム、ビュー、およびワークフローを示したものです。

ユーザーインタフェースページ	フォーム	ビュー	ワークフロー
メインメニュー	• endUserMenu • デフォルトの End User Menu	ユーザー ビューは読み取り専用です。このページでは変更は行えません	なし
パスワードの変更	• endUserChangePassword • デフォルトの Change Password Form	パスワード	• changeUserPassword • デフォルトの Change User Password
その他のアカウント属性の変更	• endUserForm • デフォルトの End User Form	ユーザー	ユーザーの更新
プロセスステータスの確認	• endUserTaskList • デフォルトの End User Task List	リスト ビューにはユーザーが起動した TaskInstance オブジェクトの情報が含まれます	なし

ユーザーインタフェースページ	フォーム	ビュー	ワークフロー
プロセスステータスページは TaskViewResults クラスによって生成されます	なし	なし	なし
利用可能なプロセス	• endUserLaunchList • デフォルトの End User Launch List	リスト ビューにはユーザーがアクセス可能な TaskDefinition オブジェクトの情報が含まれます	なし
プロセスの起動 選択された TaskDefinition を起動します	TaskDefinition によって定義されます	プロセス	なし
秘密の質問の回答の変更	• changeAnswers • デフォルトの Change User Answers Form	ChangeUserAnswers	なし
自己検索 既存のリソースアカウントにのみリンクできます	• selfDiscovery • デフォルトの Self Discovery	ユーザー	ユーザーの更新
インボックス	• endUserWorkItemList • デフォルトの End User Work Item List	リスト ビューには現在のユーザーが直接所有する作業項目の情報が含まれます	なし
インボックスアイテム編集	作業項目により指定されるか、自動生成されます	作業項目	なし

管理者インタフェースのプロセス

次の表は、Identity Manager の管理者インタフェースの各ページから開始されるプロセスに関係するフォーム、ビュー、ワークフロー、および JSP を示したものです。

管理者インタフェースのページ	フォーム	ビュー	ワークフロー
「組織の作成」と「組織の編集」	システム設定マッピング コンテキストに依存し、次のフォームのいずれかになる可能性があります。 • Organization Form • Organization Rename Form • Directory Junction Form • Virtual Organization Form • Virtual Organization Refresh Form	Org	なし
ユーザーの作成	• userForm • デフォルトの Tabbed User Form	ユーザー	• createUser • デフォルトの Create User
ユーザーの更新	• userForm • デフォルトの Tabbed User Form	ユーザー	• updateUser • デフォルトの Update User
ユーザーのリソースアカウントの無効化	• disableUser • デフォルトの Disable User	無効化	• disableUser • デフォルトの Disable User
ユーザーの名前変更	• renameUser • デフォルトの Rename User Form	RenameUser	• renameUser • デフォルトの Rename User
ユーザーのリソースアカウントの更新	• reprovisionUser • デフォルトの Reprovision Form	再プロビジョン	• updateUser • デフォルトの Update User
ユーザーのリソースアカウントのロック解除	• unlockUser • デフォルトの Unlock User	ロック解除	• unlockUser • デフォルトの Unlock User
ユーザーのリソースアカウントの削除	• deprovisionUser • デフォルトの Deprovision Form	プロビジョン解除	• deleteUser • デフォルトの Delete User

管理者インタフェースのページ	フォーム	ビュー	ワークフロー
ユーザーパスワードの変更 エンドユーザー GUI と同じワークフローを使用しますが、フォームは異なります	• changePassword • デフォルトの Change User Password Form	ChangeUserPassword	• changeUserPassword • デフォルトの Change User Password
ユーザーパスワードのリセット	• resetPassword • デフォルトの Reset User Password Form	ResetUserPassword	• changeUserPassword • デフォルトの Change User Password
自分のパスワードの変更 エンドユーザーの「パスワードの変更」と同じビュー、フォーム、ワークフローですが JSP は異なります	• endUserChangePassword • デフォルトの Change Password Form	パスワード	• changeUserPassword • デフォルトの Change User Password
自分の秘密の質問の回答の変更 エンドユーザーの「回答の変更」と同じビュー、フォームですが JSP は異なります	• changeAnswers • デフォルトの Change User Answers Form	ChangeUserAnswers	なし
承認	• workItemList • デフォルトの Work Item List • デフォルトのフォームは「Work Item Confirmation」を含みます	WorkItemList	なし
作業項目の編集 作成元ワークフローの再開時に Work Item ビューの結果をチェックインするが、作業項目のチェックインを処理するためだけのワークフローは作成されません	作業項目により指定されるか、自動生成されます	作業項目	なし

管理者インタフェースのページ	フォーム	ビュー	ワークフロー
タスクの起動 選択された TaskDefinition を起動します	TaskDefinition によって定義されます	プロセス	なし
「スケジュールされたタスクの作成」と「スケジュールされたタスクの更新」	システム設定マッピングなし、デフォルトの Task Schedule Form、TaskDefinition フォームとマージ このフォームは TaskDefinition フォームと、ラッパーとしての Task Schedule Form を結合することによって生成されます	TaskSchedule	なし
「ロールの作成」と「ロールの編集」	システム設定マッピングなし コンテキストによって、デフォルトの Role Form と Role Rename Form	ロール	• manageRole • デフォルトの Manage Role
リソースの編集	システム設定マッピングなし、コンテキストに依存し、次のいずれかのフォームになります。 • Change Resource Account Password Form • Reset Resource Account Password Form • Edit Resource Policy Form • Resource Rename Form • Resource Wizard < リソースタイプ > • Resource Wizard タイプ固有のウィザードフォームを許可し、デフォルトはリソースウィザードです	リソース	• manageResource • デフォルトの Manage Resource
機能の編集	changeCapabilities、デフォルトの Change User Capabilities Form	ChangeUserCapabilities	なし

Java Server Pages (JSP) と Identity Manager でのその役割

次の表には、システムに含まれる JSP と、それらが管理者インタフェースおよびユーザーインタフェースのどのページに対応するかを示します。

Identity Manager ユーザーインタフェースの JSP

ページ	関連付けられた JSP
メインメニュー	user/main.jsp
パスワードの変更	user/changePassword.jsp
その他のアカウント属性の変更	user/changeAll.jsp
プロセスステータスの確認	user/processStatusList.jsp
プロセスステータス	user/processStatus.jsp
利用可能なプロセス	user/processList.jsp
プロセスの起動	user/processLaunch.jsp
秘密の質問の回答の変更	user/changeAnswers.jsp
自己検索	user/selfDiscover.jsp
インボックス	user/workItemList.jsp
インボックスアイテム編集	user/workItemEdit.jsp

管理者インタフェースの JSP

ページ	関連付けられた JSP
「組織の作成」と「組織の編集」	security/orgedit.jsp
ユーザーの作成	account/modify.jsp
ユーザーの更新	account/modify.jsp
ユーザーのリソースアカウントの無効化	account/resourceDisable.jsp
ユーザーの名前変更	account/renameUser.jsp

ページ	関連付けられた JSP
ユーザーのリソースアカウントの更新	account/resourceReprovision.jsp
ユーザーのリソースアカウントのロック解除	admin/resourceUnlock.jsp
ユーザーのリソースアカウントの削除	account/resourceDeprovision.jsp
ユーザーパスワードの変更	admin/changeUserPassword.jsp
ユーザーパスワードのリセット	admin/resetUserPassword.jsp
自分のパスワードの変更	admin/changeself.jsp
自分の秘密の質問の回答の変更	admin/changeAnswers.jsp
承認	approval/approval.jsp
作業項目の編集	approval/itemEdit.jsp
タスクの起動	task/taskLaunch.jsp
「スケジュールされたタスクの作成」と「スケジュールされたタスクの更新」	task/editSchedule.jsp
「ロールの作成」と「ロールの編集」	roles/applicationmodify.jsp
リソースの編集	resources/modify.jsp
機能の編集	account/modifyCapabilities.jsp

Appendix A: 「Editing Configuration Objects」

A-4 ページで、デフォルトの QueryableAttrNames の一覧に、`idmManager` も追加してください。

Identity Manager 6.0 Resources Reference

- 「Resources Reference」> 「Active Directory」> 「Account Attributes」> 「Account Attribute Support」にある、「Supported Account Attributes」の一覧は、PDF 版のマニュアルが最新です。HTML 版は更新されていません。PDF 版をお使いください。(ID-12630)
- 次の URL にある『Identity Manager 6.0 Resources Reference 2005Q4M3』の最上位ノードには、「Domino」というタイトルの節へのリンクが含まれていません (ID-12636)。

  `http://docs.sun.com/app/docs/doc/819-4520`

  このノードの「Contents」を開くか、次の URL で「Domino」という節を見つけてください。

  `http://docs.sun.com/source/819-4520/Domino_Exchange.html#wp999317`

Access Manager Adapter

「General Configuration」の説明中の Step 5 を次のように変更してください。

5. `java.security` ファイルに次の行が存在していない場合、それらを追加します。

```
security.provider.2=com.ibm.crypto.provider.IBMJCE
security.provider.3=com.ibm.net.ssl.internal.ssl.Provider
```

各行のセキュリティープロバイダのあとの数字は、Java がセキュリティープロバイダクラスを参照する際の順序になりますので、一意にしてください。このシーケンス番号は環境によって異なることがあります。java.security ファイルにすでに複数のセキュリティープロバイダがある場合、前記の順序で新しいセキュリティープロバイダを挿入し、既存のセキュリティープロバイダの番号を振り直します。既存のセキュリティープロバイダを削除したり、プロバイダが重複したりしないようにしてください。(ID-12044)

Active Directory Adapter

Active Directory で `thumbnailPhoto` (Windows 2000 Server 以上) および `jpegPhoto` (Windows 2003) バイナリ属性がサポートされました。

BridgeStream SmartRoles Adapter

Identity Manager で、SmartRoles のユーザーをプロビジョニングする BridgeStream SmartRoles リソースアダプタがサポートされました。このアダプタによってユーザーが SmartRoles 内の適切な組織に配置され、SmartRoles でそれらのユーザーに付与するビジネスロールを決定できるようになります。

SmartRoles からのユーザーの取得時に、アダプタはユーザーのビジネスロールを取得します。これらのビジネスロールを Identity Manager 内で使用して、ユーザーに割り当てる Identity Manager のロール、リソース、属性、およびアクセスを決定することができます。

さらに SmartRoles は、Active Sync を利用したユーザー変更のソースにすることができます。SmartRoles ユーザーを Identity Manager にロードして調整できます。

このアダプタの詳細については、『Sun Java™ System Identity Manager Resources Reference Addendum』を参照してください。(ID-12714)

ClearTrust Adapter

- ClearTrust リソースアダプタで ClearTrust の version 5.5.2 がサポートされました。
- 「Identity Manager Installation Notes」の説明中の Step 2 と 3 を次のように変更してください (ID-12906)。

1. ct_admin_api.jar ファイルを Clear Trust のインストール CD から WEB-INF\lib ディレクトリにコピーします。
2. SSL を使用する場合は、次のファイルを WEB-INF\lib ディレクトリにコピーします。

注 RSA Clear Trust 5.5.2 リソースにプロビジョニングする場合は、SSL 通信に追加ライブラリは必要ありません。

- asn1.jar
- certj.jar
- jce1_2-do.jar
- jcert.jar
- jnet.jar
- jsafe.jar
- jsaveJCE.jar
- jsse.jar
- rsajsse.jar
- sslj.jar

Database Table Adapter

このアダプタは、Oracle で BLOB などのバイナリデータ型をサポートします。対応する属性には、スキーママップでバイナリのマークを付ける必要があります。バイナリ属性の例として、グラフィックファイル、オーディオファイル、証明書などがあります。

Flat File Active Sync Adapter

- 管理ユーザーには、フラットファイルが格納されるディレクトリの読み取りおよび書き込みアクセスが必要です。「**違いのみを処理**」Active Sync パラメータが有効になっている場合は、このユーザーに削除アクセスも必要です。

  加えて、管理者アカウントには、Active Sync の「**ログファイルパス**」フィールドで指定されたディレクトリに対する読み取り、書き込み、および削除アクセス権が必要です。(ID-12477)
- フラットファイル形式が LDIF の場合、グラフィックファイル、オーディオファイル、証明書などのバイナリ属性を指定できます。CSV およびパイプで区切られたファイルでは、バイナリ属性はサポートされません。

HP OpenVMS Adapter

Identity Manager で、VMS version 7.0 以降をサポートする HP OpenVMS リソースアダプタがサポートされました。このアダプタの詳細については、『Sun Java™ System Identity Manager Resources Reference Addendum』を参照してください。(ID-8556)

JMS Listener Adapter

JMS リスナーアダプタで、非同期処理の代わりに同期メッセージ処理がサポートされました。そのため、「Usage Notes」にある「Connections」の節の 2 つ目のパラグラフを次のように修正してください。

JMS リスナーアダプタは同期モードで動作し、「**宛先の JNDI 名**」フィールドで指定されたキューまたはトピック宛先上で、同期メッセージコンシューマを確立します。各ポーリング間隔の間に、利用できるすべてのメッセージの受信と処理がこのアダプタで行われます。「**メッセージセレクタ**」フィールドに有効な JMS メッセージセレクタ文字列を定義すれば、メッセージをさらに修飾できます (省略可)。

「Message Mapping」の節を次のように修正してください。

修飾されたメッセージをアダプタで処理する際、まず受信 JMS メッセージが、「**メッセージマッピング**」フィールドで指定されたメカニズムを使用して名前付きの値のマップに変換されます。この処理済みのマップは、「メッセージ値マップ」と呼ばれます。

次に、メッセージ値マップが、アカウント属性スキーママップによって Active Sync マップに変換されます。指定されたアカウント属性がアダプタにある場合、メッセージ値マップで、スキーママップ内にリソースユーザー属性としても現れるキー名が検索されます。キー名が見つかるとその値が Active Sync マップにコピーされますが、Active Sync マップでのエントリ名は、スキーママップのアイデンティティーシステムユーザー属性列で指定された名前に変換されます。

メッセージ値マップにアカウント属性スキーママップを使って変換できないエントリがある場合、そのエントリがメッセージ値マップからそのまま Active Sync マップにコピーされます。

LDAP Adapter

バイナリアカウント属性のサポート

inetOrgPerson オブジェクトクラスの次のバイナリアカウント属性がサポートされました。

リソースユーザー属性	LDAP 構文	説明
audio	Audio	オーディオファイル。
jpegPhoto	JPEG	JPEG 形式のイメージ。
userCertificate	certificate	バイナリ形式の証明書。

ほかのバイナリアカウントもサポートされている可能性はありますが、テストが完了していません。

アカウントの無効化と有効化

LDAP アダプタでは、複数の方法で LDAP リソース上のアカウントを無効化できます。次のいずれかの操作でアカウントを無効化します。

不明な値へのパスワードの変更

パスワードを不明な値に変更することによってアカウントを無効化するには、「**LDAP アクティブ化メソッド**」フィールドと「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドを空白のままにします。これが、アカウントを無効化するデフォルトの方法です。新しいパスワードを割り当てると、アカウントを再度有効にできます。

nsmanageddisabledrole ロールの割り当て

nsmanageddisabledrole LDAP ロールを使用してアカウントを無効化および有効化するには、LDAP リソースを次のように設定します。

1. 「リソースパラメータ」ページで「**LDAP アクティブ化メソッド**」フィールドを nsmanageddisabledrole に設定します。
2. 「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドを *IDMAttribute*=CN=nsmanageddisabledrole,*baseContext* に設定します (*IDMAttribute* は次の手順でスキーマ上に指定される)。
3. 「アカウント属性」ページで *IDMAttribute* を Identity システム ユーザー属性として追加します。リソースユーザー属性を nsroledn に設定します。属性は String 型にする必要があります。
4. LDAP リソース上に nsAccountInactivationTmp という名前のグループを作成し、CN=nsdisabledrole,*baseContext* をメンバーとして割り当てます。

これで LDAP アカウントを無効化できます。LDAP コンソールを使って確認するには、nsaccountlock 属性の値を調べます。値が true であれば、アカウントはロックされています。

このアカウントをあとで再有効化すると、アカウントがロールから削除されます。

nsAccountLock 属性の設定

nsAccountLock 属性を使用してアカウントを無効化および有効化するには、LDAP リソースを次のように設定します。

1. 「リソースパラメータ」ページで「**LDAP アクティブ化メソッド**」フィールドを nsaccountlock に設定します。
2. 「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドを *IDMAttribute*=true に設定します (*IDMAttribute* は次の手順でスキーマ上に指定される)。たとえば、accountLockAttr=true のようにします。
3. 「アカウント属性」ページで、「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドで指定した値を Identity システム ユーザー属性として追加します。リソースユーザー属性を nsaccountlock に設定します。属性は String 型にする必要があります。

4. リソースに対する nsAccountLock LDAP 属性を true に設定します。

   Identity Manager は、アカウントを無効化するとき、nsaccountlock を true に設定します。また、nsaccountlock が true に設定された既存の LDAP ユーザーを無効と認識します。nsaccountlock が true 以外の任意の値 (null を含む) である場合、システムはユーザーが有効であると認識します。

nsmanageddisabledrole 属性と nsAccountLock 属性を使用しない、アカウントの無効化

使用しているディレクトリサーバーでは nsmanageddisabledrole 属性と nsAccountLock 属性を利用できないが、アカウントを無効化する類似の方法はあるという場合、次のいずれかのクラス名を「**LDAP アクティブ化メソッド**」フィールドに入力します。「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドに入力する値は、クラスによって異なります。

クラス名	使用方法
com.waveset.adapter.util. ActivationByAttributeEnableFalse	ディレクトリサーバーは、属性を false に設定してアカウントを有効化し、true に設定してアカウントを無効化します。 その属性をスキーママップに追加します。次に、属性の Identity Manager 名 (スキーママップの左側で定義) を「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドに入力します。
com.waveset.adapter.util. ActivationByAttributeEnableTrue	ディレクトリサーバーは、属性を true に設定してアカウントを有効化し、false に設定してアカウントを無効化します。 その属性をスキーママップに追加します。次に、属性の Identity Manager 名 (スキーママップの左側で定義) を「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドに入力します。
com.waveset.adapter.util. ActivationByAttributePullDisablePushEnable	Identity Manager で、属性と値のペアを LDAP からプルしてアカウントを無効化し、属性と値のペアを LDAP にプッシュしてアカウントを有効化します。 その属性をスキーママップに追加します。次に、属性と値のペアを「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドに入力します。スキーママップの左側で定義されている、属性の Identity Manager 名を使用します。

クラス名	使用方法
com.waveset.adapter.util.ActivationByAttributePushDisablePullEnable	Identity Manager で、属性と値のペアを LDAP にプッシュしてアカウントを無効化し、属性と値のペアを LDAP からプルしてアカウントを有効化します。 その属性をスキーママップに追加します。次に、属性と値のペアを「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドに入力します。スキーママップの左側で定義されている、属性の Identity Manager 名を使用します。
com.waveset.adapter.util.ActivationNsManagedDisabledRole	ディレクトリは、特定のロールを使用してアカウントステータスを決定します。アカウントがこのロールに割り当てられている場合、アカウントは無効です。 ロール名をスキーママップに追加します。次に、次の形式に従って、値を「**LDAP アクティブ化パラメータ**」フィールドに入力します。 *IDMAttribute*=CN=*roleName*,*baseContext* *IDMAttribute* は、スキーママップの左側で定義されている、ロールの Identity Manager 名です。

メインフレームアダプタ (ACF2、Natural、RACF、Top Secret)

Attachmate Reflection for the Web Emulator Class Library (Reflection ECL) は、メインフレームリソースに接続するために使用できます。このライブラリは IBM Host on Demand API と互換性があります。製品に用意されているインストール手順をすべて実行してください。そのあとに、「インストールの注意事項」および「SSL 設定」で説明されている手順を実行します。

インストールの注意事項

Attachmate Reflection ECL を使用して接続を設定するには、次の手順を実行します。

1. 『Identity Manager Resources Reference』の説明に従って、Identity Manager リソースリストにリソースを追加します。
2. Identity Manager インストールの `WEB-INF/lib` ディレクトリに適切な JAR ファイルをコピーします。
   - `RWebSDK.jar`
   - `wrqtls12.jar`

- profile.jar

3. どのサービスが端末セッションを管理するか定義するため、Waveset.properties ファイルに次の定義を追加します。

   serverSettings.*serverId*.mainframeSessionType=*Value*
   serverSettings.default.mainframeSessionType=*Value*

   Value は次のように設定できます。

   - 1 — IBM Host On--Demand (HOD)
   - 3 — Attachmate WRQ

   これらのプロパティーが明示的に設定されていない場合、Identity Manager は最初に WRQ、次に HOD の使用を試みます。

4. Attachmate ライブラリが WebSphere Application Server にインストールされる場合、プロパティー com.wrq.profile.dir=*LibraryDirectory* を WebSphere/AppServer/configuration/config.ini ファイルに追加します。

   これにより、Attachmate コードがライセンスファイルを見つけられるようになります。

5. アプリケーションサーバーを再起動して、Waveset.properties ファイルへの変更を有効にします。

「SSL 設定」で説明されている手順を実行します。

SSL 設定

Attachmate Reflection for the Web Emulator Class Library (Reflection ECL) は、IBM Host on Demand API と互換性があります。製品に用意されているインストール手順をすべて実行してください。そのあとに、Identity Manager で次の手順を実行します。

1. Session Properties という名前のリソース属性がリソースに対してまだ存在しない場合は、Identity Manager IDE またはデバッグページを使用して、リソースオブジェクトに属性を追加します。<ResourceAttributes> セクションに次の定義を追加します。

   ```
   <ResourceAttribute name='Session Properties' displayName='Session
   Properties' description='Session Properties' multi='true'>
   </ResourceAttribute>
   ```

2. リソースの「リソースパラメータ」ページに移動し、Session Properties リソース属性に次の値を追加します。

   ```
   encryptStream
   true
   hostURL
   tn3270://hostname:SSLport
   keystoreLocation
   Path_To_Trusted_ps.pfx_file
   ```

Oracle/Oracle ERP Adapters

「Identity Manager Resources Reference』の「Oracle/Oracle ERP」の章は、このリリースで 2 つの別個の章に分割されました。2 つの新しい章については、『Sun Java™ System Identity Manager Resources Reference Addendum』を参照してください。(ID-12758)

Oracle Adapter

- アダプタの表と『Identity Manager Resources Reference』の第 1 章にある「Oracle adapter」の節から Oracle 8i のサポートが誤って削除されています。Identity Manager は、リソースとして Oracle 8*i* をサポートしています。(ID-13078)
- この章にある「Cascade Deletes」の節の Step 1 で、「`updateableAttributes`」という節の名前が、次のように「*`updatableAttributes`*」に修正されました。(ID-13075)
- noCascade アカウント属性は、ユーザーの削除時にカスケード削除を実行するかどうかを示します。デフォルトでは、カスケード削除を実行します。カスケード削除を無効にするには、システム設定オブジェクトの `updatableAttributes` セクションにエントリを追加します。
- `oracleTempTSQuota` アカウント属性についての記述を、次のように変更してください。

  ユーザーが割り当てることのできる一時表スペースの最大量。この属性がスキーママップに存在する場合、制限値は常に一時表スペースに対して設定されます。この属性がスキーママップから削除された場合、制限値は一時表スペースに対して設定されません。Oracle 10gR2 リソースと通信するアダプタについては、この属性を削除する必要があります。(ID-12843)

Oracle ERP Adapter

- Oracle ERP アダプタで、`per_people_f` テーブルの `employee_number` を表す `employee_number` アカウント属性がサポートされました (ID-12796)。
  - 作成時に値を入力すると、アダプタが `per_people_f` テーブル内のユーザーレコードの検索、`person_id` の取得と作成 API への設定、さらに `fnd_user` テーブルの `employee_id` 列への `person_id` の挿入を試行します。
  - 作成時に `employee_number` を入力しないとこのリンク設定は試行されません。
  - 作成時に `employee_number` を入力したがその番号が見つからなかった場合、アダプタは例外をスローします。
  - `employee_number` がアダプタスキーマにある場合、アダプタは `getUser` に `employee_number` を返すように試行します。

- npw_number アカウント属性は臨時雇用者をサポートします。この属性は employee_number と同じように機能します。employee_number 属性と npw_number 属性は相互排他的です。作成時に両方が入力された場合、employee_number が優先されます。(ID-16507)

責任の監査

Oracle ERP アダプタに、監査機能をサポートする複数の属性が追加されました。(ID-11725)

フォームや関数など、ユーザーに割り当てられた責任のサブ項目を監査するには、スキーママップに auditorObject を追加します。auditorObject は、責任オブジェクトの集合を含む複雑な属性です。責任オブジェクトには、次の属性が常に返されます。

- responsibility
- userMenuNames
- menuIds
- userFunctionNames
- functionIds
- formIds
- formNames
- userFormNames
- readOnlyFormIds
- readWriteOnlyFormIds
- readOnlyFormNames
- readOnlyUserFormNames
- readWriteOnlyFormNames
- readWriteOnlyUserFormNames
- functionNames
- readOnlyFunctionNames
- readWriteOnlyFunctionNames

注 readOnly と ReadWrite の属性は、fnd_form_functions テーブルの PARAMETERS 列に次のいずれかの値を照会することで識別します。

- QUERY_ONLY=YES
- QUERY_ONLY="YES"
- QUERY_ONLY = YES
- QUERY_ONLY = "YES"
- QUERY_ONLY=Y
- QUERY_ONLY="Y"

- QUERY_ONLY = Y
- QUERY_ONLY = "Y"

「**SOB または組織、あるいはその両方を返す**」リソースパラメータが TRUE に設定されている場合、次の属性も返されます。

- setOfBooksName
- setOfBooksId
- organizationalUnitName
- organizationalUnitId

responsibility、setOfBooksName、setOfBooksId、organizationalUnitId、および organizationalUnitName 属性を除いて、これらの属性名は、スキーママップに追加可能なアカウント属性名と一致します。アカウント属性には、ユーザーに割り当てられる一連の値の集合が含まれます。`responsibility` オブジェクトに含まれる属性は、各責任に固有のものです。

責任属性には auditorResps[] ビューからアクセスできます。次のフォーム (抜粋) では、ユーザーに割り当てられたすべてのアクティブな責任とその属性を返します。

```
<defvar name='audObj'>
   <invoke name='get'>
      <ref>accounts[Oracle ERP 11i VIS].auditorObject</ref>
   </invoke>
</defvar>
<!-- this returns list of responsibility objects -->
<defvar name='respList'>
   <invoke name='get'>
      <ref>audObj</ref>
      <s>auditorResps[*]</s>
   </invoke>
</defvar>
```

次に例を示します。

- `auditorResps[0].responsibility` は、最初の責任オブジェクトの名前を返します。
- `auditorResps[0].formNames` は、最初の責任オブジェクトの formNames を返します。

Oracle EBS 12 のサポート

Oracle ERP アダプタは Oracle E-Business Suite (EBS) バージョン 12 をサポートします。『Identity Manager Resources Reference』で説明されているように、インストールされている ERP のバージョンに応じて OracleERPUserForm のセクションを編集したり、コメントにしたりする必要はなくなりました。

FormRef 属性が次のプロパティーをサポートするようになりました。

- RESOURCE_NAME — ERP リソース名を指定します。
- VERSION - ERP リソースのバージョンを指定します。指定できる値は 11.5.9、11.5.10、12 です。
- RESP_DESCR_COL_EXISTS — fnd_user_resp_groups_direct テーブルに description 列が存在するかどうかを定義します。バージョンが 11.5.10 または 12 である場合、このプロパティーは必須です。指定できる値は TRUE または FALSE です。

これらのプロパティーは、ユーザーフォームのすべての参照元で入力するようにしてください。たとえば、Tabbed User Form では、Release 12 のサポートのために、次のような記述が必要な場合があります。

```
<FormRef name='Oracle ERP User Form'>
   <Property name='RESOURCE_NAME' value='Oracle ERP R12'/>
   <Property name='VERSION' value='12'/>
   <Property name='RESP_DESCR_COL_EXISTS' value='TRUE'/>
</FormRef>
```

SAP Adapter

- 「Account Attributes」の節で、SAP HR Active Sync アダプタでサポートされるデフォルトの iDoc infotype を説明している表を修正する必要があります。0105 Communication infotype のサポートされているサブタイプが、次に示すように EMAIL から *MAIL* に変更されています (ID-12880)。

  デフォルトでは、次の infotype がサポートされます。

Infotype	名前	サポートされているサブタイプ
0000	Actions	なし
0001	Organizational Assignment	なし
0002	Personal Data	なし
0006	Addresses	01 (永住)、03 (住所)
0105	Communication	MAIL (電子メールアドレス)、0010 (インターネットアドレス)

SAPHRActiveSyncAdapter で mySAP ERP ECC 5.0 (SAP 5.0) がサポートされました。その結果、「Resource Configuration Notes」に次の変更が加えられました。(ID-12769):

SAP Resource Adapter

次のリソース設定に関する注意事項は、SAP リソースアダプタにのみ適用されます。

ユーザーが自分自身の SAP パスワードを変更できる機能を有効にするには、次の手順を実行します。

1. 「**変更時にユーザーがパスワードを入力**」リソース属性を設定します。
2. スキーママップの両側に **WS_USER_PASSWORD** を追加します。ユーザーフォーム、その他のフォームを変更する必要はありません。

SAP HR Active Sync Adapter

次のリソース設定に関する注意事項は、SAP HR Active Sync アダプタにのみ適用されます。

SAP ALE (Application Link Enabling) 技術により、SAP と Identity Manager などの外部システム間の通信が可能です。SAP HR Active Sync アダプタは、アウトバウンド ALE インタフェースを使用します。アウトバウンド ALE インタフェースでは、ベース論理システムが、アウトバウンドメッセージの送信側およびインバウンドメッセージの受信側となります。SAP ユーザーが従業員の雇用、役職名データの更新、従業員の解雇などのデータベースの変更を行う場合は、通常、ベース論理システム / クライアントにログインします。論理システム / クライアントは、受信側クライアントにも定義されている必要があります。この論理システムは、アウトバウンドメッセージの受信側として動作します。Active Sync アダプタは、2 つのシステム間のメッセージタイプとして HRMD_A メッセージタイプを使用します。メッセージタイプにより、システム間で送信されるデータの特性が設定され、IDoc タイプ (例 : HRMD_A05) とも呼ばれるデータ構造への関連付けが行われます。

次の手順により、Active Sync アダプタで SAP HR から優先フィードを受信するために SAP 上で必要な設定が提供されます。

注 HRMD_A IDoc を ALE (Application Link Enabling) 処理できるように、SAP システムパラメータを設定する必要があります。これにより、2 つのアプリケーションシステム間でデータ配布が可能になります。これは「メッセージング」とも呼ばれます。

論理システムの作成

現在の SAP 環境によっては、論理システムの作成が不要な場合があります。以前に設定されたモデルビューに HRMD_A メッセージタイプを追加して、既存の分散モデルを変更するだけでよい場合もあります。ただし、論理システムと ALE ネットワークの設定については、SAP の推奨に従うことが重要です。次の手順では、新規の論理システムと新規のモデルビューを作成する場合を想定しています。

1. トランザクションコード **SPRO** を入力し、SAP 完全版 IMG または組織に適用できるプロジェクトを表示します。
2. 使用している SAP のバージョンにより、次のいずれかを実行します。
   - SAP 4.6 では、「**ベースコンポーネント**」> 「**Application Link Enabling (ALE)**」> 「**システムの送信と受信**」> 「**論理システム**」> 「**定義 : 論理システム**」をクリックします。

- SAP 4.7 では、**「アプリケーションサーバー」> 「Application Link Enabling (ALE)」> 「システムの送信と受信」> 「論理システム」> 「定義 : 論理システム」**をクリックします。
- SAP 5.0 では、**「SAP Netweaver」> 「アプリケーションサーバー」> 「IDOC インタフェース /Application Link Enabling (ALE)」> 「基本設定」> 「論理システム」> 「定義 : 論理システム」**をクリックします。

3. **「編集」**>「新規エントリ」をクリックします。
4. 作成する論理システム (IDMGR) の名前と説明を入力します。
5. エントリを保存します。

論理システムへのクライアントの割り当て

1. トランザクションコード SPRO を入力し、SAP 完全版 IMG または組織に適用できるプロジェクトを表示します。
2. 使用している SAP のバージョンにより、次のいずれかを実行します。
   - SAP 4.6 では、**「ベースコンポーネント」> 「Application Link Enabling (ALE)」> 「システムの送信と受信」> 「論理システム」> 「割当 : 論理システム -> クライアント」**をクリックします。
   - SAP 4.7 では、**「アプリケーションサーバー」> 「Application Link Enabling (ALE)」> 「システムの送信と受信」> 「論理システム」> 「割当 : 論理システム -> クライアント」**をクリックします。
   - SAP 5.0 では、**「SAP Netweaver」> 「アプリケーションサーバー」> 「IDOC インタフェース /Application Link Enabling (ALE)」> 「基本設定」> 「論理システム」> 「割当 : 論理システム -> クライアント」**をクリックします。
3. クライアントを選択します。
4. **「ジャンプ」> 「詳細」**をクリックして、「クライアント変更 : 詳細」ダイアログボックスを表示します。
5. 「論理システム」フィールドに、このクライアントに割り当てる論理システムを入力します。
6. 「クライアントオブジェクトの変更と移送」セクションの「**変更の自動記録**」をクリックします。
7. 「保護 : クライアントコピープログラムと比較ツール」セクションの**「保護レベル 0: 制限なし」**をクリックします。
8. エントリを保存します。

分散モデルの作成

分散モデルを作成するには、次の手順に従います。

1. 送信側のシステム / クライアントにログインしていることを確認します。
2. トランザクションコード BD64 を入力します。変更モードになっていることを確認してください。
3. 「**編集**」>「**モデルビュー**」>「**登録**」をクリックします。
4. 作成するビューの短い技術的な名前、さらには開始および終了日を入力し、「**続行**」をクリックします。
5. 作成したビューを選択してから「**メッセージタイプの追加**」をクリックします。
6. 送信側 / 論理システム名を定義します。
7. 受信側 / サーバー名を定義します。
8. 「保護クライアントコピアーと比較ツール」セクションの「**保護レベル : 制限なし**」をクリックします。
9. 使用するメッセージタイプ (HRMD_A) を定義し、「**続行**」をクリックします。
10. 「**保存**」をクリックします。

RFC サーバーモジュールの SAP ゲートウェイへの登録

Active Sync アダプタは初期化時に SAP ゲートウェイに登録されます。ID は「IDMRFC」となります。この値は、SAP アプリケーションに設定された値と一致する必要があります。SAP アプリケーションを設定して、RFC サーバーモジュールでハンドルを作成できるようにする必要もあります。RFC サーバーモジュールを RFC 宛先として登録するには、次の手順に従います。

1. SAP アプリケーションでトランザクション SM59 に移動します。
2. TCP/IP 接続ディレクトリを展開します。
3. 「**登録 (F8)**」をクリックします。
4. 「RFC 宛先」フィールドに RFC 宛先システムの名前 (IDMRFC) を入力します。
5. 接続タイプを T (TCP/IP 接続) に設定します。
6. 新しい RFC 宛先の説明を入力し、「**保存**」をクリックします。
7. 「有効化タイプ」の「登録済サーバープログラム」ボタンをクリックします。
8. プログラム ID を設定します。RFC 宛先 (IDMRFC) と同じ値を使用することをお勧めします。「保存」をクリックします。
9. SAP システムが Unicode システムの場合は、ポートを Unicode 用に設定する必要があります。「**MDMP/Unicode**」タブをクリックして、「対象システムとの通信タイプ」セクションを探します。Unicode と非 Unicode の設定があります。
10. 上のほうにある「**接続テスト**」ボタンと「**ユニコードテスト**」ボタンを使用して、Identity Manager リソースへの接続をテストします。テストにパスするにはアダプタを起動しておく必要があります。

ポート定義の作成

ポートは、IDoc の送信先となる通信チャネルです。ポートには、送信側システムと受信側システム間の技術的なリンクが記述されます。このソリューションには RFC ポートを設定してください。ポート定義を作成するには、次の手順に従います。

1. トランザクションコード `WE21` を入力します。
2. 「トランザクション RFC」を選択し、「**作成**」アイコンをクリックします。「RFC 宛先」に `IDMRFC` と入力します。
3. 変更内容を保存します。

ポート定義の変更

パートナプロファイルを生成した場合は、ポート定義の入力が間違っていた可能性があります。システムが正しく動作するには、ポート定義を修正する必要があります。

1. トランザクションコード `WE20` を入力します。
2. 「**パートナタイプ LS**」を選択します。
3. 受信パートナプロファイルを選択します。
4. 「**送信パラメータ**」を選択し、「**表示**」をクリックします。
5. メッセージタイプ `HRMD_A` を選択します。
6. 「**送信オプション**」をクリックし、受信側ポートを変更して、作成した RFC ポート名 (IDMGR) にします。
7. 「出力モード」の「**すぐに IDoc をファイルへ転送**」を選択して、IDoc を作成後すぐに送信するようにします。
8. 「IDoc タイプ」セクションから基本タイプを選択します。
   - SAP 4.6 では **HRMD_A05** を選択します。
   - SAP 4.7 または 5.0 では **HRMD_A06** を選択します。
9. 「**続行** / **保存**」をクリックします。

Scripted JDBC Adapter

Identity Manager でスクリプト JDBC リソースアダプタがサポートされ、任意のデータベーススキーマおよび任意の JDBC アクセス可能なデータベースにあるユーザーアカウントを管理できるようになりました。このアダプタは、データベース内のアカウントの変更をポーリングする Active Sync もサポートします。このアダプタの詳細については、『Sun Java™ System Identity Manager Resources Reference Addendum』を参照してください。(ID-12506)

Shell Script Adapter

Identity Manager でシェルスクリプトリソースアダプタがサポートされ、リソースのホストとなるシステム上で動作しているシェルスクリプトによって制御されるリソースを管理できるようになりました。このアダプタは汎用アダプタなので、設定の自由度が大きくなっています。

Siebel CRM Adapter

親 / 子ビジネスコンポーネントナビゲーションを必要とする Siebel オブジェクトの作成と更新が可能になりました。これは、Identity Manager には通常、実装されない高度な機能です。

高度なナビゲーション機能により、子ビジネスコンポーネントの作成および更新に必要な次の情報をオプションで指定することができます。

- ビジネスオブジェクト名
- 親ビジネスコンポーネント名
- 親検索属性
- ターゲットビジネスコンポーネント
- ターゲット検索属性
- インスコープ属性 (ビジネスコンポーネントで設定 / 更新対象となる属性)
- オプションの協働動作 (co-action)

作成および更新動作時に、詳細なナビゲーション規則を使用できます。この規則はほかの種類の動作には利用できません。

Siebel CRM アダプタの高度なナビゲーション機能を実装するには、次のタスクを実行する必要があります。

- 右側のリソースユーザー属性の名前が PARENT_COMP_ID となっているスキーママップに属性を追加します。
- デバッグページを使用して、リソースの XML に次の ResourceAttribute を手動で追加します。

```
<ResourceAttribute name='AdvancedNavRule'
   displayName='Advanced Nav Rule'
   value='MY_SIEBEL_NAV_RULE'>
</ResourceAttribute>
```

  MY_SIEBEL_NAV_RULE を有効な規則名と置き換えてください。

- 詳細なナビゲーション規則を記述します。この規則には、次の 2 つの変数が存在するようにしてください。

  `resource.action` — この値は `create`、`update` のいずれかにする必要があります。

  `resource.objectType` — 通常のアカウントの保守の場合、この値は `account` になります。

この規則から、次の名前と値のペアが 1 つ以上含まれるマップを返す必要があります。

属性	定義
busObj	ビジネスオブジェクトの名前。
parentBusComp	busObj の親ビジネスコンポーネントの名前。このビジネスコンポーネントの最初の修飾された (parentSearchAttr 参照) レコードに移動することで、ビジネスオブジェクトのコンテキストが更新されます
parentSearchAttr	parentBusComp で検索フィールドとして使用する属性。検索する値は、リソースユーザー属性名が PARENT_COMP_ID の属性に対する値として設定してください。
busComp	作成または更新する最終ビジネスコンポーネントの名前。作成の場合、このビジネスコンポーネントの新規レコードがビジネスオブジェクト内に作成されます。更新の場合、このビジネスコンポーネントの最初の修飾された (searchAttr 参照) レコードに移動することで、更新するビジネスコンポーネントレコードが選択されます。
searchAttr	busComp で検索フィールドとして使用する属性。検索する値はユーザーのアカウント ID です。
attributes	設定または更新される busComp 内のフィールドの集合を指定する、文字列のリスト。このリストは、実行する動作のためにリソースのスキーママップで定義した属性に優先します。
coAction	リクエストした動作 (resource.action) が create の場合、coAction の値に update を指定すると、作成のすぐあとに更新も実行するようアダプタに指示できます。作成では設定できない必須フィールドがあり、そのため作成を論理的に完了するには更新の発生も必要という場合に、この指定が必要になることがあります。この属性は、resource.action が create に、coAction が update に設定されていない限り、無視されます。

ナビゲーション規則の例については、$WSHOME/sample/rules/SiebelNavigationRule.xml を参照してください。

Sun Java System Access Manager Adapter

- このアダプタは、Access Manager 7 以降の旧バージョンモードのみをサポートします。レルムはサポートされていません。

Sun Java System Access Manager (Access Manager 7.0 より前のバージョン) のインストールおよび設定

「Installing and Configuring Sun Java System Access Manager」の説明中の Step 4 と 8 を次のように変更してください。(ID-13087)

1. Sun Java System Access Manager サーバーからコピーされるファイルを配置するディレクトリを作成します。ここでは、このディレクトリを *CfgDir* と呼びます。Sun Java System Access Manager の場所は *AccessMgrHome* とします。
2. 次のファイルを *AccessMgrHome* から *CfgDir* にコピーします。ディレクトリ構造はコピーしないでください。
   - `lib/*.*`
   - `locale/*.properties`
   - `config/serverconfig.xml`
   - `config/SSOConfig.properties` (Identity Server 2004Q2 以降)
   - `config/ums/ums.xml`
3. UNIX 環境の場合、読み取りアクセスをすべてのユーザーに対して許可するために *CfgDir* 内の jar ファイルのアクセス権を変更しなければならない場合があります。アクセス権を変更するには、次のコマンドを実行します。
   `chmod a+r CfgDir/*.jar`
4. 次のように JAVA クラスパスを付加します。
   - **Windows**: *CfgDir*;*CfgDir*/am_sdk.jar;*CfgDir*/am_services.jar;*CfgDir*/am_logging.jar
   - **UNIX**: *CfgDir*:*CfgDir*/am_sdk.jar:*CfgDir*/am_services.jar:*CfgDir*/am_logging.jar
5. version 6.0 を使用する場合は、Java システムプロパティーを設定して *CfgDir* を指定します。次のようなコマンドを使用します。
   `java -Dcom.iplanet.coreservices.configpath=CfgDir`

6. version 6.1 以降を使用する場合は、*CfgDir*/AMConfig.properties ファイルに次の行を追加、またはファイル内のそれらの行を編集します。

   ```
   com.iplanet.services.configpath=CfgDircom.iplanet.security.
   SecureRandomFactoryImpl=com.iplanet.am.util.SecureRandomFact
   oryImpl
   com.iplanet.security.SSLSocketFactoryImpl=netscape.ldap.
   factory.JSSESocketFactory
   com.iplanet.security.encryptor=com.iplanet.services.util.
   JCEEncryption
   ```

   1 行目では configpath を設定しています。最後の 3 行では、セキュリティーの設定を変更しています。

7. *CfgDir*/am_*.jar ファイルを $WSHOME/WEB-INF/lib にコピーします。version 6.0 を使用する場合は、jss311.jar ファイルも $WSHOME/WEB-INF/lib ディレクトリにコピーします。
8. Identity Manager が Windows 上で動作している環境で Identity Server 6.0 を使用する場合は、*IdServer*\lib\jss*.dll を *CfgDir* にコピーし、*CfgDir* をシステムパスに追加します。

注 Identity Manager が Sun Java System Access Manager とは異なるシステム上にインストールされている環境では、次のエラー条件を確認してください。Sun Java System Access Manager リソースへの接続試行時に、エラー java.lang.ExceptionInInitializerError が返され、それに続く試行で java.lang.NoClassDefFoundError が返される場合は、設定データに誤りまたは欠落がないかチェックします。

java.lang.NoClassDefFoundError で示されたクラスの jar ファイルも調べます。そのクラスを含む jar ファイルのクラスパスを、アプリケーションサーバー上の JAVA クラスパスに付加します。

Sun Java System Access Manager (Version 7.0 以降の旧バージョンモード) のインストールおよび設定

旧バージョンモードのリソースアダプタをインストールおよび設定するには、次の手順に従います。

1. Sun Access Manager のインストールからクライアント SDK を構築するには、『Sun Java™ System Access Manager 7 2005Q4 Developer's Guide』に記載された手順に従います。
2. 生成される war ファイルから AMConfig.properties ファイルと amclientsdk.jar ファイルを展開します。
3. 次のディレクトリに AMConfig.properties をコピーします。

   InstallDir/WEB-INF/classes
4. 次のディレクトリに amclientsdk.jar をコピーします。

   InstallDir/WEB-INF/lib

Sun Java System Communications Services Adapter

- ユーザーの作成後にプロキシリソース上で実行可能なサンプルスクリプトに誤りがありました。次のスクリプトを使用してください。(ID-12536)

```
SET PATH=c:\Sun\Server-Root\lib
SET SYSTEMROOT=c:\winnt
SET CONFIGROOT=C:/Sun/Server-Root/Config
mboxutil -c -P user/%WSUSER_accountId%.*
```

- inetOrgPerson オブジェクトクラスの次のバイナリアカウント属性がサポートされました。

リソースユーザー属性	LDAP 構文	説明
audio	Audio	オーディオファイル。
jpegPhoto	JPEG	JPEG 形式のイメージ。
userCertificate	certificate	バイナリ形式の証明書。

ほかのバイナリアカウントもサポートされている可能性はありますが、テストが完了していません。

Top Secret Adapter

『Identity Manager Resources Reference』で、TopSecret アダプタがアカウント名の変更をサポートすると説明されていますが、これは誤りです。このアダプタで TopSecret アカウント名の変更はサポートされていません。

第 3 章 :「Adding Actions to Resources」

「Windows NT Examples」の節で、3 つの例のすべてで `Field` の名前が間違って定義されています。`accounts[NT].attributes.` を `resourceAccounts.currentResourceAccounts[NT].attributes.` に置き換えてください。たとえば、「Example 3: Action that Follows the Deletion of a User」のステップ 4 では、`Field` 名の正しい定義は次のとおりです。

```
<Field name=
'resourceAccounts.currentResourceAccounts[NT].attributes.delete after
action'>
```

Identity Manager Tuning, Troubleshooting, and Error Messages

追加事項

- タスクに問題がある場合に、com.waveset.task.Scheduler の標準追跡機能を使ってタスクスケジューラを追跡できるようになりました。

  詳細については、『Sun Java™ System Identity Manager Tuning, Troubleshooting, and Error Messages』の「Tracing the Identity Manager Server」を参照してください。

- 特定のエントリメソッドより下のレベルで発生する問題をデバッグする場合は、そのメソッドレベルで追跡することを検討します。Identity Manager では、メソッドとその直接および間接サブ呼び出しのみを追跡できるようになりました。(ID-14967)

  この機能を有効にするには、`subcalls` 修飾子を使用して次のようにスコープのトレースレベルを設定します。

```
trace 4,subcalls=2
com.waveset.recon.ReconTask$WorkerThread#reconcileAccount
```

  この例では、`reconcileAccount()` メソッドをレベル 4 で、すべてのサブ呼び出しをレベル 2 で追跡します。

  詳細については、『Sun Java™ System Identity Manager Tuning, Troubleshooting, and Error Messages』の「Defining a Trace Configuration」を参照してください。

修正すべき事項

このリリースでは JDK 1.4.2 をインストールする必要があるため、第 1 章「Performance Tuning, Optimizing the J2EE Environment」の、Cryptix の jar ファイル (`cryptix-jceapi.jar` および `cryptix-jce-provider.jar`) を `idm\WEB-INF\lib` ディレクトリから削除するという指示は該当しなくなりました (Identity Manager の以前のバージョンからアップグレードしている場合を除く)。

Identity Manager Deployment Tools

修正すべき事項

第 7 章「Using Identity Manager Web Services」

「ExtendedRequest Examples」の節にある launchProcess の例を次のように修正する必要があります。(ID-13044)

launchProcess

次の例は、`launchProcess` リクエストの一般的な形式を示しています。(View — Process ビュー。)

```
ExtendedRequest req = new ExtendedRequest();
req.setOperationIdentifier("launchProcess");
req.setAsynchronous(false);
req.setAttribute("process", "Custom Process Name");
req.setAttribute("taskName", "Custom Process Display Name");
SpmlResponse res = client.request(req);
```

helpTool の使用

Identity Manager 6.0 リリースでは、HTML 形式のオンラインヘルプおよびマニュアルファイルを検索できる新しい機能が追加されました。検索エンジンは SunLabs の「Nova」検索エンジン技術をベースとしています。

Nova エンジンの使用には、インデックス作成と検索の 2 つの段階があります。インデックス作成段階では、入力ドキュメントが分析され、検索段階で使用されるインデックスが作成されます。検索では、検索語が見つかったコンテキストで構成される「パッセージ」を抽出することが可能です。パッセージ検索プロセスでは元の HTML ファイルが存在している必要があるため、これらのファイルが、検索エンジンがアクセス可能なファイルシステム内の場所に存在している必要があります。

helpTool は、次の 2 つの基本機能を実行する Java プログラムです。

- 検索エンジンが認識している場所に HTML ソースファイルをコピーします。
- 検索段階で使われるインデックスを作成します。

helpTool はコマンド行から次のようにして実行します。

```
$ java -jar helpTool.jar
使用法 : HelpTool
 -d     検索先ディレクトリ
 -h     このヘルプ情報
 -i     入力ファイルを含むディレクトリまたは JAR、ワイルドカードは不可
```

```
-n      Nova インデックスのディレクトリ
-o      出力ファイル名
-p      プロパティーファイルのインデックス作成
```

オンラインヘルプインデックスの再構築 / 再作成

オンラインヘルプの HTML ファイルは JAR ファイルにパッケージ化されています。これらのファイルを、検索エンジン用のディレクトリに展開する必要があります。次の手順を使用します。

1. helpTool の配布パッケージを一時ディレクトリに展開します。(詳細は未定)

   この例では、ファイルを `/tmp/helpTool` に展開します。

2. UNIX シェルまたは Windows のコマンドウィンドウで、Identity Manager アプリケーションが Web コンテナに配備されたディレクトリに移動します。

   たとえば、Sun Java System Application Server のディレクトリは次のようになります。

   ```
   /opt/SUNWappserver/domains/domain1/applications/j2ee-modules/idm
   ```

3. 現在の作業ディレクトリを `help/` ディレクトリに変更します。

注　このディレクトリから helpTool を実行することが重要です。そうしないと、インデックスが正しく作成されません。また、`index/help/` サブディレクトリの内容を削除することによって、古いインデックスファイルを削除することをお勧めします。

4. コマンド行引数に指定する次の情報を収集します。

• **検索先ディレクトリ** :	`html/help/ja_JP` **注** : インストール環境に適したロケール文字列を使用してください。
• **入力ファイル** :	`../WEB-INF/lib/idm_l10n_ja_JP.jar`
• **Nova インデックスディレクトリ** :	`index/help`
• **出力ファイル名** :	`index_files_help.txt` **注** : ファイルの名前は重要ではありませんが、そのファイルがすでに存在する場合、ツールは終了します。
• **インデックス作成プロパティーファイル** :	`index/index.properties`

5. 次のコマンドを実行します。

```
$ java -jar /tmp/helpTool/helpTool.jar -d html/help/ja_JP
-i ../WEB-INF/lib/idm_l10n_ja_JP.jar -n index/help -o
index_files_help.txt -p
```

```
index/index.properties
Extracted 475 files.
[15/Dec/2005:13:11:38] PM Init index/help AWord 1085803878
[15/Dec/2005:13:11:38] PM Making meta file: index/help/MF: 0
[15/Dec/2005:13:11:38] PM Created active file: index/help/AL
[15/Dec/2005:13:11:40] MP Partition: 1, 475 documents, 5496 terms.
[15/Dec/2005:13:11:40] MP Finished dumping: 1 index/help 0.266
[15/Dec/2005:13:11:40] IS 475 documents, 6.56 MB, 2.11 s, 11166.66 MB/h
[15/Dec/2005:13:11:40] PM Waiting for housekeeper to finish
[15/Dec/2005:13:11:41] PM Shutdown index/help AWord 1085803878
```

マニュアルインデックスの再構築 / 再作成

マニュアルインデックスを再構築または再作成するには、次の手順を使用します。

1. helpTool の配布パッケージを一時ディレクトリに展開します。(詳細は未定)
   この例では、ファイルを `/tmp/helpTool` に展開します。
2. UNIX シェルまたは Windows のコマンドウィンドウで、Identity Manager アプリケーションが Web コンテナに配備されたディレクトリに移動します。
   たとえば、Sun Java System Application Server のディレクトリは次のようになります。
   `/opt/SUNWappserver/domains/domain1/applications/j2ee-modules/idm`
3. 現在の作業ディレクトリを `help/` ディレクトリに変更します。

注 このディレクトリから helpTool を実行する必要があります。そうしないと、インデックスが正しく作成されません。また、`index/docs/` サブディレクトリの内容を削除することによって、古いインデックスファイルを削除することをお勧めします。

4. コマンド行引数に指定する次の情報を収集します。

• **検索先ディレクトリ** :	`html/docs`
• **入力ファイル** :	`../doc/HTML/en_US` **注** : ツールは `en_US/` ディレクトリとサブディレクトリを検索先にコピーします。
• **Nova インデックスディレクトリ** :	`index/docs`
• **出力ファイル名** :	`index_files_docs.txt` **注** : ファイルの名前は重要ではありませんが、そのファイルがすでに存在する場合、ツールは終了します。
• **インデックス作成プロパティーファイル** :	`index/index.properties`

5. 次のコマンドを実行します。

```
$ java -jar /tmp/helpTool/helpTool.jar -d html/docs -i
../doc/HTML/en_US -n index/docs -o index_files_docs.txt -p
index/index.properties
Copied 84 files.
Copied 105 files.
Copied 1 files.
Copied 15 files.
Copied 1 files.
Copied 58 files.
Copied 134 files.
Copied 156 files.
Copied 116 files.
Copied 136 files.
Copied 21 files.
Copied 37 files.
Copied 1 files.
Copied 13 files.
Copied 2 files.
Copied 19 files.
Copied 20 files.
Copied 52 files.
Copied 3 files.
Copied 14 files.
Copied 3 files.
Copied 3 files.
Copied 608 files.
[15/Dec/2005:13:24:25] PM Init index/docs AWord 1252155067
[15/Dec/2005:13:24:25] PM Making meta file: index/docs/MF: 0
[15/Dec/2005:13:24:25] PM Created active file: index/docs/AL
[15/Dec/2005:13:24:28] MP Partition: 1, 192 documents, 38488 terms.
[15/Dec/2005:13:24:29] MP Finished dumping: 1 index/docs 0.617
[15/Dec/2005:13:24:29] IS 192 documents, 14.70 MB, 3.81 s, 13900.78
MB/h
[15/Dec/2005:13:24:29] PM Waiting for housekeeper to finish
[15/Dec/2005:13:24:30] PM Shutdown index/docs AWord 1252155067
```

非推奨の API

この章では、Identity Manager 6.0 2005Q4M3 SP1 で非推奨になったすべての Identity Manager API (アプリケーションプログラミングインタフェース) と、その代替となる API (存在する場合) の一覧を示します。この章は次の各節に分かれています。

- 非推奨のコンストラクタ
- 非推奨のメソッドとフィールド

非推奨のコンストラクタ

次の表は、非推奨になったコンストラクタと代替のコンストラクタ (存在する場合) の一覧です。

非推奨のコンストラクタ	代替
com.waveset.adapter.ActiveDirectoryActiveSyncAdapter	com.waveset.adapter.ADSIResourceAdapter
com.waveset.adapter.AD_LDAPResourceAdapter	com.waveset.adapter.LDAPResourceAdapter
com.waveset.adapter.AttrParse	com.waveset.object.AttrParse
com.waveset.adapter.ConfirmedSync	
com.waveset.adapter.DblBufIterator	com.waveset.util.BufferedIterator com.waveset.util.BlockIterator com.waveset.adapter.AccountIteratorWrapper
com.waveset.adapter.DominoActiveSyncAdapter	com.waveset.adapter.DominoResourceAdapter
com.waveset.adapter.LDAPChangeLogActiveSyncAdapter	com.waveset.adapter.LDAPResourceAdapter
com.waveset.adapter.NDSActiveSyncAdapter	com.waveset.adapter.NDSResourceAdapter
com.waveset.adapter.PeopleSoftResourceAdapter	
com.waveset.adapter.RemedyActiveSyncResourceAdapter	com.waveset.adapter.RemedyResourceAdapter
com.waveset.adapter.TopSecretActiveSyncAdapter	com.waveset.adapter.TopSecretResourceAdapter
com.waveset.exception.ConfigurationError	com.waveset.util.ConfigurationError
com.waveset.exception.IOException	com.waveset.util.IOException

非推奨のコンストラクタ	代替
com.waveset.exception.XmlParseException	com.waveset.util.XmlParseException
com.waveset.object.IAPI	com.waveset.adapter.iapi.IAPI
com.waveset.object.IAPIProcess	com.waveset.adapter.iapi.IAPIFactory
com.waveset.object.IAPIUser	com.waveset.adapter.iapi.IAPIUser
com.waveset.object.RemedyTemplate	
com.waveset.object.ReportCounter	
com.waveset.object.SourceManager	com.waveset.view.SourceAdapterManageView
com.waveset.security.authn.LoginInfo	com.waveset.object.LoginInfo
com.waveset.security.authn.SignedString	com.waveset.util.SignedString
com.waveset.security.authn.Subject	com.waveset.object.Subject
com.waveset.security.authz.Permission	com.waveset.object.Permission
com.waveset.security.authz.Right	com.waveset.object.Right
com.waveset.util.Debug	com.sun.idm.logging.Trace
com.waveset.util.HtmlUtil	com.waveset.ui.util.html.HtmlUtil
com.waveset.util.ITrace	com.sun.idm.logging.Trace

非推奨のメソッドとフィールド

ここで示す表は、このリリースで非推奨になったすべてのメソッドとフィールドの一覧です。メソッドとフィールドはクラス名によって並べ替えてあります。

「**代替**」列のデータには、次の種類の情報が含まれる場合があります。

- 列が空白の場合、非推奨のメソッドまたはフィールドの代替はありません。
- クラス名が示されていない場合、代替のメソッドまたはフィールドは、非推奨のメソッドまたはフィールドと同じクラスで定義されます。
- 代替のメソッドまたはフィールドが、非推奨のメソッドまたはフィールドと異なるクラスで定義される場合、Javadoc の構文を使って代替を示しています。たとえば、com.waveset.adapter.ADSIResourceAdapter クラスの `getBaseContextAttrName()` メソッドは非推奨になりました。その代替メソッドは `com.waveset.adapter.ResourceAdapter#ResourceAdapter()` のように示されています。

  次のように指定します。

- `com.waveset.adapter` はパッケージ名です。
- `ResourceAdapter` はクラス名です。
- `ResourceAdapter()` はメソッドと引数のリストです。

com.waveset.adapter.AccessManagerResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
handlePDException(Exception)	handlePDException(PDException)

com.waveset.adapter.ACF2ResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.ActiveSync

非推奨のフィールド	代替
RA_UPDATE_IF_DELETE	

com.waveset.adapter.ActiveSyncUtil

非推奨のメソッド	代替
getLogFileFullPath()	

com.waveset.adapter.ADSIResourceAdapter

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
buildEvent(UpdateRow)	com.waveset.adapter.iapi.IAPIFactory#getIAPI(Map,Map,ResourceAdapterBase)
getBaseContextAttrName()	com.waveset.adapter.ResourceAdapter#getBaseContexts()
RA_UPDATE_IF_DELETE	com.waveset.adapter.ActiveSync#RA_DELETE_RULE

com.waveset.adapter.AgentResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.AIXResourceAdapter.BlockAcctIter

非推奨のメソッド	代替
BlockAcctIter(AIXResourceAdapter,CaptureList)	BlockAcctIter(CaptureList)
BlockAcctIter(int,CaptureList)	BlockAcctIter(CaptureList)

com.waveset.adapter.AuthSSOResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.ClearTrustResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.DatabaseTableResourceAdapter

非推奨のフィールド	代替
RA_PROCESS_NAME	com.waveset.adapter.ActiveSync#RA_PROCESS_RULE

com.waveset.adapter.DB2ResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.DominoResourceAdapter

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
buildEvent(UpdateRow)	com.waveset.adapter.iapi.IAPIFactory#getIAPI(Map,Map,ResourceAdapterBase)
RA_UPDATE_IF_DELETE	com.waveset.adapter.ActiveSync#RA_DELETE_RULE

com.waveset.adapter.DominoResourceAdapterBase

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.ExampleTableResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.GenericScriptResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.GetAccessResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.HostConnectionPool

非推奨のメソッド	代替
getConnection(HostAccessLogin)	com.waveset.adapter.HostConnPool#getAffinityConnection(HostAccessLogin)
releaseConnection(HostAccess)	com.waveset.adapter.HostConnPool#releaseConnection(HostAccess)

com.waveset.adapter.HostConnPool

非推奨のメソッド	代替
getConnection(HostAccessLogin)	getAffinityConnection(HostAccessLogin)
putFree()	

com.waveset.adapter.iapi.IAPIFactory

非推奨のメソッド	代替
getIAPIProcess(Map,Map,String,Resource)	getIAPI(Map,Map,String,ResourceAdapterBase)
getIAPIProcess(Element)	
getIAPIUser(Element)	
getIAPIUser(Map,Map,String,Map)	getIAPI(Map,Map,String,ResourceAdapterBase)
getIAPIUser(Map,Map,String,Resource)	getIAPI(Map,Map,String,ResourceAdapterBase)

com.waveset.adapter.IDMResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.INISafeNexessResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.LDAPResourceAdapterBase

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
addUserToGroup(LDAPObject,String,String)	addUserToGroup(String,String,String)
buildBaseUrl()	
buildBaseUrl(String)	
buildEvent(UpdateRow)	
getAccountAttributes(String)	
getBaseContextAttrName()	com.waveset.adapter.ResourceAdapter#getBaseContexts()

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
getGroups(Name,String,Vector,Vector)	getGroups(String,String,Vector,Vector)
getLDAPAttributes(String,DirContext[],String)	getLDAPAttributes(String,DirContext,String,String[])
getLDAPAttributes(String,DirContext[])	getLDAPAttributes(String,DirContext,String,String[])
RA_PROCESS_NAME	com.waveset.adapter.ActiveSync#RA_PROCESS_RULE
removeNameFromAttribute(DirContext,Name,Attribute)	removeNameFromAttribute(DirContext,String,boolean,Attribute)
removeUserFromAllGroups(Name,String,WavesetResult)	removeUserFromAllGroups(String, boolean,String,WavesetResult)
removeUserFromGroup(DirContext,Name,String,String,Attributes)	removeUserFromGroup(DirContext, String,boolean,String,String,Attributes)
removeUserFromGroups(Name,Vector,String, WavesetResult)	removeUserFromGroups(String, boolean,Vector,String,WavesetResult)

com.waveset.adapter.MySQLResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.NaturalResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.NDSResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
buildEvent(UpdateRow)	
getBaseContextAttrName()	com.waveset.adapter.ResourceAdapter#getBaseContexts()

com.waveset.adapter.ONTDirectorySmartResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.OS400ResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.PeopleSoftComponentActiveSyncAdapter

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
DEFAULT_AUDIT_STAMP_FORMAT	
DEFAULT_AUDIT_STAMP_START_DATE	
getAccountAttributes(String)	
getUpdateRows(UpdateRow)	getUpdateRows(UpdateRow)
RA_AUDIT_STAMP_FORMAT	

com.waveset.adapter.RACFResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.RASecureConnection

非推奨のメソッド	代替
ExchangeAuth(boolean)	ExchangeAuth(boolean,byte[])

com.waveset.adapter.RedHatLinuxResourceAdapter.BlockAcctIter

非推奨のメソッド	代替
BlockAcctIter(int,CaptureList)	BlockAcctIter(SVIDResourceAdapter,CaptureList)

com.waveset.adapter.RequestResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.ResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	
getBaseContextAttrName()	getBaseContexts()

com.waveset.adapter.ResourceAdapterBase

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	
getAdapter(Resource,LighthouseContext)	getAdapterProxy(Resource,LighthouseContext)
getAdapter(Resource,ObjectCache,WSUser)	getAdapterProxy(Resource,ObjectCache)
getAdapter(Resource,ObjectCache)	getAdapterProxy(Resource,LighthouseContext)
getBaseContextAttrName()	getBaseContexts()
isExcludedAccount(String,Rule)	com.waveset.adapter.ResourceAdapterProxy#isExcludedAccount(String, Map,ResourceOperation,Rule)
isExcludedAccount(String)	com.waveset.adapter.ResourceAdapterProxy#isExcludedAccount(String, Map,ResourceOperation,Rule)

com.waveset.adapter.ResourceAdapterProxy

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	
getBaseContextAttrName()	getBaseContexts()

com.waveset.adapter.ResourceManager

非推奨のメソッド	代替
getResourceTypes()	getResourcePrototypes() getResourcePrototypes(ObjectCache,boolean)
getResourceTypeStrings()	getResourcePrototypeNames(ObjectCache)

com.waveset.adapter.SAPHRActiveSyncAdapter

非推奨のフィールド	代替
RA_PROCESS_NAME	com.waveset.adapter.ActiveSync#RA_PROCESS_RULE

com.waveset.adapter.SAPResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
unexpirePassword(String,WavesetResult)	unexpirePassword(String, String,String,WavesetResult)
unexpirePassword(WSUser,WavesetResult)	unexpirePassword(String, String,String,WavesetResult)

com.waveset.adapter.ScriptedConnection

サブクラス	非推奨のメソッド	代替
Script	hasNextToken()	
Script	nextToken()	
ScriptedConnection	disConnect()	com.waveset.adapter.ResourceConnection#disconnect()
ScriptedConnectionFactory	getScriptedConnection(String,HashMap)	com.waveset.adapter.ScriptedConnectionPool#getConnection(HashMap,String,long,boolean)
SSHConnection	disConnect()	disconnect()
TelnetConnection	disConnect()	disconnect()

com.waveset.adapter.ScriptedHostResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.SkeletonResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.SMEResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.SQLServerResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.SunAccessManagerResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	
getBaseContextAttrName()	com.waveset.adapter.ResourceAdapter#getBaseContexts()

com.waveset.adapter.SVIDResourceAdapter.BlockAcctIter

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
BlockAcctIter(int,CaptureList)	BlockAcctIter(CaptureList)
BlockAcctIter(SVIDResourceAdapter,CaptureList)	BlockAcctIter(CaptureList)

com.waveset.adapter.SybaseResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.TestResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.TopSecretResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
hasError(String,String)	hasError(String,String,String)
login(HostAccess hostAccess)	login(HostAccess,ServerAffinity)

com.waveset.adapter.VerityResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.adapter.XMLResourceAdapter

非推奨のメソッド	代替
getAccountAttributes(String)	

com.waveset.msgcat.Catalog

非推奨のメソッド	代替
getMessage(String,Object[],Locale)	format (Locale,String,Object[])
getMessage(Locale,String,Object[])	format (Locale,String,Object[])
getMessage(Locale,String)	format (Locale,String)
getMessage(String,Locale)	format (Locale,String)
getMessage(String,Object[])	format (Locale,String,Object[])

com.waveset.object.Account

非推奨のメソッド	代替
getUnowned()	hasOwner()
setUnowned(boolean)	setOwner(WSUser)

com.waveset.object.AccountAttributeType

非推奨のメソッド	代替
getAttrType()	getSyntax()
setAttrType(String)	setSyntax(String) setSyntax(Syntax)

com.waveset.object.Attribute

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
BLOCK_SIZE	BLOCK_ROWS_GET BLOCK_ROWS_LIST
EVENTDATE	EVENT_DATETIME
EVENTTIME	EVENT_DATETIME

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
getDbColumnLength()	
getDbColumnName()	
STARTUP_TYPE_AUTO	com.waveset.object.Resource#STARTUP_TYPE_AUTO
STARTUP_TYPE_AUTO_FAILOVER	com.waveset.object.Resource#STARTUP_TYPE_AUTO_FAILOVER
STARTUP_TYPE_DISABLED	com.waveset.object.Resource#STARTUP_TYPE_DISABLED
STARTUP_TYPE_MANUAL	com.waveset.object.Resource#STARTUP_TYPE_MANUAL
STARTUP_TYPES	com.waveset.object.Resource#STARTUP_TYPES
STARTUP_TYPES_DISPLAY_NAMES	com.waveset.object.Resource#STARTUP_TYPES_DISPLAY_NAMES

com.waveset.object.AttributeDefinition

非推奨のメソッド	代替
AttributeDefinition(String,String)	AttributeDefinition(String,Syntax)
setAttrType(String)	setSyntax(Syntax)

com.waveset.object.AuditEvent

非推奨のメソッド	代替
setAttributeMap(Map)	setAuditableAttributes(Map)
addAuditableAttributes(AccountAttributeType[], WSAttributes)	setAuditableAttributes(Map)
getAttributeMap()	getAuditableAttributes()

非推奨のメソッド	代替
getAttributeValue(String)	getAuditableAttributes()
setAccountAttributesBlob(Map)	setAccountAttributesBlob(Map,Map)
setAccountAttributesBlob(WSAttributes,List)	setAccountAttributesBlob(WSAttributes,WSAttributes,List)

com.waveset.object.CacheManager

非推奨のメソッド	代替
getAllObjects(Type,AttributeCondition[])	listObjects(Type,AttributeCondition[])
getAllObjects(Type,WSAttributes)	listObjects(Type,WSAttributes)
getAllObjects(Type)	listObjects(Type)

com.waveset.object.Constants

非推奨のフィールド	代替
MAX_SUMMARY_STRING_LENGTH	

com.waveset.object.EmailTemplate

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
setToAddress(String)	setTo(String)
getFromAddress()	getFrom()
getToAddress()	getTo()
setFromAddress(String)	setFrom(String)
VAR_FROM_ADDRESS	VAR_FROM
VAR_TO_ADDRESS	VAR_TO

com.waveset.object.Form

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
EL_HELP	com.waveset.object.GenericObject#toMap(int)
getDefaultDataType()	getDefaultSyntax()
getType()	getSyntax()
setType(String)	setSyntax(Syntax)

com.waveset.object.GenericObject

非推奨のメソッド	代替
toMap(boolean)	toMap(String,int)
toMap(String,boolean)	

com.waveset.object.LoginConfig

非推奨のメソッド	代替
getApp(String)	getLoginApp(String)

com.waveset.object.MessageUtil

非推奨のメソッド	代替
getActionDisplayKey(String)	
getEventParmDisplayKey(String)	
getResultDisplayKey(String)	
getTypeDisplayKey(String)	com.waveset.ui.FormUtil#getTypeDisplayName(LighthouseContext,String)

com.waveset.object.RepositoryResult

非推奨のメソッド	代替
get(int)	next()
getId(int)	
getName(int)	
getObject(int)	
getRowCount()	
getRows()	
seek(int)	hasNext() next()
sort()	

com.waveset.object.RepositoryResult.Row

非推奨のメソッド	代替
getSummaryAttributes()	getAttributes()

com.waveset.object.ResourceAttribute

非推奨のメソッド	代替
setType(String)	setSyntax(Syntax)

com.waveset.object.TaskInstance

非推奨のフィールド	代替
DATE_FORMAT	com.waveset.util.Util#stringToDate(String,String) com.waveset.util.Util#getCanonicalDate(Date) com.waveset.util.Util#getCanonicalDate(Date,TimeZone) com.waveset.util.Util#getCanonicalDate(long)
VAR_RESULT_LIMIT	setResultLimit(int) getResultLimit()
VAR_TASK_STATUS	

com.waveset.object.TaskTemplate

非推奨のメソッド	代替
setMode(String)	setExecMode(String)
setMode(TaskDefinition.ExecMode)	setExecMode(TaskDefinition,ExecMode)

com.waveset.object.Type

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
AUDIT_CONFIG	
AUDIT_PRUNER_TASK	
AUDIT_QUERY	
DISCOVERY	
getSubtypes()	getLegacyTypes()
NOTIFY_CONFIG	
REPORT_COUNTER	
SUMMARY_REPORT_TASK	
USAGE_REPORT	
USAGE_REPORT_TASK	

com.waveset.object.UserUIConfig

非推奨のメソッド	代替
getCapabilityGroups()	
getAppletColumns()	getAppletColumnDefs()
getCapabilityGroup(String)	
getCapabilityGroupNames()	
getFindMatchOperatorDisplayNameKeys()	
getFindMatchOperators()	
getFindResultsColumns()	
getFindResultsSortColumn()	
getFindUserDefaultSearchAttribute()	
getFindUserSearchAttributes()	
getFindUserShowAttribute(int)	
getFindUserShowCapabilitiesSearch(int)	
getFindUserShowDisabled(int)	
getFindUserShowOrganizationSearch(int)	
getFindUserShowProvisioningSearch(int)	
getFindUserShowResourcesSearch(int)	
getFindUserShowRoleSearch(int)	

com.waveset.object.ViewMaster

非推奨のメソッド	代替
ViewMaster()	ViewMaster(LighthouseContext)
ViewMaster(String,String)	ViewMaster(LighthouseContext)
ViewMaster(Subject,String)	ViewMaster(LighthouseContext)

com.waveset.session

サブクラス	非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
Session	listApprovers()	getAdministrators(Map)
	listControlledApprovers()	getAdministrators(Map)
	listSimilarApprovers(String adminName)	getAdministrators(Map)
SessionFactory	getApp(String)	getLoginApp(String)
	getApps()	getLoginApps()
WorkflowServices	ARG_TASK_DATE	com.waveset.object.Attribute#DATE

com.waveset.task.TaskContext

非推奨のメソッド	代替
getAccessPolicy()	
getRepository()	

com.waveset.ui.util.FormUtil

非推奨のメソッド	代替
getAdministrators(Session,List)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getAdministrators(Session,Map)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getApplications(LighthouseContext,List)	getApplications(LighthouseContext,Map)
getApplications(LighthouseContext)	getApplications(LighthouseContext,Map)
getApproverNames(Session,List)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getApproverNames(Session)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getApprovers(Session,List)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getApprovers(Session)	getUsers(LighthouseContext,Map)

非推奨のメソッド	代替
getCapabilities(LighthouseContext,List,Map)	getCapabilities(LighthouseContext,Map)
getCapabilities(LighthouseContext,List)	getCapabilities(LighthouseContext,Map)
getCapabilities(LighthouseContext,String,String)	getCapabilities(LighthouseContext,Map)
getCapabilities(LighthouseContext)	getCapabilities(LighthouseContext,Map)
getObjectNames(LighthouseContext,String,List,Map)	getObjectNames(LighthouseContext,String,Map)
getObjectNames(LighthouseContext,String,List)	getObjectNames(LighthouseContext,String,Map)
getObjectNames(LighthouseContext,String,String,String,List,Map)	getObjectNames(LighthouseContext,String,Map)
getObjectNames(LighthouseContext,String,String,String,List)	getObjectNames(LighthouseContext,String,Map)
getObjectNames(LighthouseContext,Type,String,String,List,Map)	getObjectNames(LighthouseContext,String,Map)
getObjectNames(LighthouseContext,Type,String,String,List)	getObjectNames(LighthouseContext,String,Map)
getOrganizations(LighthouseContext,boolean,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizations(LighthouseContext,boolean)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizations(LighthouseContext,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizations(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,boolean,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,boolean)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizationsDisplayNamesWithPrefixes(LighthouseContext,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizationsDisplayNamesWithPrefixes(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)

非推奨のメソッド	代替
getOrganizationsWithPrefixes(LighthouseContext, List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getOrganizationsWithPrefixes(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getSimilarApproverNames(Session,String)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getSimilarApproverNames(Session)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getSimilarApprovers(Session,String)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getSimilarApprovers(Session)	getUsers(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizations(LighthouseContext, List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizations(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsDisplayNamesWithPrefixes(LighthouseContext,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsDisplayNamesWithPrefixes(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsWithPrefixes(LighthouseContext,List)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedOrganizationsWithPrefixes(LighthouseContext)	getOrganizationsDisplayNames(LighthouseContext,Map)
getUnassignedResources(LighthouseContext,List, List)	getUnassignedResources(LighthouseContext,Map)
getUnassignedResources(LighthouseContext,String,List)	getUnassignedResources(LighthouseContext,Map)
getUnassignedResources(LighthouseContext,String)	getUnassignedResources(LighthouseContext,Map)

com.waveset.ui.util.html

サブクラス	非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
Component	isNoWrap()	
	setHelpKey(String)	
	setNoWrap(boolean)	
HtmlHeader	NORMAL_BODY	
MultiSelect	isLockhart()	
	setLockhart(boolean)	
WizardPanel	setPreviousLabel(String)	setPrevLabel(String)

com.waveset.util.JSSE

非推奨のメソッド	代替
installIfAvailable()	

com.waveset.util.PdfReportRenderer

非推奨のメソッド	代替
render(Element,boolean,String,OutputStream)	render(Element,boolean,String,OutputStream, String,boolean)
render(Element,boolean,String)	render(Element,boolean,String,String,boolean)
render(Report,boolean,String,OutputStream)	render(Report,boolean,String,OutputStream,String,boolean)
render(Report,boolean,String)	render(String,boolean,String,String,boolean)

com.waveset.util.Quota

非推奨のメソッド	代替
getQuota()	

com.waveset.util.ReportRenderer

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
renderToPdf(Report,boolean,String,OutputStream)	renderToPdf(Report,boolean,String,OutputStream,String,boolean)
renderToPdf(Report,boolean,String)	renderToPdf(Report,boolean,String,String,boolean)

com.waveset.util.Trace

非推奨のメソッド	代替
data(long,Object,String,byte[])	com.sun.idm.logging.trace.Trace#data(long,String,byte[])
entry(long,Object,String,Object[])	com.sun.idm.logging.trace.Trace#entry(long,String,Object[])
entry(long,Object,String,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#entry(long,String)
entry(long,Object,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#entry(long,String)
exception(long,Object,String,t)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#throwing(long,String,Throwable) com.sun.idm.logging.trace.Trace#caught(long,String,Throwable)
exit(long,Object,String,boolean)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#exit(long,String,boolean)
exit(long,Object,String,int)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#exit(long,String,int)
exit(long,Object,String,long)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#exit(long,String,long)
exit(long,Object,String,Object)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#exit(long,String,Object)
exit(long,Object,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#exit(long,String)

非推奨のメソッド	代替
getTrace()	com.sun.idm.logging.trace.TraceManager#getTrace(String)
getTrace(Class)	com.sun.idm.logging.trace.TraceManager#getTrace(String)
getTrace(String)	com.sun.idm.logging.trace.TraceManager#getTrace(String)
level1(Class,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level1(String)
level1(Object,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level1(String)
level2(Class,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level2(String)
level2(Object,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level2(String)
level3(Class,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level3(String)
level3(Object,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level3(String)
level4(Class,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level4(String)
level4(Object,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#level4(String)
variable(long,Object,String,String,boolean)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#variable(long,String,String,boolean)
variable(long,Object,String,String,int)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#variable(long,String,String,int)
variable(long,Object,String,String,long)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#variable(long,String,String,long)
variable(long,Object,String,String,Object)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#variable(long,String,String,Object)
void info(long,Object,String,String)	com.sun.idm.logging.trace.Trace#info(long,String,String)

com.waveset.util.Util

非推奨のメソッドまたはフィールド	代替
DATE_FORMAT_CANONICAL	stringToDate(String,String) getCanonicalDate(Date) getCanonicalDate(Date,TimeZone) getCanonicalDate(long)
debug(Object)	
getCanonicalDateFormat()	stringToDate(String,String) getCanonicalDate(Date) getCanonicalDate(Date,TimeZone) getCanonicalDate(long)
getOldCanonicalDateString(Date,boolean)	getCanonicalDateString(Date)
rfc2396URLPieceEncode(String,String)	com.waveset.util.RFC2396URLPieceEncode#encode(String,String)
rfc2396URLPieceEncode(String)	com.waveset.util.RFC2396URLPieceEncode#encode(String)

com.waveset.workflow.WorkflowContext

非推奨のフィールド	代替
VAR_CASE_TERMINATED	com.waveset.object.WFProcess#VAR_CASE_TERMINATED